『いや、私の事は決して御案じ下さるには及びません。全く何とも思つては居りませんから……。併し私はこのまゝお目にかゝらずにお暇致しませう。どうぞ御主人にも鍋島さんにも、よろしく仰しやつて頂きます。』

『さうですか……それぢやアこの上お留申すよりは……ねえ、田鶴さん。』

『さうでございますね。あんなに飲でるんですから、この上また失禮があつては……折角お呼申して置ながら、全く申譯がございませんが、どうぞ惡感をお持遊ばさないやうに――』

『そんな事は斷じて有ません。』

『姉さん、貴女はこんな事始めてゞすから、嘸ねえ……。今までどんなに呑んでも、確として居る方なんですけれども……。ほんとに私、姉さんにもお氣の毒ですわ。』と頻に取なさうとして居る。

『いや、それではお暇致します。』

正木は二人に挨拶して、倭文子の上に心を殘しながら、何氣なく久松邸を辭して出る。

この時喬と鍋島は尙庭の中にあつた。鍋島はそれと明さまには云はなかつたが、大いに人生の誤解について喬に說いて居た。併し喬は多くを語らず、また自分の意志の說明をしなかつたが、友の熱誠にはいくらか心が折れたらしく、彼は遂に自分の今夜の態度を酒の醉に歸して、また再び別盃を傾くべく、鍋島に伴はれて座敷へ引返して來たのである。

これより先倭文子は正木を送り出して、しよんぼり座敷へ歸つて來たが、殆んど自分の身の危機の迫つたかの如く感じ、そこへ倒れるやうに坐つたまゝ、煙へ返るほど切ない胸を抱て居た。田鶴子は正木を送り出したまゝ再び座敷へは歸つて來ず、また磯も勝手へでも行つたのか姿が見えぬのだ。倭文子は生れてから今まで人に荒い言葉をかけられた事も無ければ、また嫁いでからも喬に手荒く取扱はれた事はたゞの一度も無つた。良人の今夜の態度は少なからず、胸に惱を抱く倭文子の心を寒からしめたのである。

ふと思に沈む眼先へ、良人が鍋島に伴はれて緣を上らうとする姿を見ると、われに返つて慌たゞしく緣へ出たが、良人の跳足なのに心づいて、

『貴郎、お足を……一寸お待遊ばせ。』と急いで、緣端の竿にかけた手拭を外し、手水鉢の水をかけて搾つて來ると、良人の傍に跪づき、こわ〳〵足を拭取らうとする。倭文子はそのまゝ足蹴にでもされはせぬか位に案じたが、喬が素直になつて拭取らせたので取あへずほつと氣が安まつた。

『倭文子さん、何もお案じなさる事はありません。』と鍋島は務めて笑を帶びて云つて『あつさり久松君と飲直して、僕はお暇しますから、また御迷惑ですが、一ッビールを拔て下さい。』

『おや、さうでございますか。それでは……』と後を振返つて『磯！』と呼んで見たが返事がない。

この間に二人は舊の座に復したが、

『奥さん、正木君は歸りましたね。』

『は、あの只今……貴君にもよろしくと申しまして……』

『ウム、歸つたか。それは失禮をした。』と喬は前の容子と異つて居るので、倭文子は訝かりながらもまたほつとなる。

『磯ッ。』と倭文子は再び呼んで見たが返事が無い。

『田鶴さんはどこへ行きました。』と鍋島が尋ねる。

『はい、多分居室へでもまゐつたのでございませう。』と答へて『まア、磯はどうしましたか。』と自分で立上らんとする時、

『あのお呼遊ばしましてございますか。』と出て來たのは磯では無くてお富であつた。

『おゝ、お前でもいゝけれどもね、あのビールを持て來てお呉れ。』

すぐビールの栓が拔れる。喬は餘り口數を利ず、鍋島もまた全然話頭を他に轉じたが、最早先刻のやうな殺氣は無い。倭文子は出來るだけ平氣を粧つてお酌をして居た。鍋島はちよいらよい倭文子に言葉をかけるが、喬は倭文子には何にも云はず、鍋島とばかり語つて居る。この話の間も磯はまだ姿を見せぬ。田鶴子も正木が歸つたので、用が無いと見限つたのか、姿を隱したきりである。

併し磯と田鶴子の見えぬには仔細があつた。

正木貞雄は芝公園地内丸山の裏手、藤の棚を前にした久松邸を出るとすぐ辨天池の前へ來たが、山内には月に浮れて歩いてる人影が見えるので、正木もつい誘れるともなく、山内を横ぎるつもりで、大杉の木下闇の道へ入らうとした。とその時、

『正木さん。』と小聲に呼かけるものがある。

正木は振返ると、葉蔭漏る月の光にすぐお磯の顔を認めたので、

『おゝお磯さんか。』と驚ろきながら立止つて居ると、磯は正木の傍へ來て臆病らしく後を見返つたが、通行の人影はあつても、別に案ずる人もないと見たのか、ほつと吐息と共に、

『貴君、暗い方へ入つて下さいませんか。』

正木は道を外て、大杉の根元へ磯を導びく。

『私はお嬢樣には何とも申さずにそつと拔て來たんですが、……ま、どうしたらようございませう。心配で〳〵……旦那樣は貴君が平瀉へお出遊ばした事を御存知なのでございますよ。』

『さア、僕には全く思ひ出せないのだが、勿來へ出かける途中か、お尋ねした歸途にでも久松さんに出遭つたのでせう。』

『別莊へ貴君がお寄遊ばした事は、御存知にならないのでせうか。』

『どうとも分らんが、それを知つて居られる位なれば、今夜僕の顏を思ひ出してから、始めて激昂なさる筈が無いでせう。』

『さうでせうか。それならいくらか安心ですけども……。私がお嬢樣や貴君にお願して、內緒にして了つたんですから——みんな私が惡かつたんですから——そのために何かあつては、お嬢樣に申し譯が……』

『兎に角平潟で久松さんが邪推を起されて居たといふ事は事實であつて、それはその後幸ひに御自身から打消されて居つたところが、その當時平潟で遭つた男が、この正木であると今夜始めてお分りになつたゝめ、以前の邪推を復活したんぢやァないかと思ふので——』

『全くさうなんでございませうね。きつと勿來へいらつしやりがけに、平潟の町を貴分がお通り遊ばしたのを、旦那樣が御覽になつたゞけなんでございませう。』とほつとして『それならどこまでも貴分のお立寄遊ばした事は……申上ない方がようございませうね。今更申上ては却つてお疑ひを增す許に違ありませんもの。』

『さアその點は僕も心配になるのだが……既に第一歩を誤つたのが惡いので……。僕は久松さんを出る時には、只一言お嬢樣に、何事も良心の命ずるまゝになさいと申上げて來たかつたので——』

『え？　お嬢樣にどう遊ばせと仰しやるんでございます。』

『併し今打明る事もお磯さんのいふ通り、考へものであるかも知らん。僕が平潟の町で久松さんに逢つたところで、それは勿來見物の途中で……必らずしもお嬢樣をお尋したものとは限らんのだから……』

『それはもうどうにでも申上やう一ツで……』

『尤もそれも良心の許す範圍でなさいといふ事を、お嬢樣に申上て置いて下さい。お打明になる方がよいと思ふ場合には、屆よくお打明になるやうに……どこまでも姑息の事をなさるのは却つて善くないですから。』かう言さして急に思ひ出したやうに『あゝ斯うしたらどうか知らん。鍋島さんに萬事を打明て判斷を求める事にしては——？』

『さうでございますね。鍋島さんに申上る事は何でも有りませんわ。』

『それなら今夜の中にそつと鍋島さんに手紙でも出して、明日それとなく寄つて貰ふ事にした上、お嬢樣から祕密にお話をなすつたらいゝだらう。兎に角鍋島さんの耳に入れて置く事だけ

は、お嬢様のために利益だから。』

『えい、それではさういたしませう。……ちや遲くなるといけませんから――』と磯は正木に別れてそこ〳〵に引返して行く。

正木は磯に別れると、そのまゝ沈みながら山を上つて、丸山の方へ折て行つた。十三夜の月が冴返つてるので、丸山への木下闇を往來うものが絶えずある。この人々の中に紛れて、正木の後を見え隱れに慕つて行く女のある事を、正木は少しも心づかぬのだ。

やがて五重塔の側を拔て丸山へ出ると、見晴しに月は何とも云へぬ清光を投て居る。正木は暫らく切株の腰掛臺の上に、腰を卸して居ると、以前の女は、やがて時刻を測つて、自分も月見る人のやうに紛らしながら、ぶら〳〵正木の前を通りかゝつたが、始めて氣のついたやうに振返り、

『おや、正木さんぢやございませんか。』

正木は思ひがけなかつたので、驚ろきながら女を見上げたが、月を後にしてるので一寸誰か分らなかつた。

『あの田鶴でございますよ。』

『おゝ貴嬢でしたか……。今夜はいろ〳〵と御厄介になりました。』とあへや挨拶したが、どうしてこゝへ來たのかと怪みながら、心許さやその顏を打守る。

『いゝえ、ほんとに今夜はお氣の毒で……。でも貴方は今ごろまでこゝに居らつしつたのでございますか。』と莞爾して『まアいゝ按梅でした事！　私はまたあんまり月がいゝものですから、つい浮れて只今こゝまで上つてまゐつたのでございます。』

『あゝ、さうですか。』と正木は立上つて『私は大分長くこゝに居ました。』

それは嘘な事を田鶴子は好く知て居る。

『さうでございませうね。宅をお出なさいました時から、よつぽどになりますもの……。ほんとにいゝ月ぢやございませんか。』

『うかとこんなとこに居て遲くなりましたから、私はこれで失禮します。』とその儘立去らうとするので、田鶴子は慌てながら、

『でも私が來ましたつて……ようございませう。兄の事に就てお話致したい事も有りますから……　あのお歸りをお急ぎなら、お話しながら、電車のところまでお送り致しますわ。』

正木は辿も免れる口實が無いと思ふと止むなく觀念して、

『いや夫ならこゝでお話を伺ひませう。』

田鶴子は嬉しさうに、

『ではこゝは人が煩さうございますから、あちらの方へまゐりませう。』と囁やく。

正木も人に注目されるのを好まぬので、人影のない方へ伴はれて行く。

『正木さん、貴君は今日の兄の態度を何う御判斷なさいますか。』

『私は判斷に苦しむと申上るより外有りません。』

『私にはちやんと判つて居ります。お酒に醉つたのでも何でも有りません。……いつぞや兄が貴君に對して、或邪推を抱いて居ると申上ました事、お忘れではございますまいね。』

『はア……』と無愛想にいふ。

『さうすれば貴君、お判りになるぢや有りませんか。』

『併しそれとしたところで、私には今夜特にお兄さんの邪推を高めた理由を知るに苦しみます。』

『兄は平潟で貴君のお姿を見たと申してるぢや有りませんか。貴君は助川から平潟へお出遊ばしたのでございませう。』

『友人と勿來へ出かけた際平潟を通過しました。それでは多分その途中でお兄さんに行遭つたのでせう。』

『あの姉さんにはお遭遊ばさずに――？』

『はア……』

田鶴子は心の底を讀うとするやうに、ぢつと正木の顏を見たが、木下蔭で判然せぬ。

『でも兄はそれで邪推を高めたのでございませう。誰にしても貴君がその時姉さんの平潟にお出の事を御存知でしたら、お寄遊ばすと考へるのが普通ですもの……』

正木は默つて何にも云はぬ。

『貴君。』と田鶴子が媚かしく呼かけて『此間貴君は熟考した上で御返事なさると、お約束遊ばした事がございましたね。』

『え？　お約束を――？』

『あれ、貴君、兄の邪推を避て、姉さんを幸福な家庭の女王としてあげるには、どうなすつたら一番いゝかと、私から貴君に申上たではございませんか。その時貴君は熟考して御返事を遊ばすと仰しやいましたわ。』

『あゝさうでしたか。』と始めて思ひ出したやうに云つて『實はまだ考へても見ないので……』

『まア、貴君は！』と怨み聲に『あれほどお約束遊ばして置きながら……』

正木は何も約束迄したやうな覺はない。

『貴君、兄の邪推はます〳〵募るばかりでございますよ。姉さんがこの先どんな不幸の身にお

なり遊ばすかと思ふと私……』と憂はしげに俯いて『貴君、どうぞ姉さんを不幸の淵から救つてあげて下さいまし。……それも貴君の御決心一ツぢやございませんか。』

正木はなほ默つて居る。

『此間私が申上たやうになれば、兄の邪推はすぐ解て了ふのですもの。』

『併し私が妻を迎へて、直ぐお兄さんの邪推が解るといふのは、餘り單純過たお考でせう。お兄さんに邪推があるものなれば、私が妻を迎へても迎へんでも、それには關係は無い筈です。』

『でも兄が安心したら、そんな邪推も起さないに極つてますわ。』

この時態と二人の傍へ寄つて來て、田鶴子の顏を窺き込うとした黑法師がある。

『あれ！』と田鶴子は正木に寄添つていきなりその手を握りしめた。途端に、

『人を馬鹿にしてやがる！』と言捨てゝ黑法師は行過ぎたが、田鶴子はます〳〵强く男の手を握りしめるのだ。

『貴孃、何をなさいます！』と正木は聲を勵まして、握られた手を振ほどく。と田鶴子は怨をこめた含み聲で、

『でも貴君、保護して下すつてもいゝぢや有りませんか。やつぱし貴君は姉さんでなけりやアいけないんでございますか。』

正木はくわッとなつた。併しその激した顏は幸ひに田鶴子には分らぬ。たゞ犯すべからざる嚴肅な聲で、

『何を仰しやいます。貴孃は私をどういふ男と考へて居らつしやるんですか。』

田鶴子は定めて赤くなつて顏を膨らしたのだらう。併し弱身があるので折て出る。

『あら正木さん……お氣に障つたらお免し遊ばせ、私、何もそんな氣ぢやアないんですから。』と聲を震はせた。

『いえ、免すも免さんも有りません。……たゞ左なきだに人の疑を招き易いところでせう。殊に貴孃のお身體は大事です。』と態と話の的を外した。

『貴君の爲なら私の身體なんか何うなつても構ひませんわ。』

女はなか〳〵機會を捕へるのが巧だ。正木はうつかり面倒を惹起したと思つたが追つかぬ。

『そんなことを仰しやつてはいけません。遲くなるとまたお家で御心配して居らつしやるでせう。』

『家の方なんぞようございます！』

正木は一刻もこんな女と話をするのが厭だ。いきなり頭でも擲りつけて立去りたいほど虫が好ぬのだが、今倭文子の事で非常に頭を惱めて居る矢先、情なく遇へば倭文子の上にどんな祟

があるかも知れぬと思ふので、ぢつと虫を殺しながら、

『併し貴女が奥様に同情して下さるならば、多分今ごろは難儀して居らつしやるでせうから、早くお歸りになつて、何とかお取なし下さいませんか。』

『ですから私、根本に解決しようと苦心してるぢや有ませんか。』

『根本に解決すると仰しやつたところで、今夜どう解決が出來ますか。』

『貴君が夫人をお迎なさると、お極なさればいゝんですわ。』

『併し私はすぐ洋行する身體です。洋行すれば先刻も申上た通り、五年かゝるか十年かゝるか、分らない身の上で……結婚の約束をして行くなどゝは、なか〳〵思ひも寄らん事です。』

『でも、何年でも待て居るといふ方があればいゝでせう。』

『私には結婚といふやうな考は殆んど有りません。』と堪へ切れず、冷やかな調子で言放つ。

『この間は熟考すると仰しやつたでは有りませんか。』

正木は際限が無いと思ふので、

『それなら尙この問題を熟考するとしませう。や、これで失禮します。』と脫兎の如く、相手が何かいふ間もあらせず、大股に歩み去つて了つた。

田鶴子は氣を呑れて、呆氣に取れながら見送つたが、

『やつぱし姉さんの事ばかしを思つてるんだ……そつと平瀉で姉さんを訪ねる位なんだから、きつと兄さんの邪推ばかりぢやアないわ。……あゝ悔しい！』と嫉妬の足踏をしたが、また恍乎となつて『だけどもまだ熟考すると仰しやるんだから……』と思ひ廻すと、その人がたまらぬまでに懷かしいのである。

（十一）

翌る日曜日の朝、鍋島直樹は元園町に川上益荒を訪ねた。老將軍は喜び迎へて、いろ〳〵話のあつた後、談が倭文子の上に移ると、この上もない上機嫌で、

『鍋島さん、娘も善い婿が出來て仕合ものになりました。これも貴君のお盡力ぢや。夫婦中も至極都合が善さうで、姑や小姑の事も內々案じては居つたが、どうやら皆倭文を大事にして呉るさうぢやで、乃公もこんな滿足な事は有りません。』

鍋島はかう云はれると心苦しい。新夫婦の間には既に思ひもよらぬ暗流が流れて居るのである。姑の倭文子に對する仕打の甚だ面白くない事も鍋島は知つてるのだ。將軍は何にも知らずに、たゞ內端な倭文子の報告にのみ信賴して、姑の事さへもよく思つて居るらしい。

『併し倭文子さんも、久松が少し頑固な一徹の男ですし、老母がなか〳〵氣六かしい方ですか

ら、大抵の御苦勞ぢや有りますまい。』
『さうぢやらうかな。それも早う子供でも出來てくれゝばの。』
『さうです。私も最もそれを望んで居ますので……さうすれば必らず圓滿な結果を得られるのですから。』
一寸話が切れてから、
『正木君に遭つて話をしたいですから……これで。』と立上らうとすると、
『それでは今いうてやります。一寸出て居りでもすると何ぢや。』と呼鈴を鳴して女を呼び、正木の室へと命じて『昨夜、貴君と御一緒に、久松で御馳走になつて來たさうで……彼も喜こんで居つたやうぢや。』
『あゝさうでしたか。』と鍋島は苦々しげに答へる。
すぐ正木は出て來て、
『おう、鍋島さん、昨夜は失禮いたしました。』
『いや僕こそ……少し君に話したい事が有るのだが……さうだ、庭を拜借しよう。』
『それでは亭の中が善いぢやらう、春、煙草盆を持つて行つてあげい。』
春の揃へたスリッパーを穿いて鍋島は正木と共に庭へ下立つ。

馴染の深い庭なので鍋島はさつさと先へ立つて亭の中に落つく。正木が曩に藤乃の戀を斥けたところもこの亭である。正木の幼ない時には鍋島がこゝでよく彼を相手にした。正木と倭文子とはよくまたこゝで遊んだものだ。正木には全く思出の多い亭である。相對して席を占ると正木の方から、
『昨夜は途中で失禮しましたが……久松さんはあれからどうなすつたです。』
『實はその事だがね、尤も昨夜はあれでまづ無事に收まつたので、僕はまた久松とビールを飲直して歸つたが、まア大した氣がかりもあるまいと思ふがね。これから寄つて見るつもりだが……』
『あゝ、さうですか。昨夜は全く貴君のお蔭で助かりました。』
『それでだね、君も内々感づかれたらしいと思ふが、久松はどうも君に對して面白くない邪推をして居るらしいので。』
『私もそんな事ではないかと危むのです。何を根據に忌はしい邪推をされるのか、私は實に解釋に苦しみますが……』
『いや、それについて君に警告するが、實は久松に君と倭文子さんを中傷したものが有るんだ。』

正木は中傷者のあるらしいといふ事は、前に田鶴子からも聞た。併しそれは頗る曖昧だつたので、別段信用もしなかつたが、鍋島が斯くいふからはどうやら事實に相違あるまいと始めて思ふ。

『そりやァ事實ですか。』

『倭文子さんと久松との間に婚約が出來たばかりの時だつたがね、久松のところへ何ものかゞ中傷の手紙をよこしたので、僕は現にそれを見たのだ。』

正木は驚ろきながら、

『どういふ手紙ですか。』

『手紙の内容は、つまり君と倭文子さんと兼て通じて居た事が知れたところから、急に倭文子さんの縁先を求め、一方にはまた二人の間を遠ざけるため君を洋行させる内約が出來た折柄、久松の申込があつたので、巧く倭文子さんを押つけたのだといふやうな意味なのだ。』

貞雄は見る〳〵眞赤になり、

『實に怪しからん事で……何ものがそんな中傷をしたのでせう。』

『さァどうも僕にも判斷がつかんがね。何分結婚の話の纏つた時にさういふ手紙が來たので、久松は眞赤になつて緣談を斷るといふ騒だつたが、僕が立派に中傷である事を説明し、また倭文子さんや君の人物を保證したところから、久松は始めて悟つて、快よく結婚式を擧た譯だが……どうもそれがまだ心の底に殘つて居たものらしい。僕もその點が氣になるので、日光で遭つた時そつと容子をお磯から聞いて見ると、何か平潟でも妙な邪推のため迷惑した事があるといふので、こりやァ矢張君の事を根に持つてるなと、心配になつたが、幸ひその後具合がいゝといふので安心して居ると……昨夜の始末なんだ。久松は何にも云はんで罪を酒の醉に歸して居つたけれども……たしかにそれを根に持つて居ると僕は見抜たのだ。』

『はゝァ、さういふ事實が有つたんですか。なるほど久松さんの邪推の無意味でない事が分りました、併し私はそんな事があるとすると、非常に心外です。第一お孃樣にお氣毒でなりません。』と正木は拳を握詰る。

『それは僕もお察しするが、全體君は平潟で倭文子さんに逢つたかどうかね。』

『平潟の話は實はかうで、私は友人と助川から勿來へ出かけた歸途、さういふ事は何にも知りませんから、久松さん御夫婦を驚ろかす積で、突然にお訪して見たのです。所が丁度その時久松さんは海岸へ出かけられたといふ後でしたが。』と貞雄はその時の順序を詳しく話して聞した。

『ウム、さうかね。いやよく事實を打明てくれたので、その邊の筋途が明白になつたが、併し

そんな事實があるとすると……彌縫が六ケしくなるかも知れんな。』
『どうでせうか。貴君からでもこの事を包まずお話を願つては――、さうすれば私にしてもお
饗樣にしても氣が濟む譯ですが。』
『たゞどうも久松の性質が嫉妬深いらしいから、それで果して邪推を解くか、また却つて反對
の結果になるか、考へもので――』
『併し私はどうせ邪推は急に解ぬでせうから、此際姑息手段を弄する事は却つて不得策のやう
に考へますが……』
『或はさうかも知れん。それでは兎に角倭文子さんに遭つて模樣を見た上の事にしよう。』
この朝喬は九時過まで寢て起出したが、二日酔の頭が重いとて、牛乳だけ飲んだまゝで碌々
倭文子とは言葉も換さず、書齋の中へ閉籠つて了つた。
田鶴子は今朝頻りに形勢を觀望してる容子で、表面は嫂に同情を寄せ、內實探を入れるため
倭文子の居室へも來て、慰さめ顏に何かと話をして行つた。姑は無論田鶴子から昨夜の事を聞
いたらうと思はれるのに、倭文子に向つては一言も云はず、たゞ今朝はいゝ氣味だと云はぬば
かりの顏色をして居る。
昨夜磯から話を聞くと、倭文子はそつと鍋島へ手紙を出したので、今朝は心待して居るのだ

か、まだその人の姿は見えぬ。昨夜も直樹が歸つてから後を氣にして居たのに、喬は直樹の歸
るさう〳〵、そのまゝ倒れて鼾をかいて了つたので、結句救はれたやうに思ひ、床に寢せつけ
ると、今朝まで何事も無かつたのである。
この間倭文子は磯と共々いろ〳〵と考へて見たが、どうも平瀉で貞雄の訪ねて來たのを喬に
知られたといふ事實は無いらしい。またその時認められたのなら、無論喬が默つて過す筈はな
く、その日海水浴から歸つて來た時も、いつになない上機嫌であつた筈がない。たゞ事實は平瀉
の町で偶然出遭し、喬のみが顏を覺えて居たといふに過ないのであらう。さうすれば貞雄の立
寄つた事は倭文子の打明ぬ限り、喬に知れよう筈は無いのである。
二人の前には今選擇に迷ふ二ツの問題があるのだ。一ッは喬が貞雄の訪問の事實を知らぬに
しても、それを邪推して居る事は明白であるから、正木の意見通りいつそ打明た方がよくは無
いかといふ事、モ一つはよしそのために邪推を增しむる事は免れぬにしても、事實を打明る事
は、却つて幾層の疑念を深むる結果となりはせぬかと案ぜらるゝ點である。
で倭文子もこれに迷つて居るところへ、磯が頻りに事實を告る不利益を說くので、淺い女の
心から大凡それに傾むきつゝ、鍋島の來るのを心待して居る折柄、忽ち書齋に呼鈴の音が聞え
た。

倭文子はもしやこの事ではないかと、膽を冷しながら良人の書齋へ出かけて行く。日本室に羅氈を敷つめて、卓子や椅子を据た折衷風の書齋で、喬は安樂椅子に凭れ、葉卷を吹して居たか、じろり倭文子の入つて來たのを見ると、

『こゝへ掛なさい。』と傍の椅子を顎で指さし示した。

倭文子はさてこそと胸に波打せ、小さくなつて命ぜられた椅子につくと、

『倭文、私がこれまで蔭になり日向になり、お前を保護して居る事はよく知つてるだらう。……お前もまさか私を欺くやうな事はして居るまいな。』

『はい……決して——』

『お前は平潟に居る時、誰もこの近邊に來て居るものは無いと、明らかに云つた事を覺えて居るか。』

『は……い。』

『梅小路さんの家庭教師とか云つた——さう〳〵藤乃さんだつたかな、手紙の端に誰かの事を名で表はさずに書て來たのを、お前はまた立花錦子の事だと云つたな。』

『は……』

『それに間違がないか。』

『はい……私はさうと存じて申上ましたので……』

『何だか曖昧ではないか。事實はさうでなかつたのか。』

『いえ……あの……藤乃さんも多分その積でお書なすつたのだらうと存じます。……お目にかかつた時よく確めるのを忘れましたから……』

喬はじつと倭文子の顏を見て、

『併しその時私は平潟で正木に遭てるのだ。それでもお前は正木が、近所に來て居らなかつたといふのか。』

『あのそれは後から分りましたので……歸つてから始めて承知しましたのでございます。あの……助川に來て居りましたのださうで——』

『なに、助川に！』と、喬の眼はまた鋭どく輝やいた。

『はい……』

『それで平潟へはお前を訪ねるため來たのではないといふのだな。』

『は……勿來見物にまゐつたと申す事で……その歸りに何でも平潟の八幡山や、そこらを見物して歸りましたさうでございます。』

『ウム、確かにさうか……それならそれでもよい。』

双方無言となる。
『もう彼方へ行つてもよい。』と、暫らくしてから喬は冷かに云つた。
倭文子は默つて俯むいたまゝ泣始めて居たので、涙は點々と膝に落るのを拭はうともしなかつた。
『お前、泣てるな。何がそんなに悲しいのか。』
倭文子は僅かにハンケチで涙を拂つて、
『私、これが悲しくなくてどう致しませう。……私は何かのお疑を受けて居るのでございますもの。』
『今話をして分つたらいゝぢやアないか。』
『でも私、何か道ならね事でも致しましたのなら、どんな御成敗を受けましても、少しも厭ひませんけれども、全く身に覺のない事で、お疑を受けましては、何とも心――心――でございます。』と聲を震はせる。
『誰もお前の身が潔白でないとは云はん。』
倭文子は暫らく唇をのみ震はして居たが、
『でも貴郎はお心解遊ばさないのでございますもの。』

喬はたゞ無愛想に葉卷を喫して居る。倭文子は取つく島を失つた。
丁度その時礒がこわ〴〵襖を開て、
『あの鍋島様がお見えになりましてございますが……』
『おゝ、鍋島が來たか。それではこゝへ通して貰はう。』
倭文子は涙を收めて立上り、
『それでは私、お迎申してまゐりませう。』
すぐ玄關へ出て鍋島を迎へると、鍋島は玄關を上つて小聲に、
『今元園町へ上つて、正木君にも遭つて來ました。お手紙だつたので、早く來たかつたですが彼方を先にしたゝめ、つひ遲くなつて濟んでした。』
『えゝ……ま、さうでございましたか。それとも知らずに、どんなにお待申して居りましたらう。』
『兎に角一寸久松君に遭つて、すぐ貴女のお話を伺ひませう。』
鍋島は倭文子に導びかれて書齋に入る。まづ双方に昨夜の挨拶があつてから、
『ところで今日は少し君と倭文子さんに、別々に話たい事があるんだが、差支はあるまいね。』
『いや、差支はない。』

『おゝ、それでは奥さん。貴女にまづお話したいですが――』
『は……。』
『座敷へでも案内するがよからう。』
『はい、さういたしませう。それでは貴君どうぞ……』
座敷へ通るとまづ鍋島から語り出る。彼は今朝正木に話した通りに中傷の手紙の事を打明け正木と會見の次第を語り、さて倭文子にその後の有りし次第を尋ねるのである。倭文子は鍋島の來るのがせめて三十分早かつたらばと悔んでも追ひつかぬ。遺憾と懸念とに滿されつゝ、良人との今の對話の模様を語り聞かせた。鍋島も少からぬ遺憾を以て倭文子の物語を聞取つたのである。倭文子が現に良人に事實を包んで了つた以上は、今更これを自白せしむる事も妙でないと思ふので、兎に角喬に遭つた上出來るだけ邪推を解く方法を取つて見ようと考へ、また引返して書齋に出かけて行つた。
今日も喬は鍋島に多くを語らぬ。否彼自身には語るほどの材料がないので、要するに彼の心事は唯邪推といふに歸着する外はなく、何も根據があるのではないから、鍋島に自分の臆測を語る事は遺に屑しとせぬのである。今朝も妻に對しては飽迄冷やかに振舞つたが、倭文子の泣て心の潔白を愬ふる言葉を聞いては、さすが邪推の念も薄らがざるを得ぬので、たゞ自分の

尊嚴を傷けぬため、故らに情ない態度を改めなかつたのだ。畢竟喬は半信半疑で居るに過ぎぬから、衡はどちらへでも動くので、鍋島にいろ〳〵說れると、自分の邪推を恥づるやうな氣になり、又その忠言を無にする事は出來なくなるのである。で、この會見の結果はまづ双方の滿足に終り、鍋島から倭文子に向つて融和の實を表してくれと求むるのに對しても異議がないので、早速倭文子をこゝへ呼入た。こゝで鍋島は倭文子の手を喬の手に置いて握手せしめる。それを見ると快よげに笑つた。
『さア、それでは君、祝杯を擧げゞばなるまい。倭文子さん。一つまたビールを抜いて下さい。我輩は何かの機會を捕まへては、飲む事を考へればいゝので……あはゝゝ。』
喬は苦笑して、
『倭文、それでは仲直りに座敷で一杯やるとしよう。用意をしてくれ。』
『はい。』と倭文子はいそ〳〵と退き行く。

（十二）

鍋島が中間に立つたので、喬と倭文子の間は幸ひに一時融和されたけれども、再び舊の如き間柄には返らなかつた。喬は始終猜疑の眼を以て妻を見るので、從つて倭文子に冷やかに當る

場合が多くなつた。尤も母や田鶴子の手前ではなるたけさういふ風を見せまいと勉めて居るが家人の注目を免かれぬ事實は、喬が近來夜間外出勝になつて、折々は酒臭い息を吹いて歸つて來る事がある。尤もその外には表面格別の變化もなく、時は日一日と滑つて行くのだ。

節は既に十月に入て、この間に立花錦子と松平子爵の盛んな婚姻式が擧られた。倭文子は錦子が子爵夫人として、無得意に交際社會を驅廻るだらうと思ひ浮べて見ると現在の我身に引比べて、何といふ境遇の相違が二人の上に來たらうと驚くのである。

錦子の結婚のあつた間もなく、鍋島直樹はいよ〳〵横濱から渡英の途に上つた。心に泣いて鍋島の洋行を送つたのは實に倭文子である。倭文子は良人と共に横濱まで見送に行つたので、正木も横濱まで送つたが、倭文子は勉めて正木と顏を合せるのを避けて居た。

倭文子に取つては正木は最早表面賴る事の出來ない人で、現在賴にする人と云つては、鍋島の母一人のみの心細い身の上となつたのである。鍋島は出發前に一切の事情を母に打明け、倭文子の後來を託して行つたが、併しそれがなくとも鍋島老夫人は、倭文子の大なる同情者なのであつた。

藤乃はその後二度ばかり訪ねて來たが、夫婦間の面白くない消息を解して、一方ならず胸を傷めて居る。一度田鶴子にも紹介されたが、田鶴子と藤乃とは、素より氣の合さうな事はなく

たゞ形式的の挨拶を仕合ふ位に止まつたのである。

倭文子は今日まで殆ど何處へも出ずに、内にのみ垂籠て居るので。それは一度藤乃を訪ねた事があつたが、正木に遭ふため里へ行つたかのやうに、良人の邪推を受たので、それからは外出を慎み、元園町へも行かずに居るのだ。たゞ磯が時々川上家との間を往來してるだけに止まるが、これも喬には面白くないらしく、このごろでは磯を惡む素振さへ隱れないのである。

これより先田鶴子は正木に對し、例の熟考を求めて置た事につき、鍋島の立つ前大膽にも正木に遭うとして、一人元園町を訪れた事がある。併し正木は生憎と留守だつたので、富美子を相手に正木の歸を待受て居た。併したうとう正木は歸らないので、しびれを切して歸つて來たが、その代り一個の分捕品を持つて來た。それは富美子が寫眞帖や、手函に入れたいろ〳〵の寫眞を持つて來て見せた中に、正木が最近に寫したと思はるゝ、中版の寫眞のあつたのを富美子の目を掠めて、そつと持歸つたのであつた。それからは件の寫眞を大事に机の抽斗へ直して置ては、時々取出して見つめて居るので、今日もそれを取出すと、暫らく眺めて思案して居たが、

『あゝさうだ。手紙をあげるとしようかしら。』

かう云つてまた思案して居たが、たうとう卷紙を取出し、何か長々しい手紙を一時半ばかり

かゝつて書終つた。尤も二度許りは書直したが、云ふ迄もなく艶書なのであらう。封の表には正木貞雄の宛名を書いて態と差出人の名は記さず、寫眞は舊の抽斗に收め、自分から手紙を懷に入れて外へ出たが、それを人知れず郵便函へ入れて來ると、今度は自分の居室へは歸らずにその足で嫂の居室を訪れた。

田鶴子のやうな隨分厚かましい女が、今まで倭文子に對して、表面正木に對する戀の周旋を依頼せぬ事は不思議と云はねばならぬ。遏がにそれは女の自負心と、娘らしい羞恥の念の手傳つたゝめであらう。併し今日は手紙を出して來ると、何か倭文子の助力を求めるつもりで、また倭文子が自分に助力する事は當然であるといふやうな考を以て、嫂の居室へ入つて來たのである。

倭文子は一人で縫ものをして居たが、田鶴子はその傍へべたり坐ると、四邊を見廻はして、

『あのお磯は？』

『ちよいと使に……』

『元園町ぢやなくつて？』

すぐそんなに取るのかと、倭文はは情なく、

『いゝえ、買物にやつたのよ。』

『さう。』と倭文子の針の運びを見て居たが、『正木さんはあれから一寸も入つしやいませんね。却つて入つしやる方がいゝんですのに……姉さん。貴女來ないやうに仰しやつたんぢやなくつて。』

『いゝえ。』

『却つて兄さんが變に思ふわ。……ほんとに兄さんといへばこのごろはどうしたんでせう。昨夜もお酒を呑で、よつぽど遲く歸つていらつしつたわね。』

田鶴子はとうに寢んで居た筈なのに、どうして氣を注て居たのだらう。倭文子はこんな事を知られるのが厭なので、默つて小さな溜息を吐く。

『姉さん。私ね、兄さんの邪推を綺麗に捨させるには、正木さんが結婚なさればいゝと思つてよ。私、正木さんにもさうお話したんですけども……』

正木は田鶴子に迫られて居る事をまだ倭文子には打明て居らぬ。また打明る機會が無かつたのである。併し正木から聞かなくても倭文子はかう云はれると、明らかに田鶴子の意志を忖度する事が出來るのだ。

『姉さん、兄さんが妙な邪推さへして無かつたら、貴女も厭な思をなさらなくつて濟むでせう。姉さんからも正木さんにお勸めなさるといゝわ。姉さんがさうしろと仰しやつたら、あの方も

きつとさうなすつてよ。』
『ですけども正木は來年洋行する身體ですから……』
『だつて約束だけでもいゝわ。……あの方がさうなすつて、また一方には、――私も影日向から兄を說たら、すぐ圓滿な結果を得る事は分つてゝよ。……この先若し兄の邪推を嵩じさせて放つて置いたら、姉さん、どんな結果になるか――私、もう知りませんから……兄ばかりか、母も妙に思つてるんですもの。』
田鶴子は萬一嫂が自分に助力しなければ、自分もどんな事をするか知れぬとの意を仄めかすのだ。
倭文子は縫物の手を止めて默つて居る。
『これまでゞも姉さん。私どんなに姉さんの爲めに盡して居たか知れなくつてよ。お母さんだつても、全く私が牽制してるんだわ。』
『それやァ田鶴さん……』と少し聲が震へ、『私も貴孃には蔭ながらお禮をしてるのよ。それを決して忘れはしませんから……』と涙ぐむ。
田鶴子は感謝の涙と見たのであらう、
『ぢや姉さん。』と暫くためらつて『どうぞ正木さんに貴女から……、ね、いゝでせう。私、これも姉さんの爲めに謀るんだわ。』

『このごろちつとも正木に遭ふ機會がないものですから。』
『貴女、お里へ行つしつたらいゝんだわ。』
その里へ度々行れる位ならば、倭文子も或は斯程の人知れぬ苦勞はしないであらう。默つて居ると、
『もしか兄さんの事をお案じなさるなら、そつと行つしつたらいゝでせう。私、母によく云つときますから……ね、母がお里へ行けと云へば、貴女、心置なくいらつしやれるでせう。』
『それは……お母樣が仰しやればですけれ共……』と迷惑の面持で、『ですけれども正木は一度彼地へ行けばいつ歸つて來るか、分らない身體なんですし……。約束だけで滿足なさる方があるにしても、その方のため考ものぢやないでせうか。』
『でもそりやァその方の力で正木さんを動かす事は出來ると思つてよ。假へば三年のところは二年に、五年のところは三年にといふ風に、その方の力次第で動かせない事ないと思つてよ。』
わが正木はそんな男ではないと思ひながら倭文子は默つて了ふ。
『私、きつと姉さんの力になりますから――』と眼に物言せて、『實はね、私、今正木さんに手紙をあけたのよ。』

倭文子の眸子はきらりと光る。

＊　＊　＊　＊

この話のあつた翌る日不思議な事があつた。それは喬が出勤してから一時間ほどの後、姑のお石がいつにない機嫌の善い顔で倭文子の居室へ來ると、

『倭文さん。』と優しく聲をかけるのだ。

『おや、お母様、御用事なれば私が參りますのに……』

『いや、用といふほどの事もないけれども、お前暫らくお里へ御無沙汰をして居るやうだから、今日今から行つてお出ではどうです。それに丁度お前に持つてつて貰ひたいものがあるのだから。』

さてはと昨日の田鶴子の話を思ひ起して、何とも知れぬ厭な氣になつたが、何氣なく、

『いゝえ、格別の用もないにまゐりませんでも——』

『それ、それがあんまり遠慮深いといふものですよ。お里へ行くに、不思議はないではないかね。お前は勝手で善いにしても、何だか私でも意地惡をしてお前をやらないやうでいけないからさ。』

『お母様、まさかそんな事は……それに良人の留守に勝手にまゐりますのも心苦しうございますし……』

『喬の方はどうにでも私がします。どうせ四時でなければ歸つて來ないのだもの、それまでにお前が歸つてお出なら、喬に内緒にしても濟むぢやアないかね。その方は私が引受るから……こつちはあんまり義理知らずのやうに思はれるのがいやだから。それにね、丁度今朝京都の姪のところから、松茸を送つてくれたのが屆いたところで、少しばかりだが、元園町へお裾分をしたいと思ふから、お前が行つてお呉だと都合がよいのですよ。』

かう云はれると無下に母の言葉を拒む事も出來ぬ。内實また實家へ尋ねたい心も手傳つた、

『さうでございますか……。父がどんなにか喜ぶ事でございませう。ではお使をかねて一寸行つてまゐる事に致しませう。』

『あゝ、それがいゝ、さうしておくれよ。』とお石は滿足の樣子で引返しゆく。

倭文子はすぐ磯を相手に仕度をして居るところへ、田鶴子も出て來たが、磯を憚つて昨日の話はせず、たゞ隙を見て嫂の耳元に『昨日の事よござんすね。』と投るやうに囁やいた。

やがて松茸の籠を手土産に、俥に搖られて倭文子は久し振で久松家の門を出る。

暫く遭はぬ娘の訪問に、益荒夫妻の喜びは一通りでは無かつた。父母の喜びばかりではなく、召使のものまでがみんな心から喜び迎へるのを見ると、倭文子は何とも云へぬ嬉しさを覺

えるので、邸内の草も木も花も、みな自分を喜び迎へるのかと、懐かしさの念が胸元まで込上るのだ。

松茸の土産には父の將軍も大喜びで、さしづめお石の好意に滿足を表するのである。倭文子は談話の中にふと父の血色の優れぬのみか、藥嚢まで傍にあるのに驚いて、

『おや、お父様はどうか遊ばしましたの。』

『いや、なに、四五日前から風邪を引いたのぢやが、もう今日は大分善いのぢや、お前が來たからこれで癒るに相違ないわ。』

『昨日は熱まであつて寢て居らしつたのですよ。』と民子は口を添へる。

『まァさうでしたの、ちつとも存知ませんで……お大事になさらないといけませんわ。秋口ですから。』

『なにもう大丈夫ぢや……。併し倭文、乃公よりはお前の血色が惡いやうぢやが――のう民。』

『ほんとに倭文さん、顏色が優れないやうですよ。ねえ貴郎。』と民子は倭文子の顏を親くやうにしていふ。

かう云はれると倭文子は何か心が咎めてならぬのだ。それは必らずしも、胸に惱みのある爲めばかりではなく、この十月になつてから、兎角身體が優れず、食物さへも味がなく、鍋島の

立つ前後からは、殊に身體の不調和を覺えて居るのである。併し醫者にかゝるほどでもないので、そのまゝに打捨て置いたのであつた。

色に出て問るゝ以上、素より父母の前で隱すべき事でもないと思つたので、

『あのお母様、私、このごろ何だか加減が惡つくて困るんですの。食物なども味が變つてるやうで、ちつとも甘しくないんですよ。』

父母の眉には懸念の眉が顰む。

『それはいかんな。』

『ほんとにいけないわね。醫者に見せましたかへ。』

『いゝえ……、それほどぢや無いんですから。』

『いや、それがいかん。早速小幡にでも見せるがよからう……。今日もその中に來る筈ぢやが。』

『さうでございますね。倭文さん、さうなさるがいゝわ。』

かういふ話のあつて後にその小幡さんのお見舞だと云つて、女中が襖の外に手を支へる。

『むゝいゝ按梅ぢや。小幡ならこゝへ通せ。』と首肯いて、『倭文、お前、診て貰ふがよいわ。』

『倭文さん、さうなさいよ。』と母も助言する。

『さうでございますね。それではお父様のお後で診て頂きませうか。』
『いや、後にせんでもよい。乃公はもう善いのぢやから。』
その中にお出入の醫師が導びかれて入つて來る。倭文子が先に診て貰ふ事になつて、次の間に敷れた毛布の上に横になる。益荒はこちらの間から話しかけて居る。すぐ醫者は容體を聞取つて脈搏を計り、やがて聽診器を胸から腹のあたりまで當て暫らく聞て居たが、やがてそれを取ると、顏には莞爾と微笑が漏るのだ。
『胃が惡いんぢやございますまいか。』と倭文子は起直りながら尋ねて見る。
『いや、胃は大丈夫で……お孃樣、食物の味のお變りになつたのは、惡阻のせるでございませう。』
『えゝ!?。』と倭文子の顏に血が湧いて、胸が高く波打始める。
益荒夫妻の耳へは醫者の言葉はよく聞えなかつたので、
『小幡さん、どこぞ惡いかの。』
醫者は靜かに聽診器を鞄の中に入れて、
『いや、御心配には及びません……。御心配どころか、お孃樣はどうやら御姙娠らしうございます。』

『えゝー　姙娠ぢや?』と老將軍の顏は輝やき渡つて、『民、姙娠ぢやといふだ。』
『まアこんな目出度い事はございませんわ。』
『そして何ケ月位の容子かの。』
『多分三ケ月程でございませう。』
『三ケ月か?……早かつたのう。』と父は顏の相格を崩すのである。
倭文子は帶を引締て居たが、かう云はれてまた耳朶までを赤くする。
『それぢやア貴郎、倭文さんの不加減なのは、惡阻のせるなんでございますよ。まだ始めてなので勝手が分らなかつたのですわ。ほゝ。』
『何にしても目出度いな。この間鍋島の來た時、早く倭文に子でも出來ればよいと云合つたのぢやが、かう早く出來ようとはのう……』
父が他愛もなく喜ぶのを見るにつけても、倭文子はまた人知れぬ苦勞を覺ゆるのである。併しそんな色は兩親にも見せぬので、川上家には今春風春水一時に來るの思あらしめた。益荒はもう自分の病などは忘れて了ひ、醫者が診ようといふのにも構はず、もうすつかり善くなつたと云つて、そのまゝ醫者を返して了つた。それから民子が姙娠中の心得を說くやら、いろいろしめやかな話があつて、やがて倭文子は兩親の前を辭すると、一人庭に下て、これまた例の

思出多き亭に落つき、暫らく腦と身體を休めて居た、

倭文子はこれから正木に遭なければならぬと思ふと――そしていやな事を話し合なければならぬかと思ふと、何とも云へぬ重い心地を覺ゆるのであるが、それでも今ごろは正木も自分の話を聞たくつて待て居る事と思ふと、早くその人にも遭たく、やがて亭を出ると庭を廻つて、舊の自分の居間の椽へ來て腰を下した。この室は今は主がないので、そのまゝに淋しく明て居るのである。

（十三）

倭文子は椽に腰を下したまゝ、何を見るともなく庭先を見詰てると、そこへひよつくり富美子が來たので、暫らく相手になつて居たが、軈て富美子を使に正木を呼にやつた。すぐ富美子か正木を連て來ると、

『ちやァ富美さん。暫らく正木とお話が有んですからね……。姉さんとはまた後ほど遊びませう。』

富美子は大人しく立去り行く。正木は椽に坐つて、

『お嬢樣、お上りになつたら如何です。』

『いゝえ、この方が勝手だから。』と身體を横ざまに、腰をかけたまゝで居る。正木は强て勸めもせず、

『此間お礎が見えたので、いろ〳〵御容子を伺ひました。』

倭文子はほつと溜息を吐いたが、まだ何とも云はずに、あらぬ方を見詰る。

『縱令中傷者のあつた爲としても、貴女の御不幸は、私が原因になつて居ると思へば、殆んど寢食を安んずる事が出來ません……。貴女のお力にならうと誓つた私が、事實上貴女の幸福の破壞者なのですから。』

『だつて正木、そりやァ何も貴君が惡いんぢやァないから……そんな事を云へば、良人にこんな邪推を受るのでもみんな私が――』と云さして胸苦しさに堪ぬやうに差俯むき、また調子をかへて『正木、私はもう運命と諦らめてるのよ。この上たゞ貴君がいつまでも私に同情して居て下されば、もうそれでいゝんですから……』と聲が濕つぽくなる。

『……』

『私、それは觀念してるにしても、またいやな事が湧いて來たので――』

『いやな事と仰しやるのはどうなすつたんですか。』

『田鶴さんの事なんですけれどもね……あの貴君は田鶴さんの手紙受取つたでせう。』

正木の眼は火を點ぜられて、
『いや、實は昨夜受取りました。それは實に嘔吐を催ほすやうな手紙です。私はずたずたに引裂いて紙屑籠に入れて了ひました。』
『まア、ひどい事を～』とぢつと貞雄の顏を見詰て、『どんな事書たお手紙でしたの。』
正木は苦笑して、
『なアに、戀愛の、理想のと、そんな鼻持のならん事を並べてるんです。』
そんな事だらうとは想像して居たが、倭文子は眼に異樣の光を持せて、口元に笑を漂よはせながら、
『どう返事をなさるつもり。』
『打ちやつて置きます。』
『打ちやつて置つて、正木。』と、懸念の眼光で『實はね、正木、私、今日は田鶴さんの使に來たのよ。』
『田鶴子さんの使ですつて？。』と正木は眼を睜る。
倭文子は昨日の田鶴子と自分との話を詳しく話して、今朝姑から里へ行くやうにと命ぜられた事まで語り聞せ、

『さういふ譯で、今朝私を里へよこしたのは、田鶴さんの計らひに相違ないんですから、貴君の御返事を伺はない中は、私どうしても歸る譯に……』
『フム、どうも實に怪しからん女ですね……それぢやア何ですね。貴女がこの事に盡力しなければ、どんな復讐をするかも知れんといふのですね。』
『まさか復讐すると、そんな事までは云ひませんけれども……これまで隨分私のために盡したり、またお母樣を牽制したりして居たが、もうそんな事は知らないといふんですから……』
『それなら復讐も同じぢや有ませんか。實に言語道斷で……。いやお話を伺つたから申上ますが、私も先達て同じやうな事を田鶴子さんに說れたのです。まだ貴女にはお話もしませんし、またお話すべき事でもないと思つて居たのですが、實は斯うで――この前私が出ました時、お暇をしてから、お磯と山內で遭ましてな、あれから私が丸山へ出て月を見ながら、いろ〳〵貴女のお身の上を案じて居ると、そこへ突然田鶴子さんが來られたのです。』
『え？　あの晩ですか。』と倭文子は驚きの眼を睜ると、次第に顏も蒼ざめて、『私は田鶴さんは室へ歸つて居るのだとばかり思つてゐたんですが、それではきつと貴君の跡をつけて出たのですよ。』
『そんな事は無いでせう。』と云つたが正木は懸念の眉を寄せる。

『もしや磯と貴君の話を聞て居たのぢやアないでせうか。』
正木も始めて不覺の事をしたと思ふのである。
『そんな事はあるまいと信じますけれども……。』
『もし聞て居られたらどうしませう。貴君が平潟へ訪ねて入つしつた事が、田鶴さんに知れると大變ですわ。私、喬には貴君の事を打消して了つたんですから……』
『ウーム……困りましたなア。』
『こんな事なら、あの時喬に云つて了へば善かつたものを――』と呟く聲が震へる。
『今更そんな事を仰しやつたところで仕方が有りません。』と慰め顔に云つたが、『……と云つてこればかりは田鶴子さんの要求を容れる事は無論出來ませんし――』
『それは當然よ。……何とかして當らず觸らずに、田鶴さんを諦めさせる工夫はないかしら。』
『私はあの女が若し久松さんの家族で無つたら、丸山では多分頭の一ツ位擲り飛して來たでせう。凡そ世の中にあの位蟲の好ぬ女はありません。』
『どの道貴君は滿足な返事をなさる氣遣は有ませんわね。』
『今日は兎に角大學院に行つて居て、留守だつたとでも云つてお歸り下さいまし。』
『今日のところはそれでもいゝけれども……。貴君は何とか返事をなさらなければならないでせう。』

『さうです。忍んで返事もしなければなりますまい。』と苦り切つて、『なに暫らく貴女の爲めに艮心を欲制すればいゝです。』
『ねえ、正木。』と心配さうに『當らず觸らずに、田鶴さんを諦らめさせる工夫はないものかしら。』
『さうですなア。』
『外に約束した人があると云つたらどうかしら。』
『併しあんまり氣が咎めますなア。』
『だつて正木、貴君には藤乃さんといふ、立派な約束をなすつた方が有るぢや有りませんか。』と睨るやうに云つた。
正木はちよつと眼の緣を色取つて、
『そりやア何も夫妻の關係を結ばうと云ふ約束ぢやアないので――』と辯解するやうに云つたが、倭文子が默つて居るので、
『なるほどさうとでも云へば斷念はするのでせうが、併し貴女に對しては、最早好意を表さなくなるでせう。』

倭文子はなほ默つて何か思案して來る風に見えたが、
『だけども正木、貴君が迷惑なら、いつそ一思ひに拒絶して下すつても構はないわ。』と思ひ切つた事をいふ。
正木は驚ろいて、ぢつと倭文子の顏を見ながら、
『そんな事して、貴女のお身の上に取返しのつかぬ事が出來たらどうします。』
『その時には私、もう覺悟をしてるから、貴君の良心を束縛するよりか、その方がましだわ。』
と神經的に云つた。
『そんな事仰しやつてはいけません。……何とか彌縫の手段を考へませう。今日は兎に角私が大學院に行つた留守だと云つてお歸りを願ひませう。』
『でもいつまでも貴君に迷惑になる事を――』
『私が迷惑になつたところで何です。』
倭文子は默つて差俯むく。貞雄は暫らく倭文子の横顏から眞白な襟脚のあたりを見て居たが娘で居た時よりは色艶も惡く、また心持頰のあたりもこけてるやうに思ふので、少なからぬ苦勞のあるためと言知れぬ同情が湧て來るのである。
『お孃樣、先刻春が小幡さんの診察を受て居らつしつたやうに話してましたが、どこかお悪

のぢやア有りませんか。』
『いえ、あの。』と顏を擧げたが、正木の眼と合ふと慌てたやうに俯むいて、『何でもないのよ。』
『さうですか。』となほ倭文子の顏を守つて居ると、
『あの正木。』とまた顏を擧げて、一寸ためらつた後、『あのね、醫者はね――』かう言さして顏を赧めるとまた言葉が切る。
『はア――?』と正木が分らずに居る時、ブラ〳〵庭を廻つて來た老將軍は二人を認めると、
『倭文、こゝに居たか。』と進んで來て滿面に笑傾けながら、『正木、喜んでくれ、倭文が身重になつたさうぢや。』
『あれ、お父樣、正木にそんな事を――』と倭文子は赤くなつた顏を反けた。

* * * * *

倭文子は三時過に希望と懸念とを以て久松家へ歸つて來た。今までは里から歸るといゝ顏をした事のない姑が、今日のみは機嫌顏に倭文子を迎へた。わけて倭文子の歸りを待受て居たのは田鶴子である。併し母親や磯の手前話を聞く事も出來ないので、
『姉さん、お後でね。』と眼顏で知らせて二階へ上つて行く。
倭文子は居室へ引取ると、お磯は待兼顏に、

『如何でございました。』
『あの正木は居たけどもね。』と聲を潜めて、『正木だつて、やつぱしこれといふ考は出はしないよ。』
『……さうでございませうね。……それでは差當つた田鶴子樣の方はどう遊ばします。』
『正木が何とか考へて返事するといふから、そのまゝにして歸つて來たのだが――あのね、私は今日正木に遭ない筈にして歸つて來たのよ。』
『さうでございますか。――まァ難儀でございますね。』
『田鶴さんが待てゐんだから……』と自から嘲けるやうな笑を浮べて。『私生命がつまるやうな氣がするわ。あゝいやだつちやァない！』
この間に倭文子は着て居たお召の袷を、瀧縞銘仙の平常着に着換る。
『あちらでは皆樣お異もないのでございませうね。』
『あゝ、あのお父樣がね、四五日風邪を引で居らつしつたさうだけども……もう大方よくなつてお出だつたよ。』
『おや、さうでございますか。』
『あのね、磯、丁度小幡さんが入つしつたから、私も診て貰いたのよ。』

『おや、それはいゝ按梅でございましたね。やつぱり胃でございましたか。』
『いゝえ……』と頭を振つたが、口元に極りの悪さうな笑を漂はせる。と磯はその顏を見込んで、
『でも心配な事ではございますまい。』
『あゝ。』と磯に見られた眼を反して、『……今に話してよ。』
『おや、何でございますね。』とかういふ中に倭文子の容子を見て取つて、聲を落しながら、『お孃樣、あなたは若しや――』
『え？』と倭文子の眼の緣がほんのり赧らむ。磯はいよ〳〵それかと、
『あら、お孃樣――お目出度いではございませんの？』
『……』倭文子は默つて伏目になつて居る。
『まアさうでございますか。』と眼を圓に嫣然笑んで、『それはまア〳〵……』と珍らしさうに顏を覗き込む。
『あら、磯、さうだとも云ひやしないのに……』
『おや、ではさうなんぢやございませんの。』
『あのね、磯、……でも小幡さんはさういふのよ。』

『まア お嬢様、何でございますね。』と睨むやうに見て、『それ御覧じろ、やつぱりお目出度なんでございませう。』

面はゆけに倭文子は俯むいて了ふ。

『お嬢様、まア〳〵私、こんなお嬉しい事はございませんわ。……きつともうこれからは、今迄の御苦勞をお忘れ遊ばすやうにおなり遊ばしますよ、』

『磯、お前はほんとうにさう思つて？』

『でもそれをお聞になれば、旦那様もきつとお喜び遊ばしませうし、また御隱居様にしても、やがてお小さいのがお出來遊ばせば、もうお心がお折遊ばすに違ひございませんもの……』

『どうかしら……私にはやつぱし……』と云ひさして口を噤むと深い溜息が洩る。

が磯が喜ぶのでそれもさうかと兎も角慰められ、田鶴子が待つて居る事と、いや〳〵鉛のやうに重い足を二階へと運んで行く。

待構へて居る田鶴子はいそ〳〵嫂を迎へて、

『まア姉さん……母はね、私にもね、貴女がお里へ行つしつた事を、兄に云つてはいけないつていふんですよ。それで松茸は使に持して元園町へあけたやうに、母から兄さんに話して置くさうですの。』といふ聲さへも優しさに充て居る。

倭文子は胸苦しい風情で、

『でもね、田鶴さん。私、正直に云つて了つた方がいゝとも思つてるのよ。』

『だつて母がさういふんですもの。』

『後で知れるといけませんわ。』

『大丈夫ぢやア有りませんか。もしも知れたらお母さんの命令だと仰しやればいゝんだわ。』

『……』

『ね、さうなさいよ。』と一人呑込んで、『そして正木さんは居らつしやいまして。』

期して居た事ながら倭文子はハッと詰つて、

『いえ、あの……』と云澁ると、

『正木さんは怒つて居らつしつたんでせう。』

『いえ、あの、何ですの……今朝から大學院へ行つたといふもんですから、晝には歸るだらうと今まで待つて見たんですけれども……』

『あの歸つて入つしやいませんでしたの。』と田鶴子の調子は變つて、眸子が劍をもつてきらりと光る。

倭文子の頭は罪深く感ずるやうに自と下つて、

『ほんとに折角まゐつたのに、貴嬢のお役には立なくつて――』
田鶴子は膨れた顔をして暫らく默つて居たが、
『姉さん。』とじつと嫂の顔を見ると、『正木さんは居らつしつたんぢや有りませんの。』
『あら、田鶴さん、……何で居たのを居ないなどゝ申しませう。全く留守だつたのですから……』と倭文子が一所懸命なので、心の底まで讀むやうに見詰て居た田鶴子も、眞實だと思つたのであらう。
『居らつしやらなかつたのなら仕方が有りませんわねえ。……つまらないわ。』と投るやうに吱やく。
『でも貴嬢、昨日手紙をお出しなすつたのなら、正木は決して打捨つては置ないでせうから、きつとその中に……』
『さうでせうか……』といくらか極の惡い氣も出て來たらしく、『まアそれもさうね。』
田鶴子が納得したので倭文子はほつと息を吐く。あゝこんな姑息手段がいつまで續くであらう。
この夜喬はまた例の通り遲く歸つて來たので、倭文子は姙娠の事はたうとう云おくれて了つた。その翌る日も何か云出しにくゝつて咽喉まで出したのを引込めて了ひ、次の日はまた喬が

機嫌が惡かつたので云はず、四日目の夜漸やく折を見て口を切つた。
『貴郎、私、このごろ何だか加減が惡いもんですから……醫者に診て貰つたのでございますよ。』
『フム……どうしたのだ。』
『あの……さうしますと醫者は……あの何だと申すのでございますよ。』
『何だちやア分らんぢやアないか。』と妻の顏を見返す。
『はい、あの……姙娠だと申すのでございます。』
『なに、姙娠だ？。』と喬の眼は異樣の光を放つた。
『はい。』と倭文子はその鋭どい眼で見られた刹那、不甲斐なく脅えたやうに俯むいて了ふ。
喬は無言のまゝ暫らく倭文子の方を見詰て居たが、
『そして何ケ月になるのか。』
良人の聲が冷かなのに、倭文子は何とも云へぬ心の寒さを覺えながら、僅かに顏を擧て、
『醫者は……三月ほどになるだらうと申しましたが……』
『三月だ？。』ぢろり妻を睨て、『結婚して何ケ月になるか。』
倭文子はハツと心臟を刺れたほどに思つて伏目になる。何といふ良人の言葉であらう。こん

な冷酷な忌はしい事を云れやうとは夢にも思はなかつた。餘りの情なさに胸も塞がるやうで、言葉も出ないで居ると、

『滿三ケ月になるかならずだぞ。』

倭文子は涙の漲つた、悔しさうな顏を上て、

『貴郎、あんまりお情ないお詞を伺ひます……それほど迄に私をお疑ひ遊ばすのでございますか。』

『何も疑つて居るとは云はん。……姙娠三月であつたのはお前の仕合だ。……身體を大事にするがよい。』

『はい……』とばかり、倭文子は云はうとする事が胸までつかえて咽喉を出ぬのである。

『今日醫者に診て貰つたのか。』

『いえ、あの……二三日前でございます。』

『なに、二三日前だ？』と喬の眼はまた輝やいて、『二三日前ならなぜその時に云はんのか。』

『は……』と倭文子はハラ〳〵となる。

『後暗い事のあるものなら兎に角……お前、また何のために躊躇して居たのか。』

『それは……申上やうと存じながら、機會が無かつたからでございます。……そして私すぐ申上なければならない事とも存じませんでしたので……』

『そして醫者が三月だといふのだな。』

『その位だらうと申すのでございます。……私、貴郎のお疑を受ます位なれば――』と云さしたが、感情の昂ぶる樣で、聲が震へて言葉が途切れる。

『なにもお前、そんなに悔しさうに泣くには及ばんではないか。今こゝで三月とか四月とか云ふ事は云はんでもよい。お前の潔白をやがて事實が證據立てる日が來るだらう。』

倭文子は爭ふも無益と、口を噤んでじつと泣音を咏へる、

（十四）

田鶴子の方に正木の返事は來たが、それは結局要領を得ぬものであつた。この前丸山で云つた事を繰返したやうなもので、自分の洋行は或研究の目的を達するためであるから、それまでに五年かゝるか、十年かゝるか分らぬ。此際結婚の約束などして、妙齡の處女の青春期を仇に過さしむる事は、一種の罪惡である。自分にはこの罪惡を敢てする事は出來ぬ。田鶴子の好意は十分に感謝するが、感謝するだけそれだけまた罪惡を感ずる事も深いので、若しもかゝる問題が他年歸朝の際に起つた事であつたならば、如何に解決し易かつたであらう。自分はそれを

少なからぬ遺憾とするといふやうな思はせ振まで入れた。正木に取つては蓋し苦心慘憺の跡の見ゆる婉曲の文字で、定めて彼は良心と苦闘しつゝ認めたのであらう。

この手紙が田鶴子にどんな感覺を與へたかを說く事は、暫らく後廻しとして置かう。

喬はこの兩三日歸つて來ても酒を飲む外には、倭文子には殆んど口を利ずに多く書齋にのみ閉籠つて居る。倭文子はこのごろの物思ひの遺瀨なさに、夕暮には折々邸を出て山內を散步する事もある。丁度庭を廻ると板塀に切戸口があるので、出入りには都合がよく出來て居るのだ。併しいつも二十分以上に渡る事はない。昨日が後の月だつたので、兩三日來宵々山內に杖を曳く浮れ客も多くなつて來て居る。併し倭文子は月の冴るころまで居つた事は無かつた。

田鶴子が正木の返事を受取つた翌る日の事、喬は灯が入つてから、どこへも云はずに出て行つて了ひ、後に倭文子が磯と淋しく留守を護つて居るところへ、田鶴子が來て、何か話して居たが、磯を邪魔ものに思つたのか、それとも意味は無かつたか、月が美くしいからとて、嫂を山內に誘ひ出したのである。

田鶴子が倭文子を連出した目的は實際何の爲であつたかは分らぬ。たゞ、冴渡る月の光に憧れて、倭文子を誘つて見たといふに過ぎぬかも知れぬ。併しそれであつたとしたところで、正木の事を忘れる暇の無い田鶴子は、この機會を利用して、倭文子の口から何か正木の事を知る材料を得、若くば倭文子と正木とに對し、自分の抱いて居る疑に、何等かの解釋を得やうといふやうな考へが、恐らくどこかに潛んで居たに違あるまい。

たゞ丸山の上へ出るまで、田鶴子に正木の事を一言も言出さずに居た。こゝへ來ると倭文子は元園町で始めて正木に聞いた事——田鶴子が正木をこゝで口說たといふ事を思ひ起して、何とも云へぬ厭な感を起したが、それを紛らすやうに空を仰ぐと、打解た聲音で、

『いゝ月だわね。』

『いゝ月だわね。』と田鶴子は鸚鵡返に和したが、一向月には氣のない風で、『あの姉さん。實は昨日正木さんからの手紙があつたのよ。』

『あら、さう……？』と胸騷ぎを覺えながら、田鶴子の顏を見る途端、

『お嬢樣、こゝに居らつしやいましたか。』と呼かける聲に續いて磯が息を切しながら二人の傍へ來た。田鶴子を前に置いてお嬢樣といふ時には、磯はいつも田鶴子を指すのである。

『あら、何なの？。』

『あの山川さんが入らつしやいましたのでお迎にまゐりました。』

山川といふのは何でも田鶴子の仲善なのである。

『さう？』と田鶴子は眉を顰めて、『居ないと云つて、歸して貰へばよかつたのに……』

『さうでございましたか。お歸し申してはお惡いかと存じましたので、正直に奥様と御一緒に丸山へお出かけになつたと申上ましたら、それでは御自身が見つけに行くと仰しやいますので……兎も角お待せ申して、私がお迎へにまゐつたのでございます。』

『まア、仕方がない……。ぢやア姉さん、私お先へ失禮してよ。』

『私も歸りませうかしら。』

『まア姉さんは居らつしやいましな。……磯も來ましたから。』と自分が連出した爲でもあらう。かう云ひ殘して急ぎ足に一人引返して行く。

『磯、何だか寒いわね。……私も歸りませうよ。』

『さうでございますか。』

二人が田鶴子の後を追うとする時、

『お磯さん。』と暗い方から呼んで出て來るものがある。

二人は耳馴た聲なので、怪しみながら振返ると、木下蔭を放れて進んで來るものがある。

『あら、正木なのよ。』と倭文子は思はず叫んだ。

『まア、正木さん、いつこんなところに來てらつしやいましたの。』

『先刻から來て居たので、……實は田鶴子さんの姿を見かけましたから、態と避けて居たので

す。』

『まア、さう。』と倭文子は淋しく笑で、『何に來てらしつて？　まさかお月見ぢやないでせう。』と正木の顏を覗き込む。同時に倭文子の眼に宿つた濕がきらりと輝やく。

『いえ……やつぱり月見です……。何となく山内を歩いて見たかつたので……』と言葉を濁しながら云つた。

『正木さん、それはきつと私の眞心が通じたのでございますよ。ねえ、お嬢様。』

『さうかも知れないわね。』

『併しこゝでお目にかゝつたのは實に意外です。』

『お嬢様、誰ぞ來るといけませんから、モ少し彼方へまゐりませう。』

三人は木下蔭の方へ避たが、正木は何か不安を覺えるので、

『私はお嬢様の御無事なお姿を拜見すれば、それでいゝんですから、これでお暇いたしませう。』

『あら、正木……私はいろ〳〵話したい事が――』

『それでは簡單に伺ひませうか。』

かう云はれると倭文子はまた言出し惡い風で、ためらつて居たが、

『貴君、田鶴さんに返事をお出しなさつたでせう。』

これは倭文子が話さうと思つて居た事では無かつた。
『は、昨日出しました。要領を得んものですから、また何とか云つて來るかも知れません。』
『さう。』と云つたまゝでまた言葉が切れる。
『お嬢様、そんなお話は後になすつても宜しいではございませんか。御心配遊ばして居らつしやる事を、正木さんに仰しやつて御覽遊ばせ……。私、彼方で氣をつけて居りますから……』
と磯は二人の傍を離れる。
正木はまた胸を傷めて、
『また何か、御心配な事でも……』
『……だけどもね、どうせ話したつて仕方がない事なんだから――』とまた躊躇し始める。
『お嬢様、實は私は夕方ふと貴女のお身の上をお案じ申し始めると、何か氣になつてならんので、つい此邊まで出てまゐつたのです。……このまゝ伺はずに歸るのも氣がかりですから、お差支の無い限り、仰しやつて頂きませう。』
『まア、さう……』と懷しげに正木を見上げて、『私、正木がそれほどまでに案じて下さると思へば、もうこの先どうなつても――』と云ひさしたが俄かに言葉を切て、太い息遣ひと共に、『私は覺悟をしてゐるのよ。……やつぱし私が惡いんだから、自分の心を責めればいゝんだから

……。』
正木は何にも云はずに俯むいて居る。
『ねえ、正木……私はもう一生喬には疑はれるのよ。』と倭文子はやゝ神經的になる。
『そんな事は有るべき道理が有りません。貴女の御潔白は必らず久松さんに通ずる時が有りませう。』
『だつてね、正木、……お腹の子さへ。』と聲を震はせて、『……もう疑はれて了つたのだもの。』
『えッ？』と正木は驚ろいて、『それほど迄に久松さんは貴女を疑つて居らつしやるんですか。そりやァあんまり殘酷です……實に怪しからん――』とわれ知らず拳を握りしめた。
双方感情が高まつて、言葉の途絶て居る時、急がはしく引返して來た磯が小聲に、
『誰か此方へまゐりますやうですよ。』
倭文子はそのまゝ磯の手に縋つて歩みを移した。黑い人影は彼方に行過る。何か怪しんで見ると、容子でも探つて居るやうに見えた。これに怖氣づいて倭文子は聲を落しながら、
『正木、私はね、運命に任せると極てるんだから……もう心配して下さらなくつてもいゝのよ。……これでお分れしますから歸つて下さい。』
正木は何とも云へぬ程倭文子が傷しくてならぬのだ。併し自分がどうしたら倭文子を慰さめ

また倭文子の爲めに盡す事が出來るか、それはたゞ思案に餘るのみである。實際また餐ずこを救ふ事は、正木に取つて殆んど不可能の事であると云つてよい。

三人が記念碑の傍へ出て、また月下に照し出された時、その同じ月は再び思ひがけぬ田鶴子の姿を、十歩の此方に照し出したのである。併し三人は全然それには氣がつかずに居た。

これより先田鶴子はわが家へ引返して、待たしてあつた友に逢つたが、友は何か相談を要する事があつて來たので、それが濟むと、その事でまた外を廻らねばならぬとてそこ〳〵に歸つて了つた。で田鶴子はすぐ倭文子の居室を窺いて見たが、まだ歸つて居らぬので、今再び山内へ引返して來たのであつたが、五重塔の方から見晴の上へ出た時に、そこに嫂の姿を見出す事が出來なかつた。で田鶴子は此方に足を轉じやうとする途端、碑の傍で倭文子に別れやうとして、月に向つた正木の姿が、鋭どく四邊を物色しつゝ進み來る田鶴子の眼に入つたのである。田鶴子はそこに釘付にされたやうに立縮むと全身の血を湧せ、ぶる〳〵と身體を震はせて、三人の方を打守つた。

併し本能の力はすぐ田鶴子を木蔭へ忍ばしめたので、暗い方から見る田鶴子の眼には、話し聲こそ聞えぬが、二人の別を惜む樣が明かに讀れるやうに見えるのだ。正木が傍の坂を下つてすぐ見えなくなつても、倭文子は磯と佇んで飽ず見送つては何か囁やいて居る樣子である。この時田鶴子の胸には猛烈な嫉妬の外には何ものもなくなつた。正木は今夜まさしく倭文子に逢ひに來たので、これまでも倭文子がちよい〳〵こゝへ來るのは、今夜の如く正木に逢ふためであつたらう。正木が洋行を理由として自分を拒絶して居るのも、倭文子とかういふ關係を結んで居るからに相違ない――とこんな推測がむら〳〵と田鶴子の胸に湧返つた。もし果してその通りで飽まで自分を退けるならば、どんな事をしても二人を許しては置かぬ。必らず復讐をしなければならぬと、かう心に誓ひながら田鶴子は懵乎と立盡したが、倭文子とお磯が此方に來かゝるのに心づいて、慌だしく低地へ身を隱した。此時ふと田鶴子の胸に、今夜正木の跡を追つて最後の會見をして見やうといふ考へが、また猛然として起つたので、二人をやり過すと脱兎のやうに碑の後から、正木の姿を隱した坂を、目の色かへて下て行つた。

併しそこを下るともう方角がつかぬので、田鶴子はたうとう正木の姿を、どこにも發見する事が出來なくて、一層憤怒と嫉妬の念を高めながら、わが家へ歸つて來た。人に顔を見られるのが厭なので、そのまゝ足音を偸んで二階へ上ると、机に身を投かけて、どうしてこの憤恚の焔を醫さうと考へ始めた。また例の正木の寫眞を取出して、暫らくそれを見詰たが、餘りの悔しさに引裂いても捨たいやうに逸る中に、なほ三分の未練があつて、そのまゝ洋燈の影に投つけると、顔を蔽うて机の上に俯伏したが、やがて十分ばかりを過て顔を擧た時には、その眼は

異様に輝やいて、何か自分の取るべき途を見出したかのやうな滿足の色が閃めいて來た。

この翌る土曜日の朝田鶴子は、倭文子の結婚前と、新婚旅行中に受取つた倭文子の手紙を手本に、頻りに手習ひの稽古を始めて居たが、やがて二時間ばかり苦心慘澹の末、次のやうな手紙を認ためた。

昨夜は本意なくお別れ申し參らせ候。さて急にお目にかゝり、お話申さねばならぬ事出來いたし候まゝ今夜八時また〳〵丸山までお越を願ひたく是非に待入參らせ候

倭文

正木どの

この手紙は朝の十時ごろに郵便函の中に田鶴子の手から投入られた。この日田鶴子は特に倭文子には打解た風が見えた。心の底には何かの計畫を藏して今夜の八時を待受て居るものとは元より倭文子に分りさうな筈がない。

（十五）

靜かに何事もなく、この土曜日は暮た。いや一寸した行違から、倭文子が姑の機嫌を損じて、皮肉な當こすりを云れ、難題を云かけられて困つて居たところへ、田鶴子が來て取たした小事實がある。これはまだ日盛りの中の出來事で、それから姑は面當のやうに隱居所へ引込んだきり、夜になつても倭文子に顏を見せぬのだ。

五時頃役所から歸つて來た喬は、いつもの通りに打解た風は無かつたが、それでも晩酌にはまづ機嫌よく倭文子に酌をさせ、珍らしく一本で濟して食後の散歩に出かけた。併しすぐ歸つて來て例の通り、書齋の中に閉籠つたのである。その時はもう七時半ほどになつて居た。

田鶴子は何氣ない容子をして時の移るのを待構へて居たが、正木より先に出かけて居ては、正木が寄つかぬと思つたので、八時が鳴るのを待つてからまづそつと兄の書齋を伺ひ、それから倭文子の居間にも氣をつけて二階にはかん〳〵と灯を點したまゝ、勉强して居る風に見せかけ、潛かにわが家を拔て出た。

五重塔の前へ出たが、すぐ見晴の上へはあがらず、暗がりを擇に擇つて次第に高みに近づきながら、正木が來て居るかと伺がつた。果して月下に立つて、心配らしく懷中時計を取出して見て居るのは貞雄である。田鶴子はわが事成れりと雀躍する許に思つたが、倭文子の手紙といふと、正木がこんなにまで氣にして飛んで來るかと思ふと、また烈しい嫉妬の念が押へ切ぬまで高まるのだ。が田鶴子はこゝでもまた嫂に對する咀呪を繰返しつゝ、暫らく心を落つけてか

ら、突然正木の前に表はれた。
『おゝ、正木さん！』
正木は驚ろいて、
『田鶴子さんですか。』と何氣ない調子で云つたが、悪い時に思はぬ女が來たと思つたのであらう。もしこゝへ倭文子が見えてはと落つかぬ樣子で、來かゝる人影に目を配る。と田鶴子は見て取つて、
『貴君、姉さんは入つしやいませんよ。』
『えッ？』と正木はわが耳を信ぜぬ如く鋭どく田鶴子を見て、『何です？』
『あの姉さんは私のために、今夜貴君をこゝへお呼下すつたのですから。』
『それでは貴嬢の用事だつたのですな。』と貞雄は何とも云へぬ不快の感を覺えたのである。それにしてもなぜ倭文子がその事を明らさまに書て送らなかつたであらう。また明らさまには書ぬまでも、何かの暗示を與へては呉なかつたであらう——。と怨めしくも感じたが、併しすぐそれは田鶴子に要請されたので、多分はあの手紙も、田鶴子の目の前で書く事を餘儀なくされたのかも知れぬと、かう察すると、倭文子の境遇に對する同情が油然として湧き、一方に田鶴子に對する憤懣の念が更に一段を加ふるのであつた。

『ほんとに貴君にはお氣の毒でございます。』と田鶴子は澄して云ふ。
正木は激して居るので、前後を考へる暇もなく、
『田鶴子さん。貴嬢に對するお返事は一昨日差上た手紙に盡て居ます。今夜直接お目にかゝつたところで、あれ以上に申上る事はありません。』と冷やかに言放つた。
それが實際如何にも激してるやうに聞えたので、田鶴子はまさしく自分に對する拒絶の宣告である。と思ふと血は煮立つばかり胸に湧くのを、强て靜めながら、
『それではどうしても、私の望をお叶へ下さいませんのでございますか。』と遏がに聲は震へて出る。
正木はいくらか理性に反ると、柔らいだ調子で、
『全く申上たやうな事情で、致方がないでは有りませんか。私は充分に貴嬢の思召には感謝します……。併しそれ以上の事はどうしても事情が許さんのですから……。』
『私が五年でも、十年でも御歸朝をお待申して居ると誓ひましても——？』
『そんな事を仰しやらんで、貴嬢は他に良緣を求めて下さい……。私は貴嬢が不足でこんな事を申上るのでは有りません。夫は今後の私の獨身生活が證據立るでせう。私は當分科學を唯一の妻とする考で、或は終生科學に殉して孤獨の生活を終る事になるかも知れません。單に貴嬢

を拒絶するといふのではなく、全體の女を拒絶するのですから、どうぞこの孤獨の境遇に同情を持て、屑よく私をお見捨下さい。』と力の籠つた調子で云つた。

田鶴子は何してそれを眞實の聲と聞う。その眼には燃るやうな嫉の光が閃いたが、すぐ俯むいて何にも云はず、身體を震はせて居た。

『田鶴子さん。私は長く貴孃の御好意を忘れません。どうか貴孃も私を友人として、御記憶を願ひたいのです。』と彼は自から良心を欺むきつゝ云つた。

田鶴子はなほ何にも云はずに默つて居る。正木は自分の言葉が、何等か强い感動を田鶴子に與へたと信じて、いくらか氣の毒の感に打たれながら靜にその答を待つた。俯むいた田鶴子の白い襟脚が幽かに搖ぐばかり、容易に返事をしさうにもない。何ぞ知らん、此間に彼女は、如何にして正木に復讐すべきかを考へつゝあつたので――いや今考へ始めたといふよりは、既に萬一の場合を期し、豫じめ心の中に描いて來た復讐の順序を、手落のなきやう、靜かに冷やかに、わが胸に繰返し始めたのである。がやがて顏を擧ると、そんな色は素振にも見せず、涙に濕んだ眼で、愬ふる如く貞雄を見上げ、

『正木さん、だん〳〵のお詞で私も自分の愚さを悟りました……。肩よく貴君を斷念いたします……。たゞそれについてのお願は――私、貴方と姉さんの前で、懺悔したい事がございます。どうぞそれだけをお許し遊ばして下さいませんか。』と聲を震はせながら云つた。

正木はそれを眞實の悔恨の聲とも聞たのである。それをまで拒まねばならぬ道理はないと考へたので、

『いや、そのお言葉を聞て、これ以上の滿足はありません。併しこの上懺悔のお詞を伺ふ必要はないやうですが……是非にと仰しやるならば、それは貴孃のお心任せです。』

『はい、この機會に是非懺悔いたしたうございます……。それでは貴君、暫らくこゝにお待下さいまし。姉さんを呼んでまゐりますから。』

正木は何か安からぬ心を覺えながらも、承諾の意を表した。

田鶴子は草履の音をバタ〳〵と山内を驅下るやうにしてわが家へ歸つたが、すぐ倭文子の居室へは行かず、兄の書齋を窺いてから、下女のお富を見つけ、それに何か耳打した後、始めて倭文子の室へ行つた。

磯が縫ものゝ針を運んで居る傍に、倭文子はつれ〴〵に小說を讀んで居たが、田鶴子が仔細ありげの素振と、また息切のして居る容子に目を止めて、

『田鶴さん、どうなすつて？』

『いえ、あの私、今ね、丸山で正木さんにお目にかゝつて來たのよ。待つて居らつしやるんで

すから、姉さん。一寸入つしやつて下さいませんか。』
倭文子は磯と顔を見合した。果して正木が來て居たとすれば、また自分を案じての事と懷かしくも思はるゝが、それにしても田鶴子にかういふ言傳をまでするとは意外であると、一面怪訝の念の高まるを禁じ得ぬのだ。で倭文子がまだ答へをせずに居る中、容子を見て取つた田鶴子。
『正木さんの來てらつしやる譯は、姉さんが彼方へ入つしやると分るんですから……そして私丁度これを機會に、姉さんと正木さんに懺悔したい事があるんですから。』
倭文子にはいよ〳〵分らない。併し田鶴子の調子には打解たところがあるので、無論それを善意に解釋したのである。
『それぢやァ貴孃も御一緒に行つて下さいますの。』
『は……御迷惑でせうけれども……。』
この話の中にお富が來て、
『お孃樣、御隱居樣のお召でございます。』
『え、お母さんが――？　仕樣がないねえ。』と眉を顰め、『ぢや今行くと云つといで。お母さんの用は長いんだから……』と呟やいて倭文子に向ひ、『姉さん。正木さんは丸山に待つてらつしやるんですから。お磯を連て先へ行つしつて頂戴な。母の用が濟んだらすぐまゐりますかと……あの榻に腰かけて居て下さいまし。』
無心の倭文子は磯を連て庭先から草履を突掛ると、月下の芝を踏んで、何にも知らず、わが家を出て行く。
それを見送つた田鶴子は、母の用事といふのは拵へ事なので、すぐ兄の書齋を訪れるのだ。喬は椅子に凭れて獨逸文の書籍を繙いて居たが、今入つて來た田鶴子の方をぱぢろりと見返つたまゝで、また書物の方を見入つて了ふ。田鶴子は構はず、その方に進んで行つて、
『兄さん、私貴兄にお知せすることがあつて來たのよ。』
『煩さい、後にしてくれ。』と兄は書籍に目を放さずいふ。
『いゝえ、後にしちやァ居られない事だわ。……。兄さん、姉さんの祕密なのよ。』
此詞は殆んど喬を椅子より飛上らしめんとした。彼は覺えず顏色を變て、
『何？　倭文の祕密だ？』
『さうなのよ。姉さんにはお氣の毒ですけども、あんまり度々の事なんですもの。兄さんのお名にかゝはるやうな事が出來てはと……今日は思ひ切つてお知せするのよ。』
『ウム、倭文がどうしたといふのか。』

『たつた今私が何心なく山内を通りかゝると、姉さんと正木さんと、ひそひそ話をして居らつしやるんだわ。それも昨夜だつて丸山で逢つて居らつしやるところを、私はちやんと見届たんですもの……昨夜ばかりぢやないわ。このごろ兄さんは御存知ないでせうけれども、ちよいちよい姉さんは、山内へ行つしつて、その都度正木さんと逢つてらつしやるのよ。それはみんなお磯の手引で、今夜もお磯がついてるんですわ。』

喬の眼には見る〳〵爛々の火が點ぜられ、眼尾がきり〳〵と吊上つた。――あゝ恐れつゝあつたわが疑は遂に事實となつて表はれたのである。而もそれが妹の手によつて發見されようとは、何たる不面目、何たる恥辱であらう。

『田鶴、お前、それは眞實の事を云つとるのか。』

『眞實も嘘もないわ。兄さんが今行つて見れば分る事だわ。』

『ウム、よし、それでは案内してくれ。』と髪の毛も逆立ばかり、血相變て立上つた。

兄の容子が餘りに恐ろしかつたので、田鶴子は薄氣味惡くなつたのか、

『ですけれども兄さん。亂暴なすつてはいやよ。手荒な事をなさるなら。私案内しないわ。』

『手荒な事はせん、全體どこで逢つてるのか。』

『ぢや手荒な事もせず、姉さんにも正木さんにも物を云はずに、すぐそこから歸ると約束なさいな。そしたら案内するわ。』

『きつと約束する。』

『きつとですか。』

『誰が手荒な事などをするかッ。』と彼は聲を勵まして云つた。

『それならそつと私についていらつしやい……。すぐ歸つて下さらなきやいやよ。』

喬は田鶴子について書齋から私にわが家を拔出る。今日までは母や姉の手前、忌はしい自分の疑はなるたけ表面に表はすまいと勉めて居た。それが今何のざまであらう。何も知らぬと思つて居た姉の手引によつて、妻の醜體を演じつゝある場所に導びかれるのだ――堂々たる六尺の男兒が、恥を忍び垢を呑で、わが一代の恥辱をそれ見よがしに妹の後から、尾を卷てついて行くのだ。あゝ何たる大馬鹿ものであらう。彼は腸も寸斷するばかり、無念骨髓に徹して、妻の肉を裂き骨を抉るも、なほ飽たらじと思ふのである。

急ぎ足に丸山へ出る道々、田鶴子は兄に向ひ、

『私、今まで姉さんの爲にどんなに心配したか知れないわ。迂濶と兄さんに申上られる事でもなし、また姉さんにも濟ないと思つて、今迄は默つて居たんですけども……もうかうなつたら何もかもお話するわ。兄さんはまだ御存知ないでせう？　姉さんと正木さんと、平潟で逢つて

居らつしやる事を……』

喬の胸には一々刃を突刺れるやうに響くのだ。

『なに平潟でも逢つた？　お前、どうしてそれを知つとるのか。』

『私はもう兄さんが蜜月から歸つていらつしつた許に知つたのよ。だつて磯と姉さんが內緒でその話をして居るのを聞いたのですもの……。それを聞いてから、私は始終姉さんに氣を注て居たんだわ。』

喬は突然杉木立の中に立止つて了つた。嫉妬と憤怒の焰は、まさに化石の如く彼を立縮ましめたのである。

『兄さん、何して居らつしやるのよ。早く行つしやらないと……正木さんが歸つて了ふかも知れない事よ。』

彼はわが妻の醜行を見るの恥辱に堪へずして、如何にその儘わが家に引返す事を望んだらうか。併し今までは實證を得ぬために煩悶して居たのである。こゝまで來て今更どうして引返す事が出來よう。刻んだ骸に魂が入つたやうに喬は再び歩き出した。

『この間松茸を元園町へあげた時でも、姉さんが持つて行つしつたのよ。朝早く行つしつたのに、三時過に漸やく歸つてらつしつたんだわ……。手紙だつて始終磯が持つてつたり、持て來

たりしてるらしいのよ。』

喬は耳に入れてるのか、入らぬのか、たゞ默々として妹の後に續くのだ。すぐ五重塔の傍へ來ると、田鶴子は聲を潛めて、

『約束なすつた事きつとよござんすね。たゞ見せてあげるだけよ。それでいゝでせう。それでなきや案內しませんから……』

『大丈夫だー』

『ぢや、兄さん靜かについてらつしやい。』と兄を後に田鶴子は忍び足に見晴臺の方へ近づいて行く。

（十六）

わが家を立出た倭文子は何か異樣の感は起りながらも、甚だしくは怪しまず、畢竟正木がまだ自分を案じて來て居たのに、偶然田鶴子が出遇したのであらうと思ふので、何かの事は正木に遭ば分るものと、磯を急がせて丸山へ上つて見た。果して正木は崖際の榻に腰を卸して居たので、

『おゝ、正木。』とその傍へ進むと、正木も待設けて居たらしく立上つて、

『お嬢様……、貴女だけですか。』
『あゝ、田鶴さんは今お母様に呼れたので、その用を濟せるとすぐ來る筈ですよ。』
『あゝさうですか……。田鶴子さんは何か私と貴女の前で懺悔したいといふのですが……』
『私にもさういふのよ。どんな懺悔かしら……。貴君、今夜田鶴さんと、どんなお話をなすつて？』
『また例の事なんです。』と苦笑して、『貴女、まづお掛なさい。』と倭文子を榻にかけさせ、自分はその傍に立つたまゝ、『で要するに私の決心を飜へさせようとしますからそれは斷じて出來んと、また同じ事を繰返したのです。そして自分は生涯科學を妻として孤獨の生活を送る覺悟で居るから、私の境遇に同情を持つて、間違つた感情は屑よく捨てくれといふ事を熱心に說いて見たのです。さうすると餘程考へてる樣子でしたが、案外得心して、それでは屑よく斷念すると明言した上、それについて私と貴女の前で懺悔したい事があるから、どうぞそれだけを許してくれと云つて、貴女を呼ぶため引返して行たのです。』
倭文子は餘りに意外の事なので、嬉しくもあればまた疑はしくもあり、
『ほんとに田鶴さんが斷念なすつたのかしら……でも懺悔つて何でせう。』
『或は久松さんに、何か貴女や私の事を炊つけでもして居たので、それを懺悔しようといふの

ぢァないでせうか。』
併し倭文子にはさうも思へぬ。思案して居た後、
『そして正木、今夜は偶然田鶴さんにお遭なすつたの？』
『え？』と正木は驚ろかされて、『今朝あんなお手紙だつたもんですから、私は貴女に何か差迫つた問題でも起つた事と信じて、八時にはこゝに來て居たのです。』
今度は倭文子が眼を睜つて、
『あんな手紙つて、どんな手紙？』
『今朝郵便でお出になつたお手紙です。』
倭文子は胸を騷がせ、
『今朝郵便なんか出さないわ。ねえ、磯。どんな手紙ですの？』
『ほんとに不思議でございますね。』と磯も不審に堪へぬのだ。
『さうですか。』と正木は胸を騷がせて、『それは急に話したい事があるが、今夜の八時にこゝまで來てくれといふ貴女のお名のある書面なのです。而も私は貴女の御筆跡と信じて疑はなかつたのです——』
『それぢやァもしや田鶴さんが——』

『さうです。田鶴子さんの僞手紙に相違ありますまい。私を呼出すため貴女の僞筆を使つたのです。』と激して云つた。

『まアひどい事を……』

『いや、それでは私と貴女の前で懺悔するといふのは、或はこの僞手紙の事かも知れません。』

『さうね。』と云つたが倭文子はいよ〳〵胸安からず、俯むいて案じながら『……懺悔といふのはほんとにその事かしら……怪しいわねえ、磯。』

『何だか變でございますねえ。私には正木さんを斷念遊ばしたと仰しやるのが、何だか信じられないやうでございます。』

『私も怪しいと思つてよ。』

『併しもう來さうなものですね。』と貞雄は不安の念を紛らすやうに云つた。

三人は暫らく無言となる。田鶴子はなかなか出て來さうな容子も見えぬ。倭文子は頻りに胸騷ぎを覺え始めた。

この沈默の間に貞雄はふと今朝の手紙の文句に心づいて、

『おゝお孃樣、……今朝の手紙を田鶴子さんの書いたものとすると、大變怪しいことがあります。それは始めの書出しに――昨夜は本意なくお別れ申候といふやうな文句が書てあつた事で

……。私はなほ更貴女の御書面と信じて疑はなかつたのです。』

倭文子は色を變ずには居られなかつた。どうして昨夜正木と邂逅つた事を田鶴子に知られたのであらう。

『でも田鶴さんは何うしてそれを知つたのでせう。あの時は磯が迎ひに來たんだし、そして田鶴さんはすぐ歸つたに相違ないんだのに――』

『何でございませうね。きつとお富にでも言つけて探偵させたのでございますよ。』と默つて居た磯が口を挿む。

『さうすると田鶴子さんの懺悔といふのも受取れなくなるやうですね――』と貞雄は眉を顰めた。

『磯、私は何だか氣になつてならないわ。』と倭文子は、そこに居るのも薄氣味惡い風にしてい ふ。

『さうでございますね。私、田鶴子樣を見てまゐりませうか。』

『いくらお母さんの用事があつたにしても、まだ來ないのは、怪しんで見れば怪しいですね。』

と貞雄もいと〻穩やかならぬ容子である。

それを見ると倭文子は愈々氣味惡く、

『磯、私も行つて見てよ。ぢや正木……兎も角家へ歸つて見るから……』
『さうですか……。私は暫らくこゝに待つて居て見ませう。』
倭文子は磯を急がせて、駈るやうに丸山を降りると、杉木立の中を分けて暗い坂道を夢心地で辿るのだ。するとその中ごろで、下から誰やら上つて來る跫音が聞えたと思ふと、
『あら、姉さんぢや無くつて？』
それは正しく田鶴子の聲である。田鶴子は既に十分にわが目的を達して兄の歸るのを見屆じた後、また引返して來たところなのだ。
『おゝ田鶴さん。』と倭文子はほつと思つて立止まると、
『母の用事が長かつたもんですから、つい遲くなつて濟ませんでした。あの正木さんはもうお歸りなさいましたか。』
『いゝえ、まだ待つてますけれども貴孃がいらつしやらないから、どうなすつたのかと、下て來て見たところなのよ。』
『まアどうも濟ませんでした。……それはさうと姉さん。』と田鶴子は聲を落して、『今ちよつと困つた事があつてよ。母の用事がやつと濟だと思つて出て來ようとすると、兄さんが貴女を見つけて居らつしやるところへ出くわしたのよ。私は多分戸外へでも散歩にいらつしやつたので

せうから、見つけて來てあげませうつて、出て來たんですが……貴女、どうなさいます。』
倭文子の胸はまた波打始めた。今まで書齋へ入ると自分を呼ぶ事などは滅多にないのに、今夜はなぜかう廻り合せが惡いのだらうと思つた。併し良人が求めて居るものを、どうして丸山へ引返す事が出來よう。
『では、私兎に角歸つて見ますから……貴孃のお話は何も正木と一緒に伺はなくつてもいゝでせう。』
『まアそれもさうね。』と考へて、『ぢや姉さんはお歸り遊ばせ……。私正木さんに遭つてよくお話した上お歸し申しますから……』
かう云つて田鶴子は嫂に分れると、冷やかな笑を殘して、自分一人丸山へと目指して行く。
正木は倭文子の身の上を案ずる一方には、自分等が何か田鶴子の術中に陷つて居るのではないかといふやうなことを胸に浮べて、少なからぬ疑懼の念に襲はれながら、それを紛らすやうに、丸山の上を早足に歩き始めて居た。行つたり來たり、頻りに月下を運動して居るところへ、
『正木さん、お待せ申しました。』
田鶴子が見えたので、正木はいくらか落ついた風で、
『おゝ大變お遲かつたでは有りませんか。……貴孃は今途中で奥樣にお遭になりませんでした

か。』

『はい、遭ました。ですけども姉さんは、兄さんが大層見つけて居らつしやるので家へお歸りなさいました。』

『さうですか……』と何か田鶴子の心を讀うとするやうにその顏を見守つた。併しそれより深入して問返す勇氣は無つたのである。

田鶴子は一向感じのない樣子をして、

『まアいゝ月ぢやア有ませんか。』と無心に月を仰ぐ。

秋の氣はひいやりとして肌寒く、何か知らぬ秋の蟲が、そこ〳〵の叢に物悲しい音を合して居る。增上寺の時の鐘が今九時を打ち始めた。

正木は機械的に懷中時計を取り出した。

『九時ですかしら。』と田鶴子はいふ。

『さうです。』と貞雄は時計の針を合して兵兒帶の間に挾む。

時の鐘を撞終るまで二人は何とも云なかつた。その最後の響が幽かに、澄渡つた秋の空氣を搖かし、蟲の音と調和して哀れに消た時、

『ほんとにいゝ月ぢや有ませんか。』と田鶴子はまた繰返す。

『實にいゝ月ですね。』と正木は氣のない聲で和した。

『私の心はその月のやうです。あゝ今夜のやうに淸々した事は有ません。』

『どうしてそんなに淸々となすつたのです。私を斷念なすつたからですか。』

『いゝえ、さうぢや有ません。正木さん、なぜ私はこんなにいゝ氣持になつたか、貴君は御存知ないでせう。ほんとに今夜のやうに愉快を覺えた事はありませんわ。』

『貴孃のお心は少しも私には分りません。』

『お分りにならなければ、お分りになるやうに申上ませう。それは私が貴君に思ふまゝの復讐をしたからです！』と田鶴子は勝誇つた樣で云つた。

（十七）

倭文子は田鶴子に分れると、いよ〳〵胸騷ぎを覺えて、少なからぬ鬼胎を抱きながら、罪ある人の如くに忍び足にわが家へ立歸つた。家內はひつそりとして靜まり返り、離室に老母の咳聲が聞えるばかり、お富は居睡でもして居るのか、音もなく、良人はまた書齋に入つたと見えて、居室には影も見えなかつた。

『それぢやね、磯、私は書齋へ行つて御用を伺ふからね……。お前は縫さしものを片づけて了

つておくれ。』

かう云つて磯に分れ、倭文子は鐵のやうに重い足を良人が書齋の方に運ぶと、入口で一寸ためらつたが、すぐ思ひきつてその中へ入つた。見ると喬は安樂椅子に埋もれ、大きな身體を曲て頭を抱へたまゝ、双の眼を閉ぢ、恐ろしい苦悶に陷づて居る樣に見えたので、と胸を突かれながら、進みもやらずそこに佇ずんで了ふ。と人の氣配に僅かに眼を睜いた喬、今罪深き面ざしをして、數歩の前に立つた妻の姿を認めると、その眼光には忽ち許すまじき色が稲妻のやうに閃いた。むくと身體の姿勢を直すや否、沈んだ、低い、底力のある聲で、

『倭文、こゝへ進んで來い。』

『は……はい。』と倭文子はその氣に壓されて、僅かに良人の前へ進んだが、宛ら聖壇の前に立つた罪人の如くに、良人の顏を正視するに堪へなかつたのである。

『お前は今までどこに居つたか。』と喬は自分の感情を、言葉に表はすまじと勉めながら云つた。

『は……あの……いゝお月夜でございますから、磯を運て山内を散歩いたして居りました。』

『それだけか。』

倭文子はためらつたが、素より正木と會見した事は、打明得べき性質のものではなかつた。

まさかに自分が正木と共に、恐ろしい陰謀の犠牲になつて居たのだとは心づかぬから、一寸の間留守をしたので、多分は良人が例の邪推をして居るのであらうと、強て輕く見て、

『はい……それだけでございます。』と俯むき氣味に云ふ。

『倭文、顏を擧い。』喬はかう云つて倭文子の顏を睨むやうに見詰め、『その通り私の顏を見て、モ一度云つて見い。きつとそれだけに相違ないか。』

『は……』と口籠つたが、『それに相違ございません。』

『倭文ッ。』良人の聲は腸に浸むかと響いて、『お前はそれほどまでに良心を僞はり、私を僞はるのか。お前の精神が根底まで腐れて居ようとは、今の今まで知らなかつた。私はお前のために大馬鹿ものにされたのだ。』

倭文子は若しや良人が今夜の事を知つたのではとおど〳〵しながら、

『私、何もそのやうな事を……、決して貴郎の御名譽を汚しますやうな行ひを致しましたことは……』

『無いといふのか。では罪惡も祕密に行へばいゝといふのだな。……お前は今夜の行爲の說明が出來るか。』

『今夜の行爲と申しまして……』といとど不安を感じながらも、なほ靜かに斯う云つた。

『まだ隠すつもりで居るのか。』と喬は一喝して、『私は先刻何心なく丸山まで散歩に出かけて、ちやんとお前の行爲を目撃して居るのだぞ。それでもお前は情夫に遭つて居らぬと言張るのだな。』と良人の聲は震を帯びた。

あゝ喬は果して今夜の會見を目撃して居たのである。何といふ驚ろくべく、また恐るべき事であらう。倭文子は咽嗟に何と答ふべきかを知らず、蒼白になつて俯いたまゝ言葉もなくわなわなと身を震はして居た。

『倭文ッ、それでも散歩して居たゞけだと言張るか。』

これより先磯は悄然と書齋の方に足を運ぶ倭文子の姿を見て、何とも知れぬ懸念に襲はれ、坐つて仕事にかゝつて見たが、手につかぬので、そつと書齋の外まで身を忍ばせ、襖の小蔭の薄暗いところに耳を欹だてゝ居た。ハッキリとは聞えぬながら、きれ〴〵二人の問答が耳に入ると、もう聞て居る空もなく、身悶えして居たが、今の喬の言葉を聞くと等しく、そのまゝ飛込んで、倭文子のために立派に辯解しようと逸るのを、またその爲に倭文子に迷惑を來すやうな結果になつてはと、じつと控へてなほも耳を澄して居た。

暫らく俯むいて身を震はして居た倭文子は、漸やくに覺悟の顏を擧ると、

『正木に遭つて居りました事は、今更お隠し申しはいたしません。ですけれども決して汚れた意志を以て遭つて居ましたのではございませんから……』

『何といふ事を云ふか。』と喬は激して聲を荒らげながら、『お前はたつた今まで、今夜は山内を散歩して居つたゞけに違ないと誓つたのだぞ。その舌の根の乾かん中に、すぐ後から露現して居るではないか。……これで免れられなければ、それといふやうな、そんな見透いた淺薄な辯解を誰が信ずると思ふか。正木に遭つた事を自白した以上は、もうその他の事を聞く必要はない。』

倭文子はもう胸が一杯になつて了つて、云はうとする事が順序よく咽喉を出ないのだ。

『どんなお疑を受けましても、致し方がございませんけれども、……私、決して妻の道に反きますやうな事は……』

『良人に祕して情夫に遭つて居つて、それで妻の道に反かんといふのか。全體今夜は何の爲に正木と會合したのだ。兼て諜し合はして居つたに違あるまい。』

『いえ、もう決して、そ……そんな事はございません。』と倭文子の聲は震へる。

『それではどうして、遭たのか。』と喬の言葉は鐵のやうに響く。

『あの、それは——』

倭文子は云はうとして躊躇した。明らさまに事實を云へば、或は良人の疑惑を解く事が出來

るかも知れぬが、さうすると田鶴子を犠牲にしなければならぬ。それはまだ田鶴子を信じて居る倭文子――少なくも田鶴子を敵にしまいと始終頭を惱めて居る倭文子には出來難い事であつた。

『偶然に出遭つたといふのか。』

『は、はい……決して謀し合したといふやうな事はございません。……正木との間にかういふ情ないお疑を受けました事は……私殘……殘念でございます。』とおろ〳〵聲で云ふ。

外に聞いて居る磯はさつきッから齒痒がつて居たが、この言葉を聞くと、なぜ田鶴子の事を云はぬのかと、もう辛棒が仕切なくなつた。で倭文子の迷惑になつても構はず、中へ飛込んであらひざらひ喬の前で云つて退ようと、かう覺悟をして襖の引手へ手をかけた時、ふと人の氣配がしたので、驚ろきながら見返ると、それは思ひがけぬ田鶴子であつた。田鶴子に睨むやうに見られると、磯はもう縮んで了ひ、意氣地なく一歩退つて、どうこの場を胡麻化さうと狼狽るのである。

かゝる時田鶴子は立つたまゝ命令する如く願で磯を差招いた。磯は仕方なくその方へ行くと小聲で咎めるやうに、

『お前、まアそこに何をしてお出なの？』

『いえ……あの……』

『兄さんに言つけてもいゝかへ。何をして居たのさ。お前なんぞの來ところぢやア有ません。』と底力のある聲で囁やくのだ。

『は……』

『さつさと彼方へ行つといでな……。鬱々しいよ。』

主客地位を殊にして居るから、如何無理を云はれても、愛は言葉を返す事が出來ぬ。また今更襖はず書齋の中へ駈込む事も出來ないので、涙と怨を呑込ながらそこを立去るのだ。あゝ倭文子はこの先責られてどうなるだらう。磯は氣も狂ふばかりである。

田鶴子は磯をその室に送りながら、襖を閉切て、自分が磯の地位に代つた。書齋の中では室の外にどんな出來事があるとも知らず、喬は四邊を憚る聲で、

『お前は證據を押へられぬ中は、決して自白せぬのだ。醜行の現場を認められぬ以上は、どこまでも醜行がないと言張るのだらう。併しお前には自白させる事がまだ〳〵あるぞ。第一お前は昨夜も正木に逢つて居るが、それも證據があるのだから遭はんとは言れまい。』と喬の眼は鋭どく倭文子を射る。

『昨夜正木と逢つた事まで喬は知つてるのだ。この刹那に倭文子の胸には、田鶴子を疑ふ心が

『いやそれがいゝ、どつさり二人で御馳走するが善からう。』
四人は樂しい笑を合はして、拭つたやうに田鶴子の機嫌も直る。

（九）

酒の一めぐり続つた頃、元園町へ行つた使は歸つて來たが、丁度正木が散髪に出かけた後であつたといふ事で、歸り次第出向せると云ふ民子の傳言を聞いて來た。
暫らく正木が來ぬと思つたゝめでもあるまいが、田鶴子は「一寸」と座を外して座敷を去つて了ふ。
『正木君は今何して居るんです。』と鍋島は倭文子に話を向ける。
『あの毎日大學院の方に通つて居るさうです。』
『相變らず勉強して居ると見えますね。實に正木君の努力はえらい。他日必らず日本の學界に何かの貢獻をする人ですね。』
『さア、どうでございますか。そんなになつて呉ますとようございますが……』
『いやあんな健實の人なら、確に成功しますよ。』
『早くやつて來ればいゝが――。』と喬はいふ。

る數は三度や五度ではあるまい。』
『いえ、決して……その外に正木に遭ました事は……決してございません。』と泣聲になつた。
『なに、無い……？』と妻を睨めて、『それその通りお前は證據を押へられぬと自白せぬ女なのだ。それならばこの事に就ては最早云はん。』と鋭い調子で、『倭文、お前はこの外に前日實家へ行つた事を秘して居るだらう。』
『は……』とまた胸を打れて、『それはお母様の仰しやりつけでまゐりましたに……相違ございませんけれども……あのそれはお母様の御存知の事でございますし、あの……そして……』
『母が承知なら良人に秘してもよいといふのか。』と喬は聲を勵ました。
『いえ、さうではございませんけれども……』
『心に疚しい事のないものを、何で良人に秘するか。』
倭文子は言たい事が山程あるけれども、胸が裂るやうで容易に咽喉を出ないのだ。哀れに唇をのみ震はして居ると、
『そればかりではないぞ。』と絶望と憤怒に良人の聲は震て、『お前は平潟でも正木に遭つて居ながら、よくも己を僞つて居つたな……。先日己の前で何と云つた。平潟では斷じて正木に遭はぬと泣いて潔白を表した事を覺えて居るだらう。已は大馬鹿ものだから、その時も殆んどお

前を信じて了つたのだ……。お前の誓は女郎の誓と同なじ事だ。もうこの上騙されはせんぞ。
さア辯解の言葉があるなら云ふて見い。』
見よ。かういふ喬の眼からは、涙々として熱涙が滴るのである。今まで耐へに耐へて居た倭文子の氣力は最早その絶頂に達した。よろ〳〵とその姿勢が崩れたと思ふと、あはれ倒れようとした華奢な身體を、暫し傍の椅子に支へて、そのまゝずる〳〵と羅毯の上へ、ハラリ長襦袢の裾を亂して、よゝとばかり泣伏した。

（十八）

あはれかゝる日の來らん事を恐れて、胸の安まる折も無つた。かの平潟の會見を、良人は遂に知つて了つたのだ。今は田鶴子がお磯と正木の話を偷聞して居て、それを喬に打明けた事に殆んど何の疑ふべきところもないやうに思はれる。倭文子は疾に懺悔すれば善かつたと、今更その機を失した事を悔んでも追つかぬ。人間の淺智惠を嘆いても及ばぬ。今になつて懺悔したところで、どうして良人の疑惑を散ぜしむる事が出來よう。それかとて懺悔せぬ譯にはなほ更行かぬ。倭文子は胸を寸斷される懊惱に、疾には言葉も出ないで居ると、
『倭文、よくも己の顏に泥を塗つたな。』と良人の沈痛な言葉が骨を抉るやうに響く。

倭文子は僅かに顏を擧て、
『平潟で正木に遭つて居りながら、お隱し申しましたのは、何とも申譯がございません。……』
ですけれどもこれにはいろ〳〵申上たい事がございます。決して私、貴君のお顏に泥を塗るやうな、不貞の行をいたしました覺えは……』と一所懸命に云つた。
『なに、それでも不貞の行爲はせんといふのか。どこまで良人を馬鹿にするつもりか。』
『私、今更僞を申上て、罪を重ねようとは存じません。……包まず事情を申上たいと存じますが……どうぞお聞取を願ひたうございます。』とやゝ落ついていふ。
『說明が出來るなら云つて見い。』
『それでは暫らくお聞取遊ばして……。始から申上なければ分りませんが……あの御一緒に勿來へまゐりまして、松平さんや立花さんと道連になりました時……松平さんが私に妙な事を仰しやるのでございます。』
『妙な事とは？』
『定めて助川へ行つたらうといふやうな事なのでございます。』
『ウム。』と喬は眼に異樣の光を浮べて、『なぜ松平がさういふ事を云つたのか。』
『はい……あのそれは……誰にも申上まいと存じて居ましたが、實はこちらへ嫁る前に松平さ

んから、煩さく私にあの……お話がございましたのを、私どうしても氣が進みませんから、お斷り申上ましたので……松平さんは何でもそれを根に持つて居らつしやるので、私と正木の間に、何かあるやうに仰しやるのでございます。』

『それでどうしたといふのだ。』

『私は松平さんの仰しやる事が、その時は何の事かよく分りませんでしたが、後で正木がまるりましてから……、正木が松平さんと同じ列車で助川まで來て居たといふ事が分りましたので……。さういふ譯で始めは何か分りませんでございましたけれども、一度松平さんにそんな事を云はれて心持を惡くして居るところへ、貴郎もまた私に、この近所に誰か來て居るだらうと妙な事をお尋ね遊ばしました。』

『ウム。』

『私は變な事と存じながら、まだ何にも知らない中ですから、そんな事はないと申上たのでございます。……申上ましたけれども、何だか私も心にかゝりますし、……思ひなしか、貴郎の御機嫌もお惡く、何かお疑ひ遊ばして居らつしやるやうなので、もしや松平さんが何か貴郎に仰しやつたのではないかと、磯と二人で氣にして居ますところへ、あの藤乃さんから手紙がまるつたのでございます。』

倭文子はそれから手紙の文句を喬に問はれ、有のまゝに云へば疑を增す原因と、ためらつて居る横合から、磯が錦子の事にして答へたので、ついそれなりに濟して了つた事を自白し、なほ正木の訪ねて來た事に移つた。

『正木は實は貴郎にお目にかゝりたいと申して立寄つたのでございましたが、前申すやうな事情がありまして、貴郎の御機嫌は直らず、明日は松島に立つ事となつて居ります際……全く女の淺智惠からですけれども、正木が思ひがけず、助川に來て居て訪ねてまるつたといふ事がお耳に入つては、それこそどうしてもお疑を免れる事は出來まいと、貴郎のお留守中なのを幸ひ正木に賴んですぐ歸つて貰つたのでございます……。全くそれに相違ございませんので……決して怪しい關係などが有まして、正木が忍んでまるりましたのでも、また私が隱しましたのでもございません。』

倭文子が涙と共に、その眞實を語れる言葉は、必らずや喬に何等かの感覺を與へたに相違ない。併し喬は暫らく俯むいたまゝ、木像のやうに默つて居た後、驀て顏を擧ぐるとたゞ冷やかに、

『それではお前はすべてを、私の邪推に歸して說明をしようといふのだな。』

『いえ、決してそんな……全く私の思慮が足りませんからで……』

『私の邪推を避るために、お前は時々山内で遭つて居たのだ！　お前のためには實にいゝ口實だな。』

倭文子はそれほどまでに、良人は疑を解て呉ぬかと情なく、

『私、決してそんな事を口實に致しますやうな事は。……平潟で正木に逢ました事でも、心に恥るところのない印に……實は鍋島さんにお打明申してあります位で……』

『なに、鍋島に――？　併し鍋島は外國に行とるぞ。』

倭文子は怨を籠た眼で良人を見ると、ハラ〳〵と口惜し涙を溢いで、

『貴郎は私が鍋島さんの居らつしやらないのを善い事に……勝手な事を申上ると思召すのでございますか。』

『……なにもそれを作り言とは云はん。併し鍋島に話せば、私に話さんで濟しても善いといふ事はあるまい。……ウム、何だな。鍋島に話してあるから、毎晩逢つて居つても良心に咎めんといふのだな。』

『正木に出逢ましたのは、今夜と昨夜とだけでございます。その外に逢ました事は――』と半ば云はせず、

『偶然に二晩もつゞけて逢ふといふ事があるか。』と喬は聲を鋭どくした。

『今夜は實は……田鶴さんが――』と云さして倭文子はまた躊躇つた。それは、もうこの上は――無論自分が書たと自白する筈はない――倭文子の云分は立ぬと考へたからである。

と、手紙の事を云はうとしたのであるが、別に證據のない以上、田鶴子がこれを否定する場合

『なに、また田鶴を引張り出すのか。』

かう云はれたので倭文子はなほ更挫けて了ふ。襖の外では田鶴子が息を殺して耳を澄して居る。手紙の事を云へばすぐ飛込んで嫂を取挫がうと腹を極てたのらしい。

『……』

『田鶴がどうしたのか。』

『……』

倭文子は遂に飽までも田鶴子のために――寧ろ久松家の平和のために犠牲にならうと決心したのである。

『よし、もうよい。……己は最少し有力な辯解があらうと望んで居た。お前のいふ事はすべて曖昧な事ばかりだ……。お前の辯解を誰が滿足に聞けるか。』と喬は太い絶望の溜息と共に、天井を仰いで安樂椅子に仰反つた。

倭文子はそのまゝ暫らく俯むいて居たが、やがて顔を擧ると、その眼には寧ろ奇異に思はる

るまでの平靜の色が宿つて、

『今夜の事に就ましては私、思ふ仔細がございますから、何事も申上ません。……このためお疑ひを高めましても、いつかは必らずこの倭文をお憫み下さる日があると信じます。……只今まで申し上ました事も、すべてお信じ下さらぬとあれば、致方がございませんが、私も川上益荒の娘でございます。女の道に外れた事を致しましては、貴郎のお名は素より、父の名まで汚す位の道理は存じて居ります。そんな破廉恥な事をする女と、お疑を受ました事だけは、如何にも殘……殘念でなりません。……萬一私に汚れた事がありましたとすれば、今更卑怯に身の罪を免れようとは致しません。私その位の覺悟はあるつもりでございます。』と涙を搾つて云つた。

喬はまだ默つて居る。

倭文子は決然とした語氣で又言葉を次ぐ。

『縱へどんなお疑を受けましても私、飽までも汚れた行爲のない事を申上ます。……また正木に致しましても、決してそんな心の腐つた男ではございません。正木のためにこんな事申上ましては、またお疑を增ますかも存じませんけれども……正木は意志の堅固な、正義の觀念の强い、そして川上家のためには、一身を犧牲にしても厭はぬ、忠實な精神に富んだ男でございます。私ども二人は小さい時から一緒に育ちまして、兄妹のやうに暮して來たに相違ございません。只今でも兄のやうに思つて居ります。正木も多分實の妹ほどに、私の將來を案じて居りませう。……その外に正木には汚れた考へは少しもございません。正木にもしそんな考へが少しでもありましたなら、私、決して正木に近づきは致しません。……私これだけの事を申上ればもう……最早外に何も申上る事は有りませんから、この上はどうぞお心任せに遊ばして……。私にも重々手落が有りましたのですから、お疑を受ました事は決してお怨には存じません。またどんな御成敗を受ましても……それはもう覺悟の上でございます。』

倭文子は今まさに絶望の境より一轉したので、かう云終つたその顏には救はれたやうな色が見え、今まで泣くづれて居た弱い女の胸に、俄かに女王の如き强さと誇とが充渡つたかの如くに、其言葉には人の肺腑を刺すやうな力があつた。

喬はこの詞の中にまた半身を起して倭文子と相對したのであつたが、倭文子がわが顏を正視して、その決然たる面色に自分を見て、臆せず大膽にその感情を吐露するのを見ると、何とも知れず妙にその心が騷ぎ出したのである。そして倭文子の詞が終つた時には、却つて喬の方が俯むいて居た。

暫らく沈默に耽つて居た後、喬は漸やく顏を擧て、

『よし、よく大膽に云つたな。』かう云つて、遺がに川上の娘であるといふ風にじつとその顏を見ながら、『もうよい、彼方へ行け。』

『は……』と云つたが、良人の心がよく分ならいので躊躇して居ると、『彼方へ行つてくれ……私に考へさしてくれ。』

此途端偷聞をして居た田鶴子は、兄の心が折かゝつて來たと見て、倭文子を呪ひながら見つけられてはと、急いでそこを飛退いて二階へ上つた。

倭文子は靜に立上つて、涙を收めながら、

『それでは彼方へまゐります……どうぞ私をお信じ遊ばして……』と、口の中に云つて何となく、後髮引るゝ室の中を出た。

倭文子が重い心を抱いて、わが室へ歸つて來ると、田鶴子に追立られて、縫さしの仕事にかかりながら少しも針は運ばず、立つたり居たり、主人の身の上を案じて居たお磯が急ぎ立つて迎ひ入れる。そして囁やくやうに、

『お嬢樣、どう遊ばしまして。……私、どんなに氣を揉んで居りましたらう。』

倭文子は疾には答へず、影のやうに悄然坐ると、

『磯、旦那樣はもう何もかも御存知なのだよ。』と投るやうに云つた。

『あの今夜正木さんにお逢なすつた事をでございませう。』

『そればかしちやアないよ。昨夜正木に逢つた事も、平潟へ正木が訪ねて來た事も、みんな知つてお出なのだよ。』

『えッ！』と磯は驚ろいて眼を睜ると、蒼青になつて泣かぬばかりに倭文子の顏を守つたが、倭文子は案外沈着いた顏をして居るので、どうなつた事かと氣が氣でなく、『それではあの何もかも御存知なのでございますか。』と震へ聲で聞く。

『あゝ。』と倭文子は幽かな溜息一ツ。

『お嬢樣。』と磯の眸子は輝やいて、四邊を見返つたが聲を潜め、『それではきつと何もかも[illegible]子樣が、旦那樣に仰しやつたに相違ございません！』

『お前もさうお思ひかへ。』

『はい、もうそれに違ひございません。』と悔しげに力をこめて云つて、『あの何でございます。實は先刻お嬢樣が、旦那樣の書齋へ入つしやいましたお後で、私、心配で心配でなりませんから、濟ませんが、お次の間で偷聞をいたして居つたのでございます。そして貴女は立派にお明の立ますものを、曖昧な御返事ばかりして居らつしやいますから、いつそ癪痒くつて〳〵……もう構はず書齋へ飛込んで、實は田鶴子樣が斯う〳〵と、殘らず旦那樣に申上て了はうと……

あの、もうさう考へて、襖を開ようとしました所へ、お嬢様、田鶴子様が歸つて入つしつて、いつか私の後に立つて居らつしやるのでございます。』

『え、田鶴さんが――』

『は……、そしてこゝはお前の來て居るところではない。早く彼方へ行かぬと、旦那様に言つけると仰しやつて、私を追やつた後で、御自分が偷聞して居らつしやるのでございますもの。』

と磯は悔しがつていふ。

『まア、さうなの！』と今更のやうに倭文子は身を震はせて、何とも知れぬ無念の思ひに呉るのだ。

『でございますから、もう田鶴子様の仕事に相違ございません。正木さんがあの方を拒絶なすつたところから、その仕返しに貴女を正木さんに逢して置いて、そしてそつと旦那様に御覧に入れたのかも知れはいたしませんよ。それでなくて旦那様が御承知なさる筈はないぢやございませんか。』

『私は後になつて、もしやさうぢやアないかと氣がついたのよ。』

『それでお嬢様、貴女は旦那様に有りのまゝの事を仰しやつたのでございますか。』

倭文子は長い息をついて、

『だけどもね、磯……私、もう覺悟して來たのよ。田鶴さんやお母様の敵のやうにして、自分の明を立たくはないんだしね。よしそれで明が立つたにした所で、夫が決して私の仕合にはならないに極つてるのだもの。……私一人がこんな運命を持つて生れて來たのだと思へば諦らめられるんだし……もう田鶴さんの事などは、何にも云はないつもりで居るんだから……。それで旦那様が信用なさらなければ、もうそれまでと思つて居るのよ。……私に落度があればこそ田鶴さんがそれを利用したといふだけなんだから、……みんな私のせゐなんだわ。』と涙ぐんで差俯むく。

『でも貴女は……そんな……』と磯は咽喉まで一杯になつて、『お嬢様はなぜそんなにお人の好い事ばかりを仰しやるのでございます。貴女がそんなお優しいお心でも、田鶴子様は何とも思つて居らつしやりは致しませんよ。いゝ事にして、この先どんな事をなさるか知れやいたしませんわ。』

『旦那様にもう隱して置く事は無いんだし……この先田鶴さんが何をしようと、私、もう何とも思はないのよ。』

『きつとさうでございますか。』と倭文子の心を讀まうとするやうに、その顏を見詰て、『……で旦那様はお疑をお晴し遊ばしたのでございますか。』

『さア、迚も私をお信じなさらないには極つてるの……。だけどもね。今夜は考へて見ると仰しやつてよ。』

『おや、それではいくらかお心がお折遊ばしたのでございませうね。』

倭文子はそれには答へず、默つて居たが、

『磯……私はなぜこんなに苦勞の多い身の上だらうね。……この先どうなつてももう構はないけれども、お腹の子を思ふと……』とほろりとなる。

『ほんとに、お、お察し申します。』と磯は急に悲しくなつて、その場に泣伏した。

（十九）

翌る日曜日の朝まで喬は倭文子に顏を合せなかつた。心づかひの一夜は明て、今日は更に恐ろしき何事かの待設けられる日であると、倭文子は心の中に感じたのである。今朝は田鶴子は一度も姿を見せぬ。二階に籠つて居るか、左なくば離に隱れて居るのであらう。倭文子が母の機嫌を伺つた時に、お石はたゞ鋭どく、嘲けるやうな一瞥を倭文子に與へたのみで、何にも云はなかつたが、倭文子は姑は最早昨夜の事を知つて居るに違ないといふ心持がした。

倭文子は朝牛乳を取つたのみで、食事は取らず、居室に垂籠て、磯と淋しく語り合つて居る時、書齋の方で呼鈴の音が聞える。磯が行つて用を聞くと、

『倭文に來いといへ。』

磯はそのまゝ引返して來て、心配さうに、

『旦那樣のお召でございます。』

『さうかへ。』と淋しく首肯いたまゝ、何とも云はずに倭文子は立つて行く。その淋しい、貴の見ゆる姿を、磯は見送つて涙ぐんだまゝ、姿は隱れて了つても、なほ幻でも殘つてるやうに、その方を見てぼんやりして居たが、やがて心づいて室のものなど取りかたづけて居るところへお富が來て、

『お磯さん、御隱居樣のお召ですよ。』

『えッ、あの私を？』と磯の驚ろく顏を尻目に見て、

『さうですよ。お前さんだから、お前さんを呼に來たんぢやないかね。』とはしやいだ聲で云つて、さつさと行つて了ふ。

磯は何事とも知らぬが、どうせ碌な事でないに極つてると、胸を騷がせながら、隱居の間の方へ進まぬ足を運んだ。

入違ひに足音を偷んで、倭文子の室へ入つて來たのは田鶴子である。そッと四邊を見廻しな

がら、書棚の上の蒔繪の手文庫を持出すと、蓋を明て、懷から何か白紙に包んだものを取出すや否、手早く文庫の中の方へ突込んで、舊の通りに蓋をして、書棚の上へ直し、なに食ぬ顏をして室を出ると靜に二階のわが居室へ昇つて行つた。

倭文子が書齋へ入つた時、良人は卓子に凭れて居たが、妻の姿を見ると、こなたに椅子を向けて、

『お前、それへかけるがよい。』と前の椅子を顎で差示した。

良人の調子には少の溫味も無かつたが、倭文子は云はれる儘無言に、椅子の上に腰を卸し伏目になつて良人の言葉を待つた。

『倭文、最早何事もお母さんが御存知になつて了つたぞ。』と痛恨の調子で云つて、鋭どく妻を見る。

倭文子は今更驚ろきはせなんだ。田鶴子が自分を良人に誣た以上、姑にもその通りを誣た事は明らかであると考へついたからである。默つて俯むいて居ると、

『お前の不仕末の行爲については、私は最早お母さんに辯解の言葉がない。お前が私に辯解の出來ぬものを、私がどうしてお母さんに辯解が出來ると思ふか。』

倭文子は良人の心の解て居ぬ事を知つて、心は鐵の如く重くなるのを覺えた。

『最早致し方がございません……。私、覺悟を致して居ります。』と倭文子の調子が亂れる。

『覺悟をして居ると云へば、私も多言はせん……。私とお前の關係はどうなるか、またお前の行爲に對してどう處置せねばならぬか、これは今直ちに極る事は出來んが、こゝに一ツ先決問題がある――それは外でもない。磯に暇を出す事だ。』

倭文子はハッと色を變へた。併し自分の運命さへどうなるか知らぬのに、小間使の去就の如き寧ろ問題とするに足らぬ。この上はどんな禍が落かゝつて來やうとも、どれほどまでこれに堪へ得るか、限りある身の力試さんと、强て弱い心を勵まして、

『磯を返します位何でもございません。』

『それではすぐ歸すがよい……。そんな事で彌縫が出來るとも思はんが、兎に角今度は私から命令するのだ。』

『はい……それではすぐ磯を歸す都合に致します。』

『お前にはなほいふ事があるが、兎に角まづ今の事を斷行して來るがよい。』

『はい。』と倭文子は覺えず落した一滴の涙を隱して書齋を立去つた。

磯にこの事を云つたら、どんな思ひをするであらうと、一歩毎に身體も消るかとばかり減入ながら、室へ歸つて來て見ると、磯はどこへ行つたか姿が見へぬ。磯が居らぬので心の張が折

たのか、倭文子はわれにもあらで漏る泣音を袂に噛しめて疊の上に泣伏したのである。
暫らくそのまゝで居る中、磯が歸つて來た跫音に慌てゝ涙を隱しながら、身を起すと、磯は傍に摺寄つて、
『お嬢樣、どう遊ばしました。……旦那樣がもしや……』とかういふ磯の眼も涙に濕んで居る。
『いえ、何でもないの……私には仔細ないの……お前、今までどこに居たの？』
『あの御隱居樣がお召遊ばしたものですから……』
『え？　お前をかへ？』
『はい……私、もう悔しくつて〳〵。』
『そしてどうおしなの？』
『お嬢樣、御隱居樣もゝうすつかり知つてお出なのでございますよ。』
『……』
『何でも田鶴子樣が仰しやつて了つたに相違ございません。』
『そしてお母樣がお前に何と仰しやるの？』
『それはもう……』と、ためらつて、『あの……大それた嫁だの、顏を合すも汚らはしいのと、

もう〳〵腹の立つ事ばかりを仰しやつて、何でもお前が手引をして居たに相違あるまい。そを白狀しろと仰しやるんでございます。』
倭文子は何とも知れぬ心の寒さを覺えて、
『それからお前どうおしなの？』
『私が何と申上たつてお聞入はないのでございますもの、私悔しうございますから、昨夜などは、私の手引どころか、こちらのお嬢樣が、お手紙をお出し遊ばして、正木さんを公園へお呼になつたのだと申し上て了つたのでございます。』
倭文子は許すまじき色を見せて、
『まあお前、なぜそれを云つてお了ひなの？　それをいふ位なら、私こんな思をしては居ないぢやないかね。』
磯は打萎れながら、
『でもあんまりでございますもの……』
『そしたら何と仰しやつて？』と倭文子はいよ〳〵懸念の眉を寄せる。
『御隱居樣は大變に御機嫌を惡く遊ばして、田鶴が正木を呼寄るなどゝ、そんな馬鹿げた事があつてよいものか、田鶴になすりつけやうとする不屆ものッて、もう頭から私の申し上る事を

お取上なさらないのでございます。』と悔し涙を濺ぎながら云ふ。

倭文子はいつそほつとして、

『まアそれでよかつた……。それ御覧な、私が萬一旦那様にその事を申しあげて、よし旦那様が御信用遊ばしたにしたところで、私はます〳〵お母様のお悪しみを受なきやならないやうになるのだから……』

『はい……それから御隠居様はこんな事を仰しやつて居らつしやいました。喬はまだ煮切ないで居るが、今度の事ばかりは、いかに何でも打捨つて置く事は出來まいから、私はどうするか見て居るところだつて――』

倭文子は深い息遣と共に默つて差俯むいた。

『そしてお嬢様……、私心配でならない事がございます。』

『え、どんな事？』

『あの、御隠居様のお言葉の中に――不義の手引をするやうなものは、そのまゝには置けぬから、さう思つて居るがよいと、私に仰しやいましたからでございます。もしや此上私にお暇でも出るやうな事がございましたら、後でお嬢様がどう遊ばしますか――』と磯はもう涙に咽ぶのである。

倭文子は俯むいたまゝ身を震はして居たが、やがて蒼ざめた顔を擧げると、

『磯ッ！……もうお前にはお暇が出たのだよ！』と云つて、たまらず倭文子は顔を蔽ふた。

『えッ！　あの私にお暇が……？』と磯は飛立つ許に驚ろいて『あのお嬢様、それはほんとうでございますか。』

『あゝ、今旦那様に呼れたのはその事なのだよ。今度は御自分から命令するのだと仰しやるんだから……。私にはもうどうする事も出來ないのだよ。』

『……お嬢様、ま、どういたしませう。』と磯はおろ〳〵聲でいふ。

『お前、すぐ元園町へ歸つておくれ。……私はもう覺悟をして居るから、私の事は心配せずに歸つておくれ。』と倭文子は次第に落着いた調子になる。

磯は胸一杯で口も利けず、暫らく涙を湛へた眼で、倭文子を見詰て居たが、

『そ、それではお嬢様、磯はどういたしましても、か、かへらなければならないのでございますか。』

『どうしても歸つておくれ。……私の身體だつてどうなるか分らないのだもの。』

磯は耐へかねて思はず聲を立ながら泣伏して了つた。

『磯、ね、私の事は案じずに歸つておくれ……。いづれお前にはすぐまた逢へるやうになるだ

らうから。』
『え……？』と磯は涙の顏を擧けると、深い決心の表はれた倭文子の眼光に、自身も惹入れられるやうに覺えて、『お嬢樣……もしや貴女のお身の上も……あゝ磯は心配でどうしてお別れ申す事が出來ませう。私はもう一刻でも貴女のお傍を離れるのが――』
『そんな無理をおいひでも仕方がないぢやないかね。すぐ仕度をして歸つておくれといふのに……』
『お嬢樣……』
『もう何にも云ないでおくれ……。私の事は何も心配をおしの事はないんだから。』
『……』
『元園町へ歸つてもね。いづれ分らずに濟む事ではないけどもね。お父樣もお母樣もまだ何にも御存知ないのだから、お前から何も申上ないやうに、……あの只御隱居樣のお氣に召ないので、お暇が出たやうに云つて置いておくれ。……ね、いゝかへ。』
『は、はい……申して惡ければ、申上ませんでございますけれども……』
『あゝもう云つておくれでないやうに……たゞね、この事をね――』
『正木さんにだけ申上でもよろしいのでございませう。』

倭文子は首肯いて、
『だけどもね、私はもう充分覺悟の上なんだし、決して短氣な事はしないから、安心して居て下さいと正木にさう云つておくれ。いゝかへ。』
磯は止度もない涙を拭いて、
『こんな時に鍋島さんが居らつしやいましたら……』
『もう何にも云はないでおくれといふのに……。お前の荷物などは後から屆けてあげるから、さし當つているものだけを持つてお出……そして當分は元園町に居ておくれよ。私はいづれお父樣に手紙をあげるから。』
『は……い。』とばかり磯は泣くづをれて居たが、倭文子が立つて勵ますので、漸やく自分も立上りながら、どうしても手廻りの荷物を纏める氣になれず、立つたまゝまたしく〳〵と泣始める。
『お前はなぜさう諦めがつかないのだね。私の爲を思ふなら、早く身の廻りを片づけて歸つておくれ。』
『は……はい……でもお嬢樣、これから先お身重のお身體なのに、お附添申す方もないと思へは……私、もうどうしてもお別れ申す氣に――』

倭文子はたまらず顔を反けて了ふと、磯はそのまゝべたりとなつて、倭文子の膝に取縋つた。

（二十）

先刻磯が隱居を出た時、入違ひに入つて來たのは田鶴子で、べたりと母親お石の傍へ坐ると、

『お母さん、お磯は白狀しまして？』

お石に磯を呼つけて糺させたのは田鶴子の策略である。併し糺させる事が直に其目的ではなかつたので、白狀してもしなくつても、田鶴子にはそんな事はどうでもよかつたのだ。

『なんの、白狀などするものかね。圖々しい女だもの。』

『まアさう？　ほんとに圖々しい女ね。』

『白狀しないばかりか、お前が手紙で書生を呼寄せたのだなどゝ、そんな空々しい事までいふのですよ。』

『まアさうですか。』と驚ろいた顔をして、『それぢやア私が姉さんの僞手紙でも書たといふんですか。さうなんでせう。』

『倭文の僞手紙だとは云はなかつたが……私が頭から取上なかつたので、もう二の句はつけなかつたのだよ。まアそんな圖々しい事をいふ女なのだもの……』

『あゝ悔しい……姉さんだつて、兄さんにどんな事を云つてるか知れやしないわ。』

『いくら喬だつて、まさかそんな事まで取上はしないだらうよ……。もう今度こそあんな嫁を置いとく譯にはゆかないから。』

『でも兄さんの事だから――すぐ姉さんのいふ事を信じて了ふんだから……。今度など、もう立派な證據があがつてゐるものを……』

『喬はだまされるにしても、私がさう〳〵は承知しません。』

『おゝそれはさうとお母さん、……まだお母さんにも、云はないで居ましたけどね、あの姉さんが、大事に大事に藏つて置くものがあるのよ。私そつと見て了つたんだわ。』

『まア何だへ？　それは？』と母は眼を光らせる。

『正木さんの寫眞なのよ。』

『え、書生の寫眞！』とお石は今更のやうな呆れ顔をして『よくまアそんな眞似を！　そしてお前、どうしてそれをお知りなのだへ？』

『でも私、あの、そつと見て置いたのよ。ちやんと姉さんの手文庫の中にあるんだわ。』

『まアさうかへ！　何といふ大それた嫁だらうねえ。』

『私、兄さんに云つてやらうかしら。』

『あゝ、云つてやるがいゝとも。その寫眞でも見たら、如何な喬も眼が覺めるだらう。さう云つたら、まさか調べて見ずには置くまいから。』

『さうね。』と考へる風をして、『それぢやァ私兄さんに云つて來てよ。』

田鶴子は離室を出たがすぐ兄の書齋にも行かず、一寸逡巡つた後、そつと勝手元へ廻つてお富に何か耳打し、二階へあがつて一先わが居室へ立籠つた。

暫らくするとお富があがつて來て、何か小聲に私語いて行く、田鶴子も續いて二階を降ると今度はこわ〳〵兄の書齋の中へ入つた。

『兄さん。』

『何用かッ？』と喬はまだ櫛の齒を入れぬ頭のまゝ、充血した恐ろしい眼で妹を睨むやうに見た。

『姉さんの事で、まだ申上殘したことがあつて來てよ。私こんな惡まれ役をするの、厭ですけども……今更包んで置いても仕方がありませんから……心を鬼にして申上るつもりなのよ。』

『何だ。』

『あの、それは……別に何だとは申上ませんけれども、姉さんの手文庫をお調べなされば分る事なのよ。』

『何か手文庫にあるといふのか……。云へん事はあるまい。』と兄の聲は命令するやうに響く。

『云へと仰しやるなら云へるわ。それは正木さんの寫眞なのよ。』

喬の眼はぎよろりと妹の顏を射て、

『なに、正木の寫眞――？』

『あゝさうよ。』と妹は澄していふ。

喬は鋭どく妹を睨めたまゝ、

『假に寫眞があるとして、お前がどうして知つたのか。他人の手文庫を勝手に開て見たのか。』と怒氣憤々として云つた。

『いえ、あの……』と顏を膨らせて、『私が勝手に開て見たんぢやアない事よ。それはあのかうだわ。この間私が何心なく、椽先の方から姉さんのお室へ行かうとすると、姉さんは私の來たのにも心づかずに、手文庫からキャビネ型の寫眞を出して、一心に見つめて居らつしやるんだわ。私、お友達の寫眞か何かだらうと、知らずにふと見ると、それが大學帽を被つた正木さんの姿に相違ないんですから、びつくらして障子の蔭へ隱れて了ふと、姉さんはそれに接吻なすつて、舊の通り、手文庫の中へ白紙に包んでお藏ひなすつたんだわ。』

この言葉の中に喬の顏色は見る〳〵變つて、

『貴様……作り事ではないな。』
『まア、兄さんは作り事だなんて……』と田鶴子は悔しさうに涙ぐみ、『姉さんの手文庫をお調べなされば分る事だわ。』
喬は暫らく血走る眼に、妹を見詰て居たが、
『田鶴……お前はどこまで残酷な女だ。……もう善い。彼方へ行け！』
かう云つて喬は顔を反けると、強て讀さしの本に眼を曝した。
田鶴子は顔を眞赤にして兄を見つめ、何か云はうとして唇を動かしたが、云はずにそのまゝ默つて了ひ、怨の一瞥を投げて書齋を出ると、今度は母の居室へ入つた。
田鶴子の姿が見へなくなるゝ、喬はそのまゝ椅子を離れ、堪へ得ぬやうに室の中を歩き始めたが、暫らくして安樂椅子に身を投げかけると、太い息を天井に吹きかけた。途端に母親のお石が入つて來たので喬は邪慳に、
『お母さん、何か御用ですか。』
『少しは用もあつて來ました。』と母は自から椅子を引寄せて、それに腰を下しながら、『お前、倭文が情夫の寫眞を持つて居るといふではないかへ。』
喬は何とも云へぬ不快の苦笑を浮べて、

『また田鶴が喋舌ましたな。』
『おや、田鶴がお母さんに話して惡いのかへ。』
『……』
『それよりかお前、倭文の手文庫を調べて見ましたか。』
『調べるも調べんも私の權利です。お母さんは構はんで居らつしやい。』
『何ですと、お前、それは何といふ事をおいひだへ？　成ほど倭文はお前の大事の妻かも知らないが、私は姑だから、親の權利があります。お前が構ふなと云つても、こんな事を構はないでは居られません。……お前が調べられなければ私が調べます。さう思つてお出なさい。』とお石は腰を伸して立上る。
喬は慌てゝ、
『お母さん、お待下さい。貴女がお調べなさらんでも私が調べます。』
『……さうかへ。お前がお調べなら、なにも私が出しやばらないでもいゝのだから、ひッ込んで見て居ませうよ。それではお前、すぐお調べだね……。かういふ時だから、早くおしでないと、倭文が氣がついたら、どこへ隱して了ふか知れやしないよ。いゝかへ、すぐお調べだらうね。』と念を押して母親は歸つて行く。

倭文子の室では磯が泣く〳〵手廻りものを取かたづけ、着物も着換て了ひながら、いざとなると倭文子の傍を離れられず、倭文子も磯を手放しかねてつい愚痴になり、涙ながらの話はいつ盡るとも知れなかつたが、漸やくに倭文子は心を勵まして、

『ね、磯……いくら話したつて、泣いて見たつて同なじ事だから……早く旦那様やお母様に暇乞をして歸つておくれ。』

『は……あの御隱居様にもお目にかゝらなければ惡うございませうか。』

『お前も辛からうけれども、御挨拶をして歸つておくれ。』

かう話合つて居る時に、伏目に重い足取りが入つて來たのは喬である。じろり磯の方を見ると、

『まだ歸らぬな。』

『はい……あの、只今歸さうとして居りますところで……』と倭文子は取繕ろひながら云譯した。

『旦那様……まことに行屆きませんで……今日お暇を致します……。いろ〳〵御厄介になりまして……』と挨拶は口の中に消える。

『これも止むを得ん成行だと思つて歸るがよい。』

『は――もう決してお怨には存じません……。たゞお暇を致しますについて是非とも旦那様にお願ひが……』と思ひ込んで主人の顏を見た。

『何か。』

『奥様には決してお後暗い事はございません。どうぞ奥様をお信じ遊ばして下さいまし。磯は奥様がどれほど旦那様のお事を思召して居らつしやるか、一番よく存じて居ります。奥様を不憫と思召して下さいますやう――磯の一生のお願でございます。』と一所懸命に云つた。

喬は熱誠に滿た磯の顏をじつと見たが、別に何とも云はなかつた。磯はそのまゝ會釋して次の室へ下つて行く。

『貴郎、どうぞお敷遊ばして――』と倭文子は何か改まつて座蒲團を押進める。

喬はそれへ坐ると、底力のある低い聲で、

『倭文、お前はまだ私に隱して居るものがある筈だ。』

倭文子は何事とも測りかねて、

『この上何もお隱し申して居ります事は……』

『ないといふか。』

『はい。』

『それならお前の手文庫を見せい！』
『あの手文庫でございますか。』と驚ろきながら、不思議さうに良人の顔を見て、『何も御覽に入れるやうなものはございませんが……』
『大事なものを隱して居らうが！』と喬は聲を鋭どくした。
『いえ、何もお隱し申すやうなものはございません。お目にかけますから、どうぞ御覽遊ばして……』と斯うは云つたが、倭文子は胸を騷がせながら、書棚の上から手文庫を取出して、そのまゝ喬の前に差置いた。
『ウム、きつと何もないな。』と念を押しながら喬はそれを引寄せて蓋を開いて見る。
中には親しき友の手紙やら、手帳やら認ためものやら、繪葉書やら、いろ〳〵のものがあるが、何も良人に隱して祕て置くやうなものは一ツもないのだ。倭文子は多分良人はこの中に正木の手紙があるだらうと邪推して、それを調べるのであらうと想像した。
が喬は數ある手紙にも目もふれず、中を掻さがして、例の白紙の包を發見すると、もう眼の色が變つて、
『倭文、これは何だ。』
喬の意氣込が鋭どかつたので、次の室にハラ〳〵して居た磯は、思はず立止つてそれを窺ひ

見る。倭文子自身にも何やら合點の行かぬものである。
『なんでございますか――』と訝かる眼先へ、喬が破るやうに包紙を剝つて、取出したのは思ひきや、大學の制服を着て、七分身を寫した正木の寫眞である。
倭文子はハツと思ふと、もうそこへ倒れる許に驚ろいて蒼白になつて、どうしてかういふ寫眞が入つて居たらう。それは正しく見覺えのある寫眞である。而も今年の春撮つたので、それも倭文子がその時たゞ見たばかりではない。正木に一枚を貰つて、親しい友等の寫眞や父母の寫眞と一緒に、寫眞帖の中へ挿んで置いたに違ないので、併し久松へ來る時には、この寫眞帖を實家へ殘して來た筈である。正木の寫眞が紛れて入つて居る筈はどうしても無いと信じながらも、あまりに思ひ設けぬ咄嗟の場合だつたので、倭文子は自分で自分の記憶を疑がつたのである。
倭文子が土のやうに蒼ざめて身を震はせて居るのを見ると、喬はまた燃るやうな猛烈な嫉妬を感じて、
『倭文ッ、これでも辯明があるか。私は最早お前には欺されんぞ。』と聲を震はせて云つた。
『でも全く私の覺がない品ですのに……どうしてこんなところに――』
『なに、これでも覺がないといふのか。』

次の間の磯はなぜ正木の寫眞を手文庫などへ入て置たのかと、たまらず飛んで出て、
『旦那様……その寫眞は私が正木さんに貰ひましたので、決して奥様の御存知のお寫眞ではございません。』
『何のためお前が正木の寫眞を貰つたのだ。また假に貰つたとしたところで、それがどうして倭文の手文庫にあるか。』
『そ、それは全く私の不注意で入れましたのでございますから……』
『貴様達は何處まで人を馬鹿にするのか。もうよい、聞かん。全體お前の出て來るところではない。なぜ早く歸らぬか。』
『は……はい。』
『磯。』と倭文子は顔を擧げて、『いゝから、お前お歸り。私の事はもう心配せずともいゝんだから。』とかう云つて猶眠顔で意を通ずる。
『はい、それではお暇いたします。奥様、それでは磯はお暇致しますけれども、決して短氣な事を遊ばさないやうに……』
『それはもう案じるには及ばないから、私の事を思ふなら、早く歸つておくれ。』
磯はその場の收の案じられながら、最早居る譯に行かぬので、涙を隱して哀れに立去るのである。

『倭文、已はお前の言葉を……最早決して信ぜんぞ！』
倭文子は何にも云はずに俯むいて居る。正木の寫眞は全く覺えのない品で、これも多分どうかして手に入れた田鶴子の仕事であらうと疑つて見たが、素より口にし得べき事ではなく、最早如何に辯解するも自分の明の立てられぬ境遇に立つたことを悟ると、もう何とも知れぬ切なさを感ずる外なかつた。
『最早一言もあるまい。』
『私、最早辯解は致しませんでございますが……一々私の思ひも寄ません事ばかりで……此上は御成敗にお任せ申すより外ございません。……唯今日は辯解いたしませんでも、又私の身體はどうなりましても、必らず私の潔白をお認め遊ばす日があると信じます。』
『今更そんな事を繰返したところで、現在辯解の出來ぬお前を誰が信ずるか……。倭文ッ、正木と通じて居つたに相違あるまい。お前も軍人の妻なら、屑よく自白せい！』と喬は血走る眼で命令する如く云つた。
『そればかりは全く寃罪でございます。……汚れた行を致しました事は決してございません。申す迄もなく、萬一自分に汚れた事がございましたら、屑よく自白いたします。……また正木

に致しましても昨夜申上ました通り、決してそんな墮落した男ではございません。』

喬は憤怒の語氣鋭どく、

『お前はたゞ寃罪だと主張して居るが、事實はすべて是を反證して居るではないか。その辯解の出來ぬ以上、お前の寃罪を認める事がどうして出來るか。』

『……でございますからどんな御成敗を受けましても決してお怨には存じません。』

喬は飽まで頑な妻の姿を睨たまゝ激して言葉も出ないで居る。暫らく沈默の續いて居る時に靜かに入つて來たのは母のお石である。じろ〳〵二人の容子を見廻して、

『喬どうおしです。』

喬がまだ何とも答へぬ中に、お石は正木の寫眞に目をつけると、それを取上ながら、

『おゝ、書生どのゝ寫眞があつたの。喬、これはどこから出たのです。』

『倭文の手文庫にありました。』と喬は俯むいたまゝ苦しげにいふ。

『それ、御覽。』と母は嘲の笑を湛へて、『これでは如何なお前も眼を醒さずには居られまいが……』

倭文子は膝に双手を置て俯垂れたまゝ、哀れに身を震はして默つて居る。

喬は僅かに絶望の顏を擧げると、

『お母さん……、此上は貴母のお心任せです。』と聲は暗を絞つて出るやうに囁く。

左もこそと母は首肯いて、

『おゝ、それでは私は今から鍋島へ行て、それ〴〵手續をして來ます。お前、もう異存はないのだね。』

『……はい。喬も男です。貴母にお任せしたからは、どう御處置をなさらうと、決して異存は有りません。』

『さうかへ。』と母は勝誇つた樣で、『それでは善は急げといふから、私はすぐ鍋島へ行つて來ます。……おゝ、この寫眞も預つて行くとしよう。』とそのまゝ寫眞を懷へ入れて了ふ。

倭文子はかねて期して居た事ながら、身も世もあられぬやうに思つて、顏を擧げて愬ふるやうに姑を見上げたが、お石の冷酷な眼に出遭ふと、すぐまた默つて俯むいて了つた。

お石はにく〳〵しげに嫁を見下して、

『まア、何といふ大それた女だらうねえ。呆れて物も云へやしないよ。無敎育の下樣の娘でゞもある事か、華族の家に生れながら、有らう事か、書生と情と不義をして――』と四邊構はぬ聲高に、『久松の家名に傷をつけ、良人の顏に泥を塗るとは……』

かう云つてお石は倭文子が何か云へばと待構へる風であつたが、倭文子が一言も言はず、じ

つと耐へて觀念して居るので、張合抜のしたやうに、さつさと出て行つて了つた。

後に殘つた二人は石像のやうに身動きもせず、口も利ずに暫く相對して居たが、やがて喬はいくらか落つきの出た沈痛な聲で、

『倭文、お母さんが鍋島へ行くと云つて行かれたからは、最早私の力には何事も及ばん。みんなお前の招いた罪だと觀念するがよい。』

『は……はい、致し方がございません。』と今まで耐へて居た倭文子は、最早堪へ得ず疊の上へ泣伏して了つた。

喬はそのまゝ立上つて殆んど機械的に室を出たが、書齋へ歸つて、身を安樂椅子に投かけると苦しげな呻きが漏れるのだ。

喬が椅子の中に埋もれてる中に、どれほどの時刻を過したか知れぬ。多分三四十分は過ぎたと思ふ頃、玄關に人の訪づるゝ聲が聞ゆる。お石は鍋島へ出かけた後で、下女のお富が出て見ると、それは思ひがけぬ正木であつたので、お富は少し狼狽ながら、

『おや、正木さんでございましたか。』

『御主人に一寸御面會を願ひたくて上つたとお傳へ下さい。』とかういふ正木の顏色も常ならず言葉さへも思ひなしか、お富の耳に震へたやうに聞えた。

お富はそのまゝ正木を待せて引込むと、喬の書齋へは行かず、慌たゞしく二一へ飛んで上る。

（二十一）

『お富、まア何だね。』と慌たゞしく上つて來たお富を見ると、田鶴子は斯う云つた。

『あの何でございます。』と息を切つて、『正木さんが參りましたのですもの、そして旦那樣にお目にかゝりたいと仰しやるんでございますが。』

『えッ。』と驚ろいて『それで何うして？』

『あのまだ旦那樣には申上ずに、お孃樣にお知らせにあがつたのでございます。』

『さう。』とほつとして、『どんな容子をして居て？』

『何だか青い顏をなすつて、ぶる〳〵震へて居るやうでございました。』

『ぢや、いゝからね、旦那樣がお目にかゝる必要がないと仰しやつたと云つて歸しちまつておくれ。』

『あのそれでようございますか。』

『いゝんだよ。』と田鶴子は强くいふ。

そのまゝお富は降て行つたが、一二分するとまた目色をかへて上つて來た。

『あのさう申しましたが、是非ともお目にかゝらなければならん。お目にかゝるまでは玄關に待つて居ると云つて、どうしてもお歸りなさいませんのです。』
『さう？』と田鶴子は安からぬ風で、きり〻と眉を釣上たが、暫らくしてから、『ぢや仕方がないから兄さんにさうお云ひなね。』と投つけるやうな調子で云つた。
『それでよろしいんでございますか。』とお富は田鶴子を見たが、默つて居るので、そのまゝ二階を下ると喬の書齋へ入つて行つた。
喬は椅子に埋もれたまゝで居たが、ぢろり此方を向くと、無言のまゝ誰何するやうにお富を睨る。お富はこわ〳〵前へ進んで、
『旦那様、正木さんが是非お目にかゝりたいと云つてお見えになりました。』
喬の眼には火を點ぜられたが、
『遵ふ用事はないと云つて歸して了へ！』
『お目にかゝるまではいつまでも玄關にお待申して居ると仰しやるんでございます。』
喬は激しながら、
『よし、それなら應接室へ通して置け。』
五分の後喬と正木とは應接室に相對して立つた。

『僕は君に逢ふ必要は何もない筈だ。』
『併し私はその必要があると信じてお訪ねしたのです。私の用件は奥様のお身の上に關する事で、昨夜以來の事は只今お磯から聞取つてあがつたのです。』
『ウム、それでは倭文から君に通じて來て貰つたのだらう。』と喬の顏にはすぐ嫉妬と邪推の影が閃めき渡るのだ。
『斷じてそんな事は有ません。私は單獨に專斷でお訪ねしたのです。』
『併し倭文の事ならば、重ねて君の辯解を聞く必要はない。』
『私は强て辯解するために上つたのでは有ません。私 始め貴君や奥様が、或者の陰謀の罠に陷づて居る事實を證明するために上つたのです。』
『なに。』と喬の眼は異様の光を持つたが、すぐ嘲けるやうな笑を湛へて、『或者の陰謀？ 或者とは誰か。』
『貴君の令妹です。』
喬は驚き顏に正木を見ると、詰るやうに、『君は何を證據にそんな事を云ふのか。』
『私は赤裸々に事實をお打明します。田鶴子さんはこれ迄屢々 私 に對して戀を挑んだので、最近には私に婚約を迫り、奥様もその中間に立つて迷惑されたです。私は洋行すればいつ歸朝

するか分らん身體ですから、たゞその好意を謝して斷然最後のお斷をいたしました。田鶴子さんはそのために、俄かに態度を一變して、私や奥様を陷れたので、貴君は巧みにその陰謀に乘せられたのです。』

喬は疑惑の眼を光らせて居たが、

『あはゝゝゝ、誰がそんな淺薄な事を信ずるか。或は田鶴は君の妻にならうと考へて居たかも知れん。併し君が拒絶したゝめにそんな陰謀を企だてたと信ずる事は出來ん。さうすれば君が平潟で倭文に遭つた事も、公園で會合した事も田鶴が認たことゝせんければならん譯だ。辯明に事を缺て、人を傷つけてまで自ら屑しとするやうな、そんな卑怯な窮策を弄するとは何事か。』

正木はむつとしながら、

『僕も男子です。人を陷いれて自ら屑よくするやうな人間ぢやありません。たゞ事實を赤裸々に語るのです。現に昨夜は田鶴子さんが、何か急用でも出來たやうな奥様の僞手紙で、私を公園へ呼出したのです。そして巧みに奥様と私を遭せて置いて、その場へ貴君を手引したので……必らずさうだつたと私は信じます。否それのみならず、田鶴子さんは後から出て來て、思ふさま私に復讐したといひました。この一語が明らかに陰謀の事實を語つて居ます。これでも

貴君は私をお信じなさらんですか。』

正木の詞は強い印象を喬に與へた。併し始めから正木を信ぜぬ喬は、そのため容易に動かされる迄には至らなんだ。寧ろ嘲けるやうに、

『それでは君は、妹が僞手紙で君を呼よせたといふのかね。』

『さうです。』と一語鐵の如く斷乎と云つた。

この時騷がしく應接室の扉が開いたと思ふと、血色變へて突と入つて來たものがある。それは田鶴子で、

『兄さん、嘘よ。みんな嘘なのよ。』と叫びながら正木の前に立つて、『正木さん、貴君、何を仰しやるんです。私が居ないと思つて、蔭で聞てれば、姉さんの僞手紙を出したの、貴君に戀してるのつて、いつ貴君に僞手紙を出しました。いつ貴君に戀しました。』と左も悔しげに聲を震はせて云つた。

正木は怒氣心頭に發しながらも、女はどうしてこんな白々しい態度を粧ふ事が出來るかと呆氣に取られて、暫しは口も利得ずにたゞ田鶴子の顏を睨みつけた。田鶴子は疊かけて、

『貴君はみんな私に塗りつけようとして、作り事を仰しやるんだわ。みんな嘘だわ。作り事だわ。人を女だと思つて——あゝ悔しい！』と泣聲を振絞るのである。

『田鶴子さん。』と正木は鋭どく、『貴嬢は私の面前でよくそんな事が云へますね。現に昨夜は私に遭ふため奥様の僞手紙で、私を呼寄て居るぢやァありませんか。』

『嘘よ、嘘よ、私貴君に遭ふ必要などはちつとも無つてよ。姉さんの僞手紙なんて覺えもない事だわ。』

『田鶴、默つて居い。』と喬は妹を制して貞雄に向ひ、『妹と水掛論をしたところでつまらん。君はその僞手紙を持つて來て居るだらう。それを見せて貰はうぢやァないか。』

『いや、その手紙は破つて了ひました。』

『それ、御覽なさい……眞實の姉さんの手紙だから持つて來られないんでせう、兄さん、嘘なのよ。みんな嘘なのよ。』

『正木君、證據のないものを爭つて見たところで仕方があるまい。』

正木は悔しさと、田鶴子に對する激怒のために、身體を震はせて居たが、

『證據がないので僕を信ぜんと仰しやれば夫迄です。併し奥様のお書にならん手紙が、奥様のお名で私に屆く筈もなければ、田鶴子さんが、その後私に對して、思ふさま復讐したと云はれる筈も無いです。私は常識で容易に判斷し得べき事實を申上て、それで貴君が判斷が出來ぬと仰しやれば、たゞ飽まで、貴君が令妹の術中に陷つて居る事を、貴君の爲に悲しむのみです。』

と昂然として云つた。

兄の答ふる前に妹は引取つて、

『正木さん、貴君、よくまァそんな白々しい事が云へますことね。私こそこれまで姉さんや貴君の影になり日向になつて、盡して居たんぢやァありませんか。そして度々御忠告もして居たぢやァ有ませんか。貴君があんまり不謹愼だからこんな事になつたんですわ。だから昨夜最後にお目にかゝつた時に貴君の自業自得だと申上たんですわ。……復讐などゝいつ私が申しました？』

正木は憤怒の絶頂に達せざるを得ぬ。あはや鐵拳を見舞はんとして僅かに耐へ、

『貴嬢のやうな良心もなく廉恥もなく、あらゆる事實を誣言する女と爭つたところで無益です……。貴嬢と言葉を換す必要は有りません。彼方へ行つしやい！』と戸口を指さした。

『いゝえ、彼方へはまゐりません、私と對決が出來ないのが、貴君の後暗い證據ぢや有りませんか。』

『對決といふやうな事は、多少の良心を存して居る人間にいふ事です。』と尻目にかけて、『久松さん、令妹をお斥け下さい！』

『失敬な事仰しやい。こゝは私の家ですもの、一寸も動きません！　さァ斥けられるものなら

斥けて御覧なさい。』と田鶴子は甲高な聲を立る。

正木は一歩進んで、あはや田鶴子の手を拉せんとした。喬は色を作して椅子から立上る。

『亂暴をなさいますの？　さア出すなら出して御覧なさい！』と田鶴子はいよ〳〵黄ろい聲を振絞るのだ。

應接室の騒々しい物の音は、室の外にも漏ずには濟なかつた。暫らく泣くづをれて居た倭文子は、次第に自分の運命の決せられた事を自覺すると、今までの覺悟に對しても、悪びれた様は出來ぬと、涙を收めて机の前に靜座したが、萬感こも〴〵集つて、女と生れた果敢なさがしみ〴〵と身に泌み、何とも云へぬ悲哀に襲はれて、抉られるやうな胸を抱き、刻々と迫り來る何ものかを待設けて居る時に、ふとこの應接室の方より起る、騒々しい物の音に耳を留た。

何か判然とは分らぬが、どうやら男と女と爭つて居るやうに聞えるので、倭文子はもしや正木が來て居るのではないかと直覺すると同時に、烈しい胸騒ぎを覺え始めた。机の前を離れて闘の傍まで出て見たが、どうも正木と田鶴子と言合つて居るやうな氣がしてならぬ。併しまた判然とはせぬので、なほそれとなしに次の室から次の室へと、われを忘れて進んで行つた。

途端に偷聞でもして居た風で、慌たゞしく應接室の方から逃て來た下女のお富が、倭文子の前を過らうとして、兩方意外だつたので、どちらも妙な顏を仕合つたが、お富はそのまゝ眼を

反して行過ぎやうとするのを、倭文子は小聲に呼止めて、

『お富、今誰が來てらつしやるのかへ。』

『はい、あの……』とためらつたが、『正木さんが來てお出でございます。』と妙に倭文子の顏を見た。

倭文子は扨こそと、胸の動悸はお富に聞えはせぬかと思ふまでに高まつたが、何氣なく粧ほつて、

『そして旦那様は？』

『旦那様もお嬢様も、應接室に居らつしやいます。』と言捨て、お富は後から追立られるやうに擦抜て行つて了つた。

倭文子は疑もなく正木が、自分を救ふために來たのであらうと思ふと、腸を掻拐られるやうで、立つても居ても居られないやうな氣になる。どうかして正木を宥めて歸したいと逸つても自分は應接室へ行くべき限りでもなく、また正木には決して顏を合はされぬと思ふと、途方に呉てそのまゝそこに立縮むのであつた。

應接室からはなほ途切れ〳〵に激した聲音が聞えて來る。もし自分の姿を見られては、なほ更疑を深むるばかりか、正木にも迷惑をかける道理と、倭文子はそのまゝ室へ引返さうと考

へるのだが、足は不思議に應接室の方へ引寄せられるのだ。襖を小楯に取つて、尙も耳を傾むけやうとする時、また一しきり騒がしい物の音が起つたと思ふと、憤然として自ら席を去つたのか、喬に突出されたのか、眞赤に激しながら、應接室を出て來る正木と、端なく倭文子は顏を見合はした。

正木はハッと思ふと立止つて、

『おゝ！』と此方へ寄らうとしたが、すぐ後から喬と田鶴子が出て來た容子に、そのまゝ素知らぬ顏で玄關の方へ折れて了つた。倭文子は慌たゞしく身を退いて、自分の室へ歸つたので、喬にも田鶴子にも見られなかつたのである。

（二十二）

小間使の磯は川上家へ歸ると、まづ夫人に久松家から暇の出た次第を告げた後、すぐ正木に遭つて昨夜來の事を語り、更に鍋島老夫人に訴ふべく、車を赤坂に飛ばしたのである。

老伯爵夫人は磯の話を聞いていたく驚ろかれた。大體の成行や家庭の事情は略これを知つて、既に心を傷めて居る際ではあつたが、田鶴子がそんな恐ろしい企をして、倭文子を陷いれたらうとは夢にも思はぬ事であつた。併しそのこゝに至るまでには、いろ〳〵の事情が纏綿して居るので、今磯の話によつて判斷して見ると、最早到底彌縫の道もなさゝうに思はれる。なまなか彌縫して見たところで、老母や田鶴子に對して、圓滿な關係の成立を望む事は難かしさうだ。いつそ今の中離緣した方が倭文子の利益ではあるまいかと、こんな考が烈しく老夫人の胸に往來するので、さすがにそれとは口にも云へず、磯と溜息を合はして居る時に、取次の女中が來て、久松の老母が面會に來た事を告げる。老夫人と磯は顏を見合はして、

『きつと其事に違あるまい。それではお前さんは暫らく下つて待つてお出がよい。私はすぐ久松の母に遭ひますから。』

かう云つてお石を別室へ通すやう女中に指圖をし、やがて時刻を計つて立つて行くと、お石は鹿爪らしく坐つて居て、まづ時候の挨拶を濟ませ、

『今日は誠にいやな事で、あがり悪いところを出てまゐりました。外でもございませんが、嫁に不都合の事が有りますので、離緣を致したいと存じ、喬も承諾の上出ましたのでございます。』

老夫人は靜かに聞取つて。

『それはまア思ひも寄らぬ事を伺ひます。一體倭文さんにどんな不都合があつて、離別を遊ばさうとなさるのでございます。』

『それが貴方、全くお話も出來ないやうな不始末なので……、有う事か、元園町の實家に居る書生と不義をいたしたのでございます。』

老夫人は聞捨かぬる面色で、

『書生と不義と仰しやると容易ならん事でございますが、それには何ぞ慥かな證據でもございますので――？』

『ハイ、それはもう有るの段ぢやございません。前々から嫁にはさういふ素振があつて、どうも怪しいと思つて居りますと、貴孃、もう宅の前の山内で何度密會して居るか知れないのでございますもの……。現在一昨夜も昨夜も伜に見つけられたのですから、彼女の不義はもう慥なものでございます。』と敦圉ながらいふ。

老夫人はどこまでも沈着いて、

『不義の證據と仰しやるのはそれだけでございますか。』

『いゝえ、貴女、それ許りぢやございません。彼手の手文庫から書生の寫眞が出ましたのが、何よりの證據でございます。私はちやんとその證據を持參いたしました。』とさも得意に懷中から例の正木の寫眞を取出して、老夫人の前に差置く。

此方は別に取上げて見ようともせず、

『この外に何ぞまだ證據でも――？』

お石はぎよろり眼を光らせて老夫人を見返したが、

『貴女、證據はもうこれで澤山でございます。彼女がもう何とも辯解が出來ないのでございますもの、平生の行から照し合せて、不義密通に相違ございません。』

老夫人はお石の逸るほど靜かに、

『不義密通といふやうな惡名は、容易に人に負はされぬことは、貴女も御承知でございませうね。』

『は……はい、それは存じて居りますとも』と苦り切つた老夫人の顏を見る。

『公園で何度密會して居るか知れぬといふお詞でございますが、大方一々お突止になつたのでございませうね。』

『一々突止は致しませんが、昨夜も一昨夜も密會して居ますのが、何よりの證據でございませう。』

『左樣でございますか。それなら田鶴子さんも、正木には二三度公園で遭つて居らつしやるやうに承知して居りますが、さうすると田鶴子さんも、不義を遊ばしたやうなものでございますね。』

『え？　それは思ひも寄ぬ事を伺ひます。よしんば田鶴が誰に遭ましたところで、決して不義などいたすやうな娘ではございません。』
『それなら倭文さんとても同じ事ではございませんか。第一昨夜誰が正木を公園へ呼よせたかそれを御詮議遊ばすのが何より肝腎かと存じます。』と意味ありげにお石を見詰る。
『おや、何か妙な事を伺がひますが、それでは田鶴でも書生を呼んだと仰しやるのでございますか。』
『何もさう申すのではございませんが、昨夜は眞先に田鶴子さんが、正木に遭て居らつしやるやうですから、それを御承知の上かと、お尋ねいたすのでございます。』
『えい、そんな筈は決して――』と妙な顏をしたが、老夫人が何か自分より餘計に知つてるらしいので、薄氣味惡く、云ひさした口を噤む。
『その邊の事もよくお調の行屆かない中に、不義呼はりは餘りお手廻りがよすぎるやうに存じますが、それとも倭文さんが不義したと自白遊ばしたのでございますか。』
『公園の事は公園の事としましたところで、手文庫に書生の寫眞があるのが、免れぬ證據ではございませんか。情夫の寫眞まで大事に收つて置くやうなものを、一刻も久松の家へ入れて置く事は出來かねますから――』

『正木の寫眞とても倭文さんが入て置たのやらどうやらそれも分らず、また入れてあつたにしたところで、このごろは奥様達や孃様方も殿方と御交際を遊ばしますし、私共の娘の時代とは違ひますから、殿方の寫眞が有ましたところで、不義の證據にはなるまいと私は存じます。別して正木と倭文さんとは乳兄妹の間柄であつて見れば、正木の寫眞を持つて居るにしましても、格別の不思議はないやうに存じますが……』
『それでは貴女はこれだけ申上ても、倭文に淫な事はないと仰しやるのでございますか。』
『どうも私にはそれだけで倭文さんに惡名を附る事は出來ぬやうに考へます。それで離緣をすると仰しやるなれば、私には川上へ對し、口が利けませんでございますから、どうぞ直接貴女からお掛合遊ばして下さいまし。』
かう蹴つけられて、お石は呆氣に取られながら老夫人を見詰たが、俄かに思ひ返して、
『いえ、何もそれで倭文を離別しようと申すのではございません。ハイ、彼女は全く家風に合ませんから、出したいと申すのでございます。』
老夫人は顏を柔げて、
『おゝ、それならばお話は分つて居ります。不義の事はそれではお取消し遊ばすのでございますね。』

『はい、離別さへ致しませば、その方はどうでもよろしうございます。』
老夫人は暫らく案じて居た後、
『さういふ事なれば、折角の御縁組でございましたけれども、致方もないやうに存じます。伴でも居りましたら、何とかお話の附やうもありましたらうが……。それでは兎も角川上へまるつて相談をしました上、改めて私から伺ふ事にいたしませう。』
お石を歸した後、老夫人は磯に有りし次第を告げ、この上は倭文子を引取る外に策があるまいと、磯を具してすぐ川上邸へ出向いて行く。
川上益荒夫妻は磯に暇の出たといふ事情について、いくらか心を惱まし、姑の遺方を面白からず思つて居た際、磯を連て鍋島の老夫人が來られたのを見ると、すぐその事に關した話であらうと悟つたが、併し娘の離縁といふやうな大問題のために、來たものとは夢にも思はなかつたのである。
從つて老夫人が訪問の事情（不義の嫌疑については語らぬ）を語り出た時の、益荒夫妻の驚ろきは一通りでは無つた。益荒の如きは早速喬を呼つけんと迄憤激したが、併し老夫人は今迄姑小姑が如何に倭文子を遇して居たか、また倭文子が如何によく耐忍びて、盡すべきを盡して居たかを語り、この上は倭文子にも迚も堪られぬであらうし、また先方で是非とも離縁する

といふものを、無理に元の鞘へ收めて見たところで、決して倭文子の幸福ではあるまいといふやうな意味を說いたのである。
民子は道に女で、既に自重にさへなつた身の上なり、纏られるものならといふやうな意見であつたが、益荒は男だけに思切もよく、無論餘憤の爲もあるが、斷然此方へ取戻すと云出したのである。民子も强ては爭はぬので、老夫人は兎も角倭文子を自邸へ預かつた上、改めて正式の話を進める事にしようと語り出で、益荒も萬事老夫人に一任したので、すぐその足で久松方へ向ふべく、老夫人は川上邸を辭し去つた。
これより先、正木を歸してまた書齋に閑籠つた喬は、次第に激昂の狀態から回復すると、やがて冷靜な智力が働らき始めた。正木のいふところには怪しむべき點が多々あれば、妹の擧動にも不審の點が少なくない。喬はいろ〳〵と考へて見るが、どうしても正木と倭文子との間がたゞ尋常の關係であらうとは思へぬのだ。併し倭文子と正木との辯明には符節の合すところもある。倭文子は決して不義を働らくやうな女ではないといふ信念が、どこからか閃きかけるとすぐまたそれを打壞して了ふ。
『あゝ、實際姦通して居るか何うか、それを知りたい！』と喬は頭を搔拐つて叫んだ。
その後はがつくりと首垂れて、身動きもせず、たゞ太い溜息が漏れて居たが、暫らくすると

絶望の調子で投げるやうに、
『姦通をして居らんとしてももう駄目だ。母が鍋島へ行つたからは、萬事は既に決したのだ。……節操の疑はしい女に最早未練はない！』
猛然と床を蹴つて立上ると、胸中萬斛の鬱屈を漏らすべく、室の中を荒々しく歩き始めた。
ところへ母親のお石が入つて來る。と見ると、
『おゝ、お母さん、貴母は鍋島へ行つていらつしやつたですか。』と喬はじろりと、恐ろしい眼を母に向ける。
『あゝ、今行つて話を極て來たところです。』と母は喬の容子を見ながらいふ。
『……さうですか。』と喬の聲は震へて、椅子の上に倒れかゝつた。
母も椅子を引寄せて、
『鍋島でもそんな事なら、どうも致方がないといふので、併し彼女が不義をしたといふやうな事は、先方へ云はれぬと仰しやるから、それも尤なので、何も私の方でも嫁に傷をつけて歸すにも當らないのだし、綺麗に話がつきますれば、いゝのだから、家風に合ぬといふ事で出す事にしませうと、打合せて來たところです。』と誇顏に說明する。
喬は暫らく默つて俯むいて居たが、やがて顏を擧ると、眼には異樣の光を持つて、

『お母さん、倭文の離緣は貴母と田鶴の責任ですぞ！』

（二十三）

『あの只今鍋島の夫人がこちらへ居らつしやいます。』
倭文子が自分の小道具や身の廻のものなどを取かたづけて、室の中をきちんと整頓させ、衣服さへ改め、正座して何事をか待設けつゝあるところへ、お富が來てかう云つて出て行つた。
倭文子は待設けつゝあるものゝ遂に來つた事を知つて、先刻玄關に車の引込るゝ音を聞たのは、鍋島夫人が來たのであつたかと始めて首肯かれた。最早自分の運命は決せられたに違ないと觀念しながら、靜かに席を設けて居るところへ、老夫人はお富に導びかれ、左も氣の毒らしく入つて來た。
形式的の挨拶が濟んで、一寸老夫人は云ひ出しかねて居る。
『小母さん、今日は私の事でお出下すつた事と存じます。どんなに御心配をおかけ申しました事でございませう。』と倭文子の詞は亂れず明晰である。
老夫人はこれに緒を得て、
『私は倭文さんにお氣の毒で……まア何からお話をしていゝ事か――』

『ほんとに御心配をおかけ申しまして恐れ入ります。みんな私が悪いのでございますから。お目にかゝるのも面目なうございます。』

『いゝえ、倭文さんに悪いところは少しも有ません。私はどこまでも倭文さんの味方です。』と優しく倭文子の顔を見て、『實は今朝お磯が見えたので、遭つて、詳しい話を聞てるところへ、お石さんが來ましたから、また遭つて見るとその話で、困つた事と思ひながらも、兎も角元園町へ伺つて一通りお話をした上、改めて伺ふ事にしやうと、お石さんを歸すとすぐ家を出て、元園町へお寄申して來たところなのです。』

倭文子は遣瀬ない溜息を吐いた。

『それではもう私は……久松に居られないのでございませうね。』

老夫人は、鼻をつまらせ、

『それもね、倭文さん、まだ確と極つたといふのでもないのです。兎に角私が貴女を預つて歸る事に、今話を極て來たゞけですから……』と言葉を濁しながらいふ。

『さうでございますか。』と倭文子は淋しく受たが、最早自分の離緣は動かすべからざるものと知つたのである。がほつとしながら、『あのそれでは元園町へ歸らずとよろしいのでございますか。……私、もしや川上へ歸れと仰しやつたら、どうしようと存じて居つたところでございます。久松の家を出て二度と元園町へは歸らぬと、立派に父にも申して此方へ嫁つたのでございますから……』と神經的に云つた。

老夫人は氣の毒に堪へぬ樣で、

『私始め悴の考が足らなかつたので、貴女を斯ういふ不仕合せな身の上にしたのですから、倭文さんの爲なら、私はどんな事でも仕てあげるつもりで居ます。元園町へ歸るのがお厭で、鍋島の人になつて下すつたら、それこそ私はどんなに嬉しいか知れないと思ひますよ。』

『小母さん。貴女の御親切は決して忘れはいたしません。ですけども小母さんや直樹さんのせるぢやないんですから……』

『今度のやうなこんな腹の立つ事は有ません。それも悴でも居たら、どうにか仕樣も有つたのでせうに……。私達はほんとに久松を見損つたのです。』

『いゝえ、もうその事は仰しやつて下さいませんやうに……。私、とうに覺悟を致して居るのでございますから……。久松を出されましても、最早二度と良人は迎へません。必らず久松に身の潔白を證據立る考でございます。』

老夫人は言葉もなくて鼻を啜り上る。

『それであの父も母も今度の事を詳しく知りましたのでございませうか。』

『いえ、實はお石さんが正木さんの事を口實に、話を進めやうとなさるから、そんな事を元園町へ取次げるものではないと、私が刎つけたのです。さうすると、いやそれならこの事については何にも云はぬ、たゞ家風に合はぬから、それで話をしてくれとの事でしたので、まアそれならと……元園町へ出ても正木さんの事は一言も云はなかつたのです。』

『おや、さうでございますか。何から何までよく御注意下さいました。』と倭文子の顏には蘇生の色が浮んで、『それで父や母は何と申して居りましたらう？』

『民子さんはどうかして纏まるものならばといふやうなお考のやうでしたが、益荒さんは大層お腹立で、そんな事ならすぐ取戻して了ふと、萬事私にお任せなすつたのです。』

倭文子は默つて差俯むく。父がどれほど驚ろきもし、落膽もしたらうと思ふと、前日姙娠と聞いて喜んだ樣などを思ひ合せ、堪得ぬ胸苦しさを覺ゆるのである、暫らく俯むいて居た後、

『それではあの、私を家風に合ぬから、離緣すると申すのでございますね。』

老夫人は肯づいて見せたが、

『尤も話が確と極つたといふのでもないので……』となほ言葉を濁して、『兎に角貴女もどうにか極るまでは居悪いでせうから、今日は私がお伴して歸る事に、お父さんとも打合せをして來たのです。……手廻りのものだけ持つて居らつしやれば、後はすぐにも屆けて貰ふやうにしますから、早く仕度をなさるやうに……。お話は赤坂へ行つてからの事としませう。こゝでは言ひ悪い事ばかりですから……』

『ハイ……それでは御厄介になる事にいたしませう。』と遺がにこれを限りと思ふとほろりとして、『別に仕度は有りません。このまゝお連下さいまし。革鞄と手提だけも持つてまゐればよろしうございますから。』

『それでは一寸まづ喬さんに挨拶をして來ませう。……尤も私はこゝに待つて居ませうか。』

『いゝえ、小母さんもどうぞ入つしつて下さいまし。』

二人は連立つて喬の書齋へ通る。

喬は餘程冷靜に返つて居て、老夫人の姿を見ると、まづ立上つて慇懃に椅子を進めるのである。

『いゝえ、もうお構ひ下さらないやうに……只今から倭文さんを赤坂へお連申しますから、一寸御挨拶に出ましたゞけで……』

『いや、何かと御老體を煩はして、恐縮の至りです。今回の事は私に取つても此上ない遺憾で……』

老夫人は打解ぬ容子で、

『はい、私も殘念に思ひます。今更何を申しても無駄ですが、私は倭文さんに何の罪もない事をちやんと申殘して置ます。それは貴君も屹度後ではお判りになる事と存じます。悴も彼方へ立つ時それを案じて居ましたので、この事を聞たらどんなにか殘念に思ひませう。……併し貴君はお後で後悔なすつても最早取返しはつきませんから、さう思つてお出なさるがようございます。』

喬は首垂て、

『貴女のお言葉は一々私の胸を刺すやうです。併し私も男ですから、善惡共に屑よくその酬を受ける覺悟です。璧を鑑識する眼がなくて、璧を捨たとすれば、私は長く璧を捨た愚に滿足しませう。』と云つて倭文子に向ひ、『倭文、お前の今迄の好意に對しては、私は滿足して居る。……併し最早再びお前に遭ふ機會はあるまい。……お前は永久に私の手から失なはれたのだ！』

この最後の詞は喬の口を震へて出た。この會見を限りに、倭文子は眞に永久に自分の手から失はれたのであると思ふと、この瞬間喬の胸には、殆んど堪難い痛恨の情が湧返るのであつた。

倭文子はたゞ靜かに、

『はい、最早お目にかゝる折はございますまい。また私も二度と貴郎にはお目にかゝらぬ決心でございます。』と毅然たる語氣で云つた。

喬は何とも云へぬ寂寞に捕はれて無言となる。

『それではお暇をいたします。』

倭文子が老夫人を促がして室を出ようとすると、

『倭文さん。』と喬は後から呼止めて、『あゝ私は馬鹿ものだ！　最早何にも云はぬ。身體を大事にするやうに……』と力を籠て云ふ眼の中には一杯の涙が滿ちた。

喬の涙を認めた時に倭文子の眼にも誘はれて一滴涙が滾れた。

鍋島老伯夫人が倭文子を引取つて赤坂氷川町の邸へ着いた時に、お磯は既に同邸に待受て居た。倭文子が今朝お磯に向つて、すぐまた一緒になれるからと慰さめた言葉は、果して事實となつたのである。

老夫人はまづ倭文子をわが居室へ伴なつて、久松では言惡かつた話をしたり、慰藉の言葉を與へたりして、さて倭文子にと出際に定めて置いた、六疊と四疊半の小室附の瀟洒とした、離の室へ自ら案内してくれた、そこには鏡臺、机、亂箱、違棚、衣桁屏風のやうなものまで最早きちんと取揃へられ、唐木の長火鉢には鐵瓶の湯がたぎつて居て、お磯は今茶道具を按排して

居る。倭文子は自分の家へ歸つたやうに氣が安まり、やがて老夫人が立去ると今までの心の張も弛んで、机に身を投かける、何とも云へぬ身體の疲勞を覺ゆるのであつた。

お磯は悲しい中にも心嬉しく、薩摩の茶器に玉露を入れて、まづ倭文子に一杯を勸める。

倭文子は機械的に茶碗を取上て、咽喉を濕したが、不思議に一杯の茶で滅入る心が引立られたやうな氣がするのだ。

『お嬢樣、貴女は正本さんが、今朝久松さんへ上つた事を御存知で居らつしやいませう。正木さんはお嬢樣のお姿を拜見したと申して居りました。』

倭文子の眼は光を持つたが、すぐ肩で深い溜息をして、

『磯、今朝はほんとに氣が氣ちやアなかつたわ。正木が來て旦那樣と田鶴さんに遭つてる事はお富に聞いて知つたのだけども、私はどうする事も出來はしないのだもの、正木を返したいと思つても、遭ふ事は出來ないのだし、そして何か言合つてる聲は、應接室の外まで聞えてるぢやアないか。もうほんとに……』

『ほんとに、お察し申します。……ではお嬢樣は正木さんと田鶴さんと、何な言合をなすつたかまだ御存知ないのでございませう。』

『あゝ。』と倭文子は目つきでその說明を求める。

『私はもう〳〵腹が立つて悔しくつて……。まアお聞遊ばせ。田鶴子樣は正木さんに面と向つて、戀をした事もなければ、夫人になりたいと騷いだ事も、また僞手紙を出した事もないと、そんな白々しい事を仰しやつて、みんな言懸りにして了ふんださうでございますもの……』

『まア正木の目の前で？　そんな恐ろしい人かねえ。』

『厚かましいんでございますわね。正木さんは人間ならばモ少しどこかに良心がある筈だつて……もう我慢が仕切ずに、田鶴さんの顏へ痰を吐かけて、旦那樣にも隨分酷い事を仰しやつて歸つて入つしつたんださうでございますの。』

倭文子は色をかへて、

『え、まア田鶴さんの顏へ痰を――』

『でもお嬢樣、いゝ氣味でございますわね。』と云つたが倭文子の穩やかならぬ顏を見ると、『でも正木さんは歸つて居らつしやつた時には後悔なすつて、實は餘り癇に觸つたから前後の分別もなくそんな事をして來たが、お嬢樣の爲に全く取返しの附ぬ事になりはしないか、次第によつてはまた謝罪に行つて、その序にモ一度旦那樣に一所懸命說いて見ようかなどゝ、途々思案して居らつしやいましたさうで、私がもうその前にかう〳〵云ふ譯で、鍋島の大夫人がお嬢樣をお引取申しに行つしやつたところだとお話しましたら、漸やく安心なすつて、それなら頭の

一ッ位その上に殴つて來ても善かつたつて、そんな事を仰しやつて居らつしやいました。』

倭文子は默つて居る。

『ですけどもお嬢様、正木さんは貴女がこんな御不幸のお身の上におなり遊ばしたのは、みんな自分が原因だからつて、平生嬉しい事も悲しい事も、表に現はさない方が、それはもうどんなに沈み返つて居つしやるでせう。』

磯は倭文子がなほ默つて居るので、話を轉じ、今日赤坂へ來る途中、偶然藤乃に遭つて、すべての事情を打明けた事を語り出た。そして藤乃が後程訪ねて來る筈であると告げた。

果して藤乃は四時頃まづ電話で差支の有無を尋ねた後、訪れて來たのである。

『倭文子さん。何かの事は先刻お磯さんから伺ひました。……ほんとにお氣の毒とも何とも申上やうございません。』

『私こそ貴嬢にお顏を合はすのもお恥かしうございます。』と先だつものは涙である。

藤乃も共に涙ぐみながら、

『私はたゞお母さんやお義妹さんが、難かしいだけとばかり想像して居ましたのに、まアほんとに驚ろく事許りなんですもの。……貴女はどんなにか心外で居らつしやるでせうね。』

『そりやアね……やつぱし口惜しうございますわ。』

『そんな事で貴女を陷れるつて、……ほんとに酷いわねえ。』

藤乃は今までの倭文子の不幸が、正木との關係を疑はれた爲にあるとは夢にも知らなかつたので、始めて聞知る身にはいよいよ倭文子の爲、深き同情にくれるのである。

『正木さんもどんなに心外で居らつしやいませうねえ。』

この話の間に丁度正木は倭文子を見舞ふべく訪ねて來て、こゝへ通される。正木の顏には全く平生の元氣もなく、二人に挨拶を濟せると、

『私は實にお嬢様に申譯がありません。原因がすべて私にあると思へば、全く胸を裂れるやうな思いたします。』

『いゝえ、貴君のせゐぢやないわ。全く私が不注意のためですから……』

正木は暫らく俯いて默つて居たが、

『私がなまなか貴女のお力にならうと考へて居た事はみな間違で、少なくも私の如きものは、貴女のお力になる事は決して出來るものでないと、深く悟りました。……實はそれで私は直ちに日本を去る覺悟を極ましたから、今日までのお詑旁々その事を申上るため、一寸御邪魔に出た次第なのです。』

倭文子も藤乃も餘り唐突な話なので、驚ろいて顏を見合はせたが、やがて倭文子は騷ぐ胸を

靜めながら、何氣なく、

『それではいつ頃立たうといふおつもりですの？』

正木は今より約二週日の後に獨逸へ行く筈の、大學の某博士に、かねて同行を勸誘されながら、今迄躊躇して居たのであつたが、今朝の事からなまなか日本に留まる事の不利益を悟ると、斷然この機會に日本を去るべく決心し、先刻博士を訪問して同行の依頼をして來たので、川上將軍の同意を得た上、今倭文子を訪ねて來たものとの事であつた。

『それではもうどうしてもお立なさるんでございますね。』と藤乃は心細げにいふ。

『はア、最早動かす事は出來ません。立つ迄には是非貴女をお訪ねして置きたいと、思ひながら此方へあがつたのですが、こゝで貴嬢にお目にかゝつたのは何よりの幸です。……最も今日は私の頭もどうかしてますから、いづれ立つまでになほ改めてお訪ねいたす考ですが――要するにお嬢樣のお身の上をお願ひしたいのです。』

『はい……それはもうお賴が無くとも出來るだけのお力になるつもりでございますから……』

『それだけは是非貴嬢にお願ひ申して置きます。今日迄なまじひ私がお嬢樣のお力にならうとしたのが、慥かにお嬢樣の御不幸の原因となつたのです。……私は閣下にもお嬢樣にも、全く申譯のない人間になりました。』と差俯むく。

倭文子もひどく心の騷ぐ樣で、

『正木、それは私だつて同じ事よ。決して貴君の罪ぢやないんだから、みんな私が惡いんだから……』と次第に神經的になつて、『正木、勘忍して下さいな。』とたまらず顏を蔽ふた。

藤乃は、ひどく此場の光景に動かされたが、不思議に何ものをか語るらしき、倭文子の眼の閃を認めると、終生忘れ得ぬ深き印象をその腦に止めたのである。

（二十四）

倭文子の離緣は遂に正式に行はるゝ事になつた。生れる子は久松の方で引取ると申出たが、倭文子が自分の子として育てると主張したので、久松の方で、結句それを幸ひとし、兩家の間にはこゝにすべての關係を斷つ事となつたのである。

二週間の日子は飛ぶが如くに過ぎて、今日はいよ〳〵正木が渡歐の途に上る當日となつた。同行の博士は西比利亞鐵道を擇んだので、正木も敦賀まで汽車で行つて敦賀から浦鹽通ひの船に乘る筈なのである。

下關直通の急行が出るまでには、なほ四十分あまりの餘裕がある。博士と正木の見送人が可なり多く新橋の停車場へ集まつて居る。云ふまでもなく、大多數は博士の見送人で、單に正

木のみの見送りに來たものは五本の指を折るほどもない位だ。かゝる間に正木自身が最も光榮として喜んだのは、川上老將軍が富美子を連れて、見送りのためにわざ〳〵來てくれた事である。

博士は人々に擁され、階上の食堂に伴はれたので、待合室に居る正木の周圍には二三の親友と、老將軍父子のみが寂しく殘つた。かゝる間に旅客や他の見送人などが次第に詰めかけて來る。その中に人を物色しつゝ入つて來たハイカラ紳士と、同じハイカラ仕立の洋裝美人の姿に大勢の視線が惹きつけられた。老將軍もふとその方を向くと、

『おゝ松平ぢや。』と不快な顏をして呟やいたが、同時に先方でも老將軍を認めたのである。紳士は松平子爵で、左も得意らしく連て居るのが、新夫人の錦子であつた。

『おゝ川上さんでしたか。』と松平は誰にも見する如才ない笑を湛へて、老將軍に會釋しながら詞をかける傍から、錦子もそれとなしに益荒に會釋するが、錦子は正木には知らない顏をしてづいと視線を反して了つた。

『やア、正木君。』と追がに松平は言葉をかけて、同じ笑顏を向けながら、『君はどこへ？　川上さんの隨行かね。』

『いや、獨逸へ行くので——』と正木は無愛相な調子で云つた。

松平はやゝ驚ろき顏に、

『なに獨逸へ？　そりやア盛だね。……君の爲に祝する。』

『松平さん、貴君はどこへお出ぢやな。』と將軍が口を挿む。

『友人が滿韓へ出かけるので、見送りに來たのですが、本人が見えぬので探してるところです。』と云つたが思ひついたやうに、錦子に目配して、老將軍に向ひ『おゝ川上さん、貴君に御紹介いたして置きます。今度迎へた妻の錦子で、どうぞ將來お見知置を願ひます。』

錦子は今までに將軍に遭つた事はないが顏は知つて居る。一足進んで會釋しながら、

『倭文子さんとは兼てお親しく致して居ります。どうぞ此後お心易くお願ひ申します。』と美くしい笑顏を作る。

老將軍はこれに對して形式的の挨拶をする。それが濟むと、

『多分友人は食堂に來て居るでせうから、これで失禮します。』と益荒へは大いに面當の意味もあらう。群集には無論これ見よがしに、松平は錦子と腕を組合ふと、錦子はまた男に身を任せ氣取てスカートの後を取りながら、羽を擴げた孔雀のやうな得意の態度で、兩々相並んで待合室を立去るのであつた。

折柄新橋停車場の正面に一輛の馬車が止つた。中から降立つたのは、倭文子と藤乃とお磯と

である。いふまでもなく三人は正木の見送りに來たのであらう。
『遲くなつたわねえ。』
『でもまだ大丈夫でせうよ。』
語りながら石段を上り、急ぎ足に待合室の方へ來て、中を覗き込む姿を、富美子がまづ認めて、嬉しさうに、
『あら、姉さんが入らしつてよ。』
『おゝ、さうかの。』と老將軍は入口を見やつたが、その間に倭文子は笑顏淋しく父の傍に近づいて、
『遲くなりはいたしませんでしたか。』
『なに、大丈夫ぢや。よく來てくれたの。おゝ遠山さんも一緒ぢや。よく來て下すつたな。』と益荒はいとど滿足の容子である。併し益荒よりも誰よりも滿腔の感謝を湛へたのは、云ふまでもなく本人の正木であらう。
『どうもお嬢樣始め藤乃さんまで、わざ〳〵お出下すつたのですか。……實にお禮の言葉もありません。』
二人の美人の姿は暫しまた群集の注目の的となる。それと語る正木すらも俄かに大勢の視線

を惹く事となつた。
併し相對すると、語るべき事は極めて少ない。
『どうぞお身體をお大事に……御自愛をなすつて下さい。』とそれは正木が倭文子に云つたのだが、この形式的の言葉の中には、多くの熱誠が籠つて居た。
『いゝえ、それはもう心配して下さらないやうに……。貴君こそ身體を大事になすつて、きつと成功して歸つて來て下さい。』
『藤乃さん、貴嬢にお願ひ申した事はどうぞよろしく……』と正木は藤乃に對する。
『いえ、その方は決して御心配遊ばすには及びません。……御成功の上無事に御歸朝をお待申して居ります。どうぞお手紙を時々……』
一言いふさへ氣忙しい中を、更に急き立てるやうに、改札を報ずる鈴の音が聞える。博士の一行がどや〳〵と二階から降て來て道を塞ぐ後から、七八人の紳士淑女に圍まれて降りて來る青年紳士がある。それは滿韓視察に出かけるといふ貴族であらう。この一行同勢に松平子爵夫妻が交つて降りて來た。階下に待つて居た十人ほどの見送人らしいのがこの一行に合する。
この混雜で正木の組は暫らく逡巡つて出口に立つて居たが、藤乃は前の一行の降て來た時に女王の如き驍揚な態度を以て、今目の前を行過る錦子の姿を目早く認めたので、

『あら錦子さんよ。』と囁やいて倭文子に目くばせした。
倭文子は僅かにその横顔を見たゞけであつたが、錦子は何も知らずに行過ぎて了ふ。
『いろ〳〵錦子さんの事については聞てる事があるのよ。いつかお話しませう。』と藤乃は笑ひながら云つて、人が隙いたので前進を始める。
倭文子は默つて藤乃の後につゞく、
乘客も見送人も殆んど改札口に入盡した。博士に尾して正木は前方の列車の中に入る。倭文子と藤乃は松平夫婦の知らずに立つて居る後を通り拔けて正木の列車の前に立つ。席が極ると正木は態と博士の傍を避て、離れた窓際に來て、見送りの人々に對した。
『それではお前が目的を達するまでは、いつまでゞも彼方に居るがよい。決して遠慮は入らんからの。』と谷荒はいふ。
『ハイ、御厚恩は深く骨に銘じて居ります。石に喰ついても、必らず何か成し遂た上で歸つてまゐります。』
『でもね、なるたけ早くお歸りを待つてますよ。』と倭文子は淋しい笑を含んで云つて、藤乃を見返りながら、『ねえ藤乃さん。』
『そうでございますね。御成功の上はなるべくお早く……。倭文子さんとお祈り申して居りま

せう。』
二人はこれだけを云つたゞけで、遠慮して少しく窓際を離れる。
正木は入代つて見送りの友人と詞を交し始めた。忽ち發車の鈴が高く鳴響いて、車掌が見送人を後退させる。
『正木、左樣なら！』と可愛らしく叫ぶ富美子の聲が聞えた。
途端に萬歲の聲がプラットフホームに起る。見送りの學生等が博士の首途を祝ふのである。續いて正木君萬歲と叫ぶものがある。美人が居るので、わざと當つけがましく叫ぶものもある。
倭文子は何か一言云はふとして、つか〳〵と前へ進んだが、同時に列車が動き出したので、立留つてたゞ正木の顏を見た。正木の唇は動いたが、正木は何も云はなかつた。併しこの時倭文子の眼が濕んで星のやうに輝やいたのを認めると、正木の眼にも一杯の涙が浮んだ。
正木はそれを紛らすやうに、プラットフホームに向つて帽子を振始める。
『左樣なら、正木！』と再び富美子の鈴のやうな聲が聞えて、列車は見送人から次第に遠ざかる。
プラットフホームを出盡す迄、正木は列車の窓から顏を出して居たが、藤乃が頻りにハンケ

チを振つて居るのが目に入つた。

（二十五）

倭文子や藤乃が、正木貞雄と新橋停車場に袂を分つてから、滿五年目の夏のかゝり、午後一時ごろ香港山手の病院の應接室に通つたのは、洋裝の遠山藤乃と、日本領事館の書記生である。藤乃の洋裝はすらりとした身體によく映つて、一寸見てはやつと二十二三にしか見えぬ位、前よりは氣高さの一しほ加つた顏には、何か疲勞と懸念の色が見えるのであつたが、書記生は藤乃を椅子に着せて、

『正木君は貴孃がお出になるといふ電報があつてから、大變に心待して居られる容子です。今日は貴孃の着次第私がお伴するやうに云つて置いたですから、定めて今ごろは待つて居られるでせう。』

『あの……病氣は船で出ましたのでございませうか。』

『さうです。船で發病したので、止むなく上陸の上入院されたのです。別にお知己の方もないので、實にお氣の毒でした。』

この話の中に扉が開て、院長の英國人が表はれる。書記生は藤乃を紹介して、わざ〳〵東京

から看護のために來たものである事を告げる。藤乃はこのごろ佛語も英語も自由に話すので、談話には差支がない。院長も非常に喜んで親切に病人の事について語つて呉る。正木は船の中で腸窒扶斯に罹つたので、今日で發病後約十日を經過し、別に惡性といふほどではないが、午後から夜分は熱が高く、時々譫語をいふやうになつて居るとの事である。院長はなほ看護婦長と正木の病室附の看護婦を呼んで藤乃に紹介して呉れた。

藤乃はやがて案内されて、轟ろく胸を鎭めながら、正木の病室に通る。正木は寢て居たが、書記生が聲をかけたので、眼を睜くと藤乃の姿を認め、急がはしく半身を寢臺の上に起す。熱性病患者なので、血色もさして異らず、たゞいくらか瘦が見ゆるだけで、五年前の面影と格別變らぬが、鼻下に濃い髭を立て居るのが藤乃の眼を惹く。

まづ寢臺に近よつた書記生が、

『先刻常陸丸が着くと、早速遠山さんをお迎申して、一先領事館へお伴した上こちらへ御案内したのです。』

『いや、どうも非常に御厄介になります。』とかう云つて正木は藤乃に向ひ、『藤乃さん、貴孃が態々お出下さるとは實に恐縮です。電報も別に打たんでもいゝと云つて置たですが、領事館で心配して打つて了つたので、もう取返しがつかなかつたのです。』と左も氣の毒に堪ぬ風情で

ある。

『でも貴君、こんなところで御病氣になつて、看護の方も無いではございませんか。そんな事を思召して居らつしやると、皆様がどんなにお怨みに思召すでせう。』

書記生は藤乃を殘して病院を立去る。藤乃は病人に障つてはと氣を兼ながら、簡單に自分の立つて來た順序を語る。

『倭文子さんが電報を御覽遊ばして、そりやどんなに御心配遊ばしたでせう。私が香港へ行つて御看病したいと申上た時のお喜びは一通りではございませんでした。倭文子さんが私を勵まして下さらなかつたら、私の參る事も實行が出來たかどうか、分らなかつたのでございます。倭文子さんの代りも私が致しますから、どうぞ二人がお看護をすると思召して、これからは心丈夫に……』と笑顔を見せ、『それに梅小路様も快よく私にお暇を下すつて、すつかり船に乘るまでのお世話をして下さいますし、ほんとに私は皆様の御好意で立つてまゐつたのでございます。』

『實にお禮の言葉も有りません……。私はどうしても快復して、みなさんの御厚意に酬いなければなりません。なァに、滅多に窒扶斯で死やしませんから大丈夫です。たゞこゝまでお出下すつた貴孃には實にお氣の毒で……そのお志だけで充分でしたのに……』とまたしても心苦

しき様である。

『貴君はまだそれを仰しやつて居らつしやるんですか。』と眼を濕ませて、『私、いつそお怨に存じます。』と俯むく。

『藤乃さん。……何も私は他人がましい事を申上るのでは有ません。たゞどうして貴孃の御厚意に酬いやうかと……』

『あれ、それが他人がましいお言葉ではございませんか。』

こゝへ看護婦が來て、正木の腋に驗溫器を挿入してゆく。

『あんまりお話をなすつてはいけますまいね。お熱が出はしませんかしら。』

『毎日もう午後には熱が出るのですが、今日は貴孃もお出になるといふので、今朝からよほど氣分がいゝです。……まだ暫らくお話を伺つても大丈夫で——』とかうは云つたが、大分顏には疲勞の色が見えて來た。それにも拘はらず、詞を續けて、『貴孃のお手紙で大抵の容子は想像して居ますが、お孃様は實際あれからお異りも無いのですか。』

『はい、あの當座の様ではと御心配申して居ましたけれども、絹子さんがお出來なさいましてからは、それにお紛れなさるのでせう、お身體もずつとお丈夫におなり遊ばして、今ではあまり以前とお異りもない位でございます。ほんとにまた絹子さんが、それは〳〵お可愛らしいん

ですから、何もかも絹子さんに慰さめられて居らつしやるんでございます。』
『あゝさうですか。……いやそれを伺つて安心しました。』とほつと息をする時、以前の看護婦が來て驗溫器を取つて見る。三十八度四分に上つたといふ。
それを聞くと藤乃は自分に責任があるやうに胸を傷めて、
『長くお話したのが惡かつたのでございませう。どうぞもうお寢み遊ばして――』
『少し疲れたやうですから、それぢやア暫らく寢さして下さい。貴孃も今日はお疲れでせうから、ゆつくりお引取り下さいませんか。』
かう云つて正木は眼を閉ぢる。
藤乃が一度領事館へ引返して、また病院を訪づれた時には、貞雄は昏睡の狀態にあつた。看護婦は藤乃が來たので患者を託して出て行つて了ふ。藤乃は正木の顏を守つて無量の思ひに暮る。藤乃の正木に對する戀は、五年以前も五年後の今日も少しも變りがない。心の底には同じ熱烈の戀が燃えて居る。而も正木は遂に藤乃の戀に酬ゆる日があるだらうか。あゝ奇しき戀の行末はどうなる事であらう。
『藤乃さん、藤乃さん。』と突然われを呼ぶ聲がする。
『はい。』と慌だしく立つて寢臺に近づいたが、正木は相變らず昏睡して居るのだ。

『指輪――指輪を取つて下さい。』
藤乃はまた驚いてぢつと患者の顏を見詰たが、同じ昏睡の樣で云つて居るのである。
『黑い鞄の中にサックがあります。取つて下さい。』と無意識に起返らうとする。
『貴君、指輪をどうなさるんでございます。』
『取つて下さい！……そして欽めて下さい！』と戀ふるやうに云つてまた身を悶え始める。
藤乃は怪しき心騷ぎを覺えながら、爲すべき術を知らずになほ正木を守つて居ると、貞雄は重ねてまた同じ事を繰返すので、患者の云ふまゝにすれば、或は神經が休まるかも知れぬと、何か不安を感じながらも、室の中にある手提の黑鞄を開て見ると、その底に果して赤皮の小さな指輪のサックがあつて、藤乃はそのまゝ寢臺の傍へ持つて來た。
『正木さん指輪は持つてまゐりました。』
この驛の通じたかどうかは知らぬが、正木は模索するやうに手を伸して、
『指に……指に――』と幽かに呟やくのだ。
藤乃はどうした指輪であらう。若しや獨逸で契つた人でもあるのでは無いかと、いよ〳〵轟ろく胸を制へて、サックを開て見ると、中から純金にルビーで赤十字を嵌込んだ指輪が出た。
藤乃は見覺えのある指輪であると首を傾けたが、すぐにそれは嘗て倭文子の指を飾つて居たも

のである事に心づいた。忘れもせぬ、倭文子は亡母の記念として、大事にそれを指にして居たので、いつか倭文子の手にそれが見えぬやうになつたと思つたのは、まさしく正木に與へた爲であつたのだ。かう思ふと藤乃の指輪を持つ手はぶる〳〵と震へる。正木の模索する手を取ると、自分の震ふ手先で指輪を欲めてやつて、

『正木さん、指輪は貴君のお手にあります。』と聲は震へて顏は蒼白になつて居る。

正木は指輪のわが手に欲められた事を意識したかのやうに、左も安らかに指輪の欲つた方の手で胸を抱いて居たが、やがて唇が神經的に動くと、

『お嬢樣、お嬢樣――私は貴女には一言も申し上ませんでした――併しどれほど深く貴女を慕ひ申して居ましたらう。貴女が私を戀して下すつた事もよく存じて居ります。二人の戀は清い、果敢ない戀でした――お嬢樣の一生を過つたのは慥かに私の責任です――どうぞ私の罪をお許し下さい。』とその眼尻からは滾々と涙が溢れるのである。

この無意識に發せられた言葉は藤乃の胸を微塵に打碎く鐵槌であつた。今この藤乃の胸にすべての不審が明白にされたのである。倭文子の素振にいろ〳〵解得ぬ事のあつたのも、正木が終生獨身を守らうとする理由も、今は一々明らかな說明を得たのである。藤乃は戀の哀に打たれた。自分がもし倭文子の結婚前に氣がついたなら、どんな靈力をもして、二人を圓滿に結び

つける事に勉めたに違ないと思ふ。今も倭文子の爲には自分の戀を捨てる位覺悟の前である。いや自分の戀を捨てゝ二人の爲に盡すべき機會はまた決して失はれたのではないと知ると、到底自分は人の爲に犧牲になる身の上ならば、倭文子のために、この身を拋つ事は何の厭ふところであらうと、健氣にも哀れに考へるのである。

（二十六）

倭文子の離別後、久松喬は殆んど一年間自暴に放縱な生活を續けた後、或女を母も承知の上で引入れた。お石は巧みにこの女に籠蓋されて、遂に籍まで入れて了つたが、それが一筋縄では行かぬ女で、次第にその本性を暴露し、喬も全く手古摺つた許りか、お石までがさん〳〵な目に遭つて、それを離別するまでに、少なからぬ時日と費用を費やしたのである。

お石もこの苦い經驗を嘗たところから、俄かに倭文子を思ひ出すやうになつて、このごろではそれとはなしに、倭文子を出した輕率を悔ゆるやうな口氣を、喬に漏すやうになつた。喬はその後倭文子の事については一言も云はぬが、母に向つては生涯妻を迎へぬと公言して居るので、お石はいよ〳〵心苦しさに責られるのである。

この間に田鶴子の事を逸する事は出來ぬ。田鶴子は嫂の離別後、半年ばかりを經た頃兄が軍

人に嫁がせやうとするのを、田鶴子は軍人嫌ひで、自ら好んで大學出の學士に嫁ぎながら、一年立ぬ中に逃て歸つて了つた。また一年許りは母の許で我儘に暮して居たが、再び世話をする人があつて、或青年實業家に嫁いた。これも次第に家庭が面白くなく、始終田鶴子は實家へ歸つて居たが、株式の失敗で件の實業家が破産をすると、田鶴子を捨たまゝ滿韓地方に身を隱して了つた。それはつひ二月ばかり前で、田鶴子は丁度姙娠中であつたが、それがまたこの二十日程前に流産したのである。

流産後田鶴子の肥立が惡く、産褥熱を誘發し、どつと床に就いたまゝ、この頃は日增に經過が惡く、まるで血の氣のない處へ身體は絲のやうに細つて、誰の目にも恢復は六ケしさうな容態となつた。醫者も恢復を保證せぬので、お石はもう消え入る許り夜の目も寢ずに看護して居るが、人の子には鬼のやうな邪慳な心も、生の子には思ひ知る物の哀の身に泌て、遂に心の角も折れたらしいのである。

『お母さん、兄さんは？』と田鶴子は枕を上て母の顏を見る。

室にはほんやり十燭光ほどの電燈が一ツ點つて居て、それに照し出された田鶴子の顏は寧ろ物凄く、その目には異樣の光が輝やいて居た。

『兄さんは書齋に居ますよ。』と母は優しくいふ。

『兄さんをこゝへ呼んで下さい。』と田鶴子は思ひ込んでいふのである。

『さうかへ。』と一寸わが子の顏を見て、

『それでは今呼んで來てあげるよ。』

喬は母に伴はれて入つて來た。母は喬を枕元に坐らせて、

『田鶴さん、兄さんが來ましたよ。』

『さう。』と半身を起しかける。

『お前、寢て居たらいゝぢやないかね。』

『いゝえ、起なけりやお話しが出來ませんから。』

母に助けられて起直ると、苦しげな息使ひをして、

『あの誰も居はしますまいね。』と四邊を見る。

『誰も居やしないよ。』

『兄さん、私は貴兄に懺悔する事があります。お母さんもどうぞ聞いて下さい。』

『なに？　私に懺悔することがある？』と喬は意外だつたので、不思議さうに妹の顏を窺き込む。

『まア、お前、何をお云だね。そんな事を……身體に障るといけないぢやないかね。』と母は案

じながら娘を見る。お石は別に重大な事とは考へて居ぬらしいのだ。
『いゝえ、是非とも只今申し上ます。それでないと死んでも心が殘りますから……』
『よし、それではどんな懺悔か聞かう。』と喬は面を正した。
『……私は兄さんの敵です。兄さんは私の申上る事をお聞なすつたら、きつと私を八裂にしても飽足ぬほどに思召します。』
『まア田鶴さん、お前、ほんとに何をおいひなのだね。兄妹の中で敵だの何のと……。お前、ほんとにどうかおしなんぢやアないかね。喬、田鶴はどうかしてるのですよ。熱の加減でも――』
喬は靜かに制して、
『お母さん、貴女はお構ひなさるな。云ふだけの事を云はせるがいゝです。何、決して病氣のせゐぢやアありますまい。きつと云ふ事があるのでせう。』
『さうかしら……』
『はい、決して熱のせゐでも何でもありません。申上るだけの事を申上れば、私は安心して死ぬ事が出來ますから……』
田鶴子は苦しさうに言葉を次いで、

『それは外でもありませんが……五年前に兄さんと姉さん――倭文子さんの間を裂いたのは、みんな私のした事でございます。』
『なに？　お前が倭文と私の中を裂いた？』
『はい、倭文子さんには罪も何もありません。私が正木さんを戀して拒絶されたため、嫉妬に驅られて、正木さんと倭文子さんを中傷したのです。』
『ウム……』とぢつと妹の顏を見つめて、『それではお前は、あの時全く正木を戀して居つたのか。』
『はい……正木さんと應接室で言合つた時、私の申したのはみんな出鱈目で、正木さんの仰しやつた事はみんな事實なのでございます。』
母は呆氣に取られて娘の顏を打守る。
喬の顏には何とも知れぬ憤怒と痛恨の色が浮んだが、それをぢつと耐へて、
『それではお前が倭文の僞手紙を書いたといふのも事實か。』
『はい、そして正木さんを丸山へ呼よせて置いて、その時も私から正木さんに結婚の事を迫つたのですが、どうしても正木さんが承知なさらないので、私はもう悔しくつて……此上はきつと復讐をして見せると心に誓ひながら、正木さんには姉さんと貴君の前で懺悔する事があるか

ちと申上げ、姉さんにも來て頂いた上、私はそツと拔て來て兄さんを御案内したのです。正木さんと倭文子さんが、度々公園で密會するやうに申上たのもみんな嘘でございます。』

『田鶴ッ、お前は惡魔だッ！　鬼ッ！』と喬は身震して妹を睨みつめるのだ。

『私は全く惡魔に違ありません。兄さん、どうぞお心の癒るやうになすつて――』

『今更お前をどうしたところで、取返しがつくものか。』

『勘忍して下さい。』

『それで倭文はお前が正木を戀して居た事を知つてるのか。』

『はい、倭文子さんにもお賴みした位ですから……。始めて正木さんが入つしつた時、長くお留申したのも、みんな私のした事で、正木さんは姉さんのお室に居らつしつたのではなく、無理に私の室へお連申して置いたのです。』

『ウム……』

『そればかりでは有ません。倭文子さんの手文庫から出た正木さんの寫眞も、私がいつぞや川上さんへあがつた時、富美子さんがいろ〳〵寫眞を持つて居らつしつた中から、そつと取つて來て大事に藏つて置いたので……正木さんに拒絶された悔しさに、そつと姉さんの手文庫へ入れて置いたのです。』

『あの寫眞までもお前の仕事か。』と腸を絞るやうな聲が漏れて、喬はまた許すまじき眼光で妹を見詰めたが、その本性に立返つた瀕死の妹の、窶れ果た姿を見ると、怒の心も折れて、がつくり首垂て了ふ。

『まア、お前は飛んだ事をしてお呉だつたねえ。』と母は涙を一杯に浮べてハラ〳〵するのだ。

三人はめい〳〵烈しい感情に支配されて暫らく言葉もなく、座敷は、ひつそりと靜まり返つた。やがて首垂れて居る喬の口から呻くやうに、

『あゝ倭文子に濟ん！』と獨語が洩れたが、間を置いて、『鍋島はオセロは大馬鹿ものだと云つた。私はその大馬鹿ものになつたのだ。鍋島にも面目ない。川上閣下にも濟ん！』

『兄さん、勘忍して下さい！』と田鶴子は布團の上に泣倒れる。母は慌たゞしく摺寄つて、その背を撫下しながら、

『喬や……お前も勘忍が出來にくからうけれども。……どうぞ許してやつておくれ。私からも賴みます。』と母は涙を啜りながらいふ。

喬は神經的の笑と共に、

『お母さん、今更勘忍が出來ぬと云つたところでどうなります。田鶴の罪は許すも許さんも有りません。私が始めに餘計な邪推をして居たからこそ、田鶴の中傷も成立したので、私が自分

の愚を責ればいゝのです。』
『兄さん、もう倭文子さんに返つて頂く事は出來ないでせうか。』
喬は默つて居るので、
『ねえ、お母さん。』と母に訴へる。
『さうだねえ……ねえ喬、そんな事にでもなれば、田鶴の罪が消えるといふものだが……』
『お母さん、馬鹿な事を仰しやい！』と喬は聲を勵まして、『倭文を出す時に私は善惡共にその責を甘受すると誓つたのです。蒔いたものを刈るのは當然ですぞ！』
田鶴子は歔欷しながら、
『お母さん、兄さんはさう仰しやつても、……どうかならないものでせうか。』
『いゝよ。お母さんがお前の罪を引受て、どうかなるやうにするから……』

* * * * *

老いて尙矍鑠たる川上益荒は、今香港の遠山藤乃から受取つた書面に、少なからず心を動かされて居る。それは正木の病氣が恢復したので、次の火曜日に船で立つといふ報知の爲ではない。藤乃が倭文子の將來について、重大な意見を申越して來たからである。
藤乃の書面には――病中の看護の間にいろ〳〵の事を知り得たが、倭文子と正木とは、倭文

子の結婚前深き相思の中であつたので、今も正木の倭文子に對する獻身的誠意には少しの變もない、さればこの際若し二人の間を纏むる事が出來るならば、倭文子の將來の幸福と信ずるから、歸つた上では是非お願する考で居るが、豫じめこれに對する御一考を煩らはして置くといふ意が認められてあつたのである。
益荒には倭文子のまだ結婚せぬ前までは、正木と倭文子とを結びつけようと云ふやうな考は夢にも起らなかつた。併し不思議とこの一二年來、さういふ空想が時々老將軍の胸を往來するのである。立派に成功して歸つて來る正木は、決して娘の婿として恥かしくない。一旦人に嫁して子まである娘ではあるが、正木ならば快よく貰つてもくれるだらう。また娘にしても、絕對に再婚を拒んで居るのでもない以上、兄妹同樣に育つて來た正木なら、或は承諾せぬ事もあるまいとかういふ事が胸にある際なので、藤乃の此手紙は全然老將軍の意を動かし、正木が今もそれほどに娘の上を思ひ、娘も豫て思ひ合つた中であるならば、多くの力を勞せずして、この事は成就するに違ないと思ふのである。
益荒は直ちに妻の民子をわが居室へ呼よせ、藤乃の手紙を見せて意見を求めたが、民子にも素より異存の有う筈はなかつた。益荒は喜びながら、
『おゝ、お前も異存がないか。あの通り貰ひ人はいくらでもあるが、外へやらうとすると、倭

文がどうしても承知し居らんのぢや、その手紙を見ると、正木とは豫て思ひ合うて居つたものと見える。今度こそ心配はあるまいと思ふのぢや。』

『さうでございますね。それが前に知れて居ましたら、久松へやる前に何とかしてやりましたものを……』

『今更愚痴を云ふたところで初まらん。それではお前からでも、倭文の意向を聞て貰ふ事にしよう。』

夫婦の間にこの話のあつたその日の午後鍋島老夫人は益荒夫婦を訪づれて、次のやうな意味の話をした。

それはこの日久松の老母の内意を受て來たといふものが、老夫人に面會を求め、五年前の倭文子離縁問題について語り、それにはいろ〳〵の中傷やら誤解やらがあつて、老母も喬もそれに迷はされ、つい離別の不幸を來す事となつたのであるが、今度久松の方にその中傷やら誤解やらの一切が明白になる事があつて、老母はひたすら輕卒を悔い、倭文子追懐の涙に暮れて居るので、倭文子がまだ他に嫁して居らぬを幸ひ、子まで生してある間柄に免じ、狂て戻つて貰ふ事は出來まいかといふ意を申入れたので、老夫人はこれに對し、戻す戻さんの問題は最早既に過ぎて居る。人一人を廢物同様にして置ながら、自分方の都合のよい時に勝手な理窟をつけて、身勝手を云つて來たところで、おいそれと取次がれるものでは無し、また自分にでもこれがわが娘であるなら、一も二もなく綺麗にお斷するところだと云つて歸して了つたが、そのものがまた出直すやうな事を云ひ殘して歸つたので、兎も角この事だけをお耳に入れて置くと云ふのであつた。

益荒も此話を聞くとひどく激昂して、

『それはよくお斷下すつた。乃公は久松からどんなに謝つて來たところで、斷じて娘はやりません。よくまたおめ〳〵とそんな事が申入られたものですな。若し又來居りましたら、川上は恥も義理も知らんものに、娘を戻すやうな毫碌はせぬといふて追返して下さい。……また久松も實に呆れ果た奴ぢや。』

『ほんとにさうでございますねえ……。何か素性の知れぬ女まで引入れて、籍まで入れて居ましたのでせう。さん〳〵そんな眞似をして置ながら、今頃になつて、戻つて來てくれなどゝ、よくまア言へた義理でございますね。』と民子までが呆れ返る。

『よいわ、久松には金輪際娘はやらんから大丈夫ぢや。』と老將軍は意氣込む。

* * * * *

『倭文、モ少しこつちへ寄るがよい。外の事でもないがの……』と益荒は今わが前へ來て手を

支へた倭文子に向つて口を切る。

倭文子は處女の時に比べると、沈んだ陰氣なところが目につくが、血色は寧ろ久松に居た時よりは善く、沈んだ割に若々しいので、今年五歳の嬢の子のある母親とは誰が目にも思はれぬ位だ。

『正木が歸るのもいよ〳〵明日ぢや。その前に乃公はお前の心を極て貰ひたいと思ふのぢやが……民には何か不承知のやうな事をいふたさうぢや。お前も今まで正木を思つて居つたものなら、今になつて別段不足もあるまいと思ふが遠慮なくいふて見てくれ。』

倭文子は一寸顏を染て半俯むきながら、

『思召はどんなに嬉しうございませう。……ですけども。』と躊躇して、『一旦久松へまゐつた身體ですし……旁々只今ではお受を致します事は――』

益荒は氣色ばんで、

『出來ぬといふのか。ウム、何ぢやな、久松からまたあんな話があるので、その方に義理を立ようといふのぢやな。お前、あれ程にされてまだ久松を思ふとるのか。』

『いえ、何も久松から話のある無しに係つた事ではございません。また久松からどんな話がありましても、私、決して二度と歸る積はございません。』

『ウム、さうぢやらう。……久松へ歸る考へがないのなら、正木の妻になれぬ事はあるまい。乃公からの賴ぢや。それは正木に無理强をしようといふのではない。正木が喜んで承知する事を知つての賴ぢや。お前も正木と思ひ合ふた中なら、親の爲に一緒になる位出來ぬ事はあるまいが。』

倭文子は兩親が今頃になつて、こんな騷をするのが恨めしい。兩親は徒に自分の心を騷がせ、苦しめる外には何の効果もない事を、實行の出來るものとして迫るのだ。併し倭文子はどうして兩親に自分の心を知らせよう。益荒は今に倭文子の離緣の眞相を知らぬのだ。自分が今正木の妻となれば、嘗て自分にかゝつた疑はすべて當然事實として認められるやうになるのである。それのみならず、その他にも正木の妻になれぬ重大の理由がある。その通りに正木もまた自分を妻にする事は出來ぬ筈で、到底二人は思ふに任せぬ間柄であると思ふと、倭文子は今更忘れし懊惱の思出に遣瀨のない痛苦を覺ゆるのである。

『ですけれども お父樣、正木も決して、私を妻にする事は出來ない身體でございます。』

益荒は眼を睜つて、

『え？　そりやどういふ譯ぢや？』と急込む。

『私が久松へ嫁ります前、正木は平生獨身主義を持つた男ですけれども、もう將來妻を持つ場

合には、必らず藤乃さんの外には迎へぬと、私と藤乃さんの前で誓つたのですから……そして藤乃さんは長く〳〵正木を戀して居らつしやるのでございます。ですから私は藤乃さんへの義理にも、正木の妻にはなれませんし、また正木も藤乃さんを措いて、私を妻にする事は出來ない筈と考へます。』

益荒はいよ〳〵呆れながら、

『でも正木とお前の間を是非纏めたいと、熱心にいふて來たのはその遠山なのぢや！』

倭文子は俄かに顏を染て、

『え？　藤乃さんから！　でもどうして藤乃さんからそんな事を――？』

益荒は香港から藤乃の手紙の來た次第を話した上、別に差支がないので、その手紙を取出して倭文子に見せた。

倭文子はそれを見ると、一切の事が明白になつた。自分と正木の精神上の祕密は、遂に藤乃に發見されたのである。そして藤乃はそれを知ると同時に、十年の間培はれた熱烈の戀を捨て、二人のために犧牲にならうと覺悟したものである事が、明らかに推察せられる。倭文子は云知らぬ恥かしさと藤乃の俠氣とに打たれて、暫らくは言葉もなく涙ぐんで居たが、聲を震はせて、

『お父様、私は藤乃さんの美くしいお心を察すると、どうしても正木の妻になる事は出來ません。私はどんな事をしても、藤乃さんを正木に添はせてあげます！』と思ひ込んでいふのであつた。

（二十七）

鍋島家には日光の外にも泉州の濱寺に別邸がある。倭文子は正木の妻にもならず、久松へも再嫁すまじと決心して、東京に居る心苦しさに、正木の歸朝を迎へた後、今も昔も變らず傍に事へて居るお磯を連れ、娘の絹子ともゞ〳〵濱寺の鍋島の別邸へ來て居るので、世は早くも夏の眞盛りとなり、倭文子がこゝへ來てからも凡そ二週間を經過した。

倭文子は東京を離れて見ると、遏がにまた戀しさの堪得ぬ許なのを、僅かに絹子一人に慰められ、語らう友もなき夏の日長を淋しく送り送へるので、絹子が傍を離れて居ると、何とも云へぬ心細さに襲はれるのである。なぜこんなに淋しいのかと、時には自分でも怪しむほどであるが、今も先程から磯と絹子が遊びに出たまゝ歸つて來ぬので、風通りの善い椽端に端居したまゝ、物思ひに暮て居ると、ちやら〳〵と雪駄の音を立てゝ庭を入つて來た絹子、

『母様！』と母の傍へ走り寄つて、『あの母様、明日ね、花火だの、お芝居だの見に行くのよ。

花子ちやんと一緒に行くのよ。』
どこやら喬に似た面さしの、何とも云へぬ愛くるしいわが子の顔を、倭文子は笑しけに打守りながら、
『まア、どこに花火やお芝居があるの？　公園でかへ？』
絹子の後から附て入つて來た磯が、
『いゝえ、奥様、あの何でございますよ。松原のずッと南の方に――こゝからは七八町もございませう。大阪の藤田とかいふお金持の新麁の洋館が有りますが、明晩その新築の披露とかを致すのださうでございます。今花子さんを女中さんが遊ばして居らしつて、そのお話が出たものですから、お嬢様も俄かに行つしやりたくなつたのでございます。』
『まア、さうかへ……それでは仕方が無いわね。絹さんは行けないでしよ。お招待の人ばかしが行んですからね。』
『いや、母様、私行くのよ。花子ちやんと一緒に行くのよ。』と絹子は承知しない。
『でもお招待でないところへ行つたら、恐い叔父さんに叱られますよ。絹さんは母様がいゝところへ連てつてあげませう。ねえ、磯、……千日前がいゝわねえ。絹さんは千日前おいやッ？此間行つて來たでせう。』

『あゝ、さうでございますね。よつほど千日前の方が面白うございますね。』
『私も面白い事よ。母様、千日前連てつて下さいな。』と子供は罪がない。
『それでは連てつてあげますから、明日花子さんと行くなどゝ仰しやらずに大人にして居らつしやい。』
絹子はそれで兎も角も得心する。こゝへ話の出て居た花子のお母さんと云ふのが、倭文子に遭たいとて訪ねて來た。松本といふ別荘の奥さんで年は三十位、鍋島邸とはあまり離れて居らぬので、夕暮の散歩などに、倭文子と二人ちよい〳〵顔を合はすところから、このごろでは兩方で言葉を換すやうになつた許か、子供同志の花子と絹子は、とうにもう友達になつて居るのであつた。
松本夫人は早速座敷へ通され、双方一通りの挨拶を濟せると、
『いつも花が出まして、お土産ばかり頂戴してまゐりますので、誠にお氣の毒に存じます。どうぞもうお構ひ下さいませんやうに……』
『いゝえ、私どものこそ毎々あがりまして、嘸お邪魔を致します事でございませう。ほんにまだちつとも間分がないのでございますから……』
『どう致しましてよくお分りで居らつしやいます。それにお躾がよくつて居らつしやいますか

ら、花にはもう願つてもないお連と喜こんで居るのでございます。』とお世辭を云ひながら母親の傍に柔順しく坐つて居る絹子に、愛想の善い笑顔を向けて、『お嬢様、まアほんとにお可愛らしくつて居らつしやいます事……よく花とお遊びして下さいますのね。』

『小母ちやん、花子ちやんなぜ連て來ないの？』

『おゝよくまア花の事を……。お嬢様今日はね、花を連てまゐりませんけれどもね、明晩はね小母ちやんが花と一緒に、貴嬢をいゝところへお伴いたしませう。貴嬢、來て下さるでせう。お母様にもね、是非來て頂かうと存じて、只今お邪魔にあがつたのでございますよ。』と今度は倭文子に向ひ、『あの今日お邪魔に出ましたのは外でもございませんが、手前どもと至つて懇意に致して居ります藤田と申すものが、今度この先の方へ別宅を建まして、それが出來上りましたものですから、明晩夜會のやうな眞似を致す筈なのでございます。藤田の主人は獨逸にも長く行て居りまして譯の分つた男でございますが、家内は私と同窓でございまして、兼て私から貴女のお話を致しましたり、また當人もよそながら貴女をお見かけ申して居りますさうで、丁度花と一つ上の女の子もございますし、旁々是非お近づきになりたいと申しまして、まだお馴染にもならぬに、御招待申して失禮になるかも知れぬが、明晩お繰合の上お出を願ふやうに、どうかお願して見てくれぬかと、くれ〳〵も私への頼なのでございます。』

倭文子は迷惑な事と思ひながら、

『どうもまア有難う存じます……。折角の思召を、あの何でございますけれども……、私は東京でも引込んでばかり居りまして、人樣の中へ出た事はございませんし、それに此方はお近付の無い方ばかりですから、何だか晴がましいやうな心持が致しまして……。いづれ藤田さんの夫人には、お目にかゝる事といたしますけれども、明晩だけはどうぞお免し遊ばして――』

『あれ、貴女、そんな御遠慮を仰しやらずに、どうぞお氣輕にお越を願ひたうございます。濱寺に家を持てお出の奥樣やお子樣方はみなお出でございますし、それでは貴女ばかりが除物になるのでございますから……どうぞ濱寺に來て居らつしやる方の懇親會を開くのだと思召してお越を願ひます。それにお子樣方のお慰みに、仕掛花火やお伽芝居がございますから、是非ともお嬢樣をお連遊ばしまして……ねえ、絹子さん、花火や桃太郎などのお芝居がまアどんなに面白うございませう。貴嬢もどうぞお母樣をお勸め下さいまし。』

『母樣、私行たい事よ。母樣、行つて下さいよう。』

『奥樣、お嬢樣もあんなに仰しやつて居らつしやいます。どうぞお嬢樣のお伽を遊ばすと思召してお越下さいまし。私がお伴を致します。夕景から涼みがてらの夜會ですから、みな浴衣掛の至つて平民的に致す筈なのでございます。』

『母様、私行たい事よ。』
絹子に縋られると倭文子はもう拒む事が出來なくなる。自分は辛い思ひをしても、絹子さへ喜べばそれでよいと覺悟して、
『それでは折角のお詞でございますから、これを連れてあがる事にいたしませう。』
松本夫人はいたく滿足しながら、絹子にお世辭の有たけを振蒔て歸つて行く。
明る日の夕景には倭文子は絹子に可愛らしい桃色の洋服を着せ、松本夫人に伴はれて、藤田家の招待會に臨んだ。倭文子の思つて來たよりは大仕掛で、新築の家屋の周圍は美くしくハイカラ風に裝飾され、大阪や堺邊からも來賓があつて、なか〳〵雜沓を極めて居る。新建の洋館は殘らず開放し、大廣間を立食場に宛てある外、廣い松林を取込んだ庭園には、數々の模擬店が出來て客を接待して居るのだ。
倭文子は早速主人夫婦に紹介されたが、如才のない親切さうな人達で、大變に倭文子の來た事を喜び、何かと好遇つて呉れるので、倭文子も始めはその大仕掛なのに臆しながら、招待に應じた事を滿足するやうになつた。わけて絹子がそこ〳〵で可愛がられるので、一しほ嬉しさを感じて居たが、その中に藤田家の少主人孃を始め、花子などの子供仲間が絹子を連てどこかへ行つて了つた。倭文子は何の心配もないと思ふので、安心しながら自分は松本夫人に伴はれ

庭の方を出歩いて見る。夫人は倭文子を引廻はして歩く事が得意らしいので、遭ふ程の人に自慢らしく紹介する。倭文子は迷惑ながら、人の親切を無にせまじと云はるゝまゝに引廻されて居た。
兎角するほどにお伽芝居が庭の舞臺で始まつたので、倭文子は二三人の夫人連と暫らくそれを見物して居たが、今夜は風が無く、蒸暑さに堪へぬので、松本夫人と共に群集の間を拔け、此方の人氣なき松影に來て休んで居た。丁度十三夜の月が冴て居るのに、庭にはところ〴〵上方好の篝火を釣つて居るので、晝程に明るく、松原越しに見渡す海原には、白銀の波が碎けて居る。何となく趣味ある風情なので、倭文子は暫らく恍惚となつて居る時、男の話聲が耳に入つたので、ふとその方を見ると、滿面に月を浴て、フロックコートの紳士とカーキ色の軍服に參謀の飾緒をつけた陸軍々人が今わが一二間の手前を行過つゝあるのである。幸ひこちらは暗いので先方では心づかぬ樣であつたが、倭文子はフロックコートの紳士は今日の主人の藤田であると知ると共に他の軍人を認めると、
『おや！』と幽かに呻くやうな叫を發した。松本夫人はそれとは心づかぬ樣で、
『奥樣、只今の方は參謀本部に居らつしやる、久松と仰しやる大佐ですが、こゝの主人とは獨逸で大層懇意になさいましたさうで、何でも昨日から來て居らつしやるのでございますよ——

お丶、貴女どうなさいました！』

何事ぞ、倭文子はあはや後へ仰反つて倒れやうとするところを、僅かに松本夫人に抱止られたのである。疑もなくお伽芝居を見て人込のため逆上た結果であらうと夫人は考へた。幸ひそこへ接待係の男が來かゝつたので、倭文子の身體は大勢に心づかれぬ中、そつと家内へ運び込まれたのである。

此間に時は次第に流れて行く。久松大佐は藤田に分れて、獨り松林の中へ入込み、葉越の月を見上て居る中、ふと六年昔の丸山の月の夜を思ひ起すと、今更のやうに自分の愚を悔んで地團駄を踏んだが、途端にちよろちよろと小さな姿がわが前に表はれた。と思ふと立止つて大佐を見上げたが、すぐまた彼方の賑やかな方へ行かうとするのである。

何心なく大佐が見下したのはわが實子であらうとは知る由もない。たゞ絹子の桃色の服を着た姿が、如何にも可憐に見えたので、大佐は何の考もなしに、

『孃さん。』と優しく呼止て見た。

『小父さん、母様は？』と軍服姿を恐るゝ風情もなく、人懐こく大佐に近づくのである。

『母様を見つけて居らつしやるんですか。』

『あゝ、私、眠くなつたから、歸りたいのよ。』

『さうですか。それは困りましたね。……母様を見つけてあげませう。さア入つしやい。』

この時忽ち西手の方がパット色火に照し出された。

『おゝ仕掛花火だ。』と喬は叫んだ。

『小父さん、見せて頂戴！』と絹子は喬に取縋る。

喬はそのまゝ絹子を抱上ると、軍服を着た大の男が駈足の態度で他愛もなく、松原の中を走り出すのである。漸やく立木の中を抜けて海手の砂原へ來ると、障るところもなく仕掛花火の全體が見渡さる。

『さア、こゝならよく見えますよ。あゝ綺麗々々！』と絹子を見ると、一心に眼を丸くして見詰て居る。

松原の中では判然としなかつた顔が、今眞晝のやうに燃る仕掛花火の光に、鮮かに照し出されたのを見ると、怪しく喬の胸は波立ち始めた。思ひなしか抱た子の顔立は倭文子の顔をそのまゝである。喬は今の先倭文子の事を思つて居たので、何か幻想の作用ではあるまいかと疑つて見たが、もしそれが幻影であるならば、今濱寺に來て居る自分も幻影であらねばならぬ。喬は一心に絹子の顔を見詰て居る中、絹子はたゞ一心に花火を見詰て居る。その中花火は次第に消えて來て、絹子の丸くなつた眼は、その反對に細くなり始めた。

まさかに倭文子の子がこゝらに來て居る筈はないと思ふので、喬は全く縁も由縁もない他人の空似なのであらうと、漸やく心を鎭めながら、

『孃さん、もうあちらへ行ませう。』と抱いたまゝ踵を返して、『貴孃のお名は何と仰しやいます。』

『絹子。』と可愛らしく答へる。

『絹子さんですか。いゝお名ですね。』

絹子はもう居眠を始めて居るのだ。

『絹子さん、また鳩が止りましたね。』と笑ふと絹子も細い眼をしてにつこり笑ふ。

『それぢやア小父さんに抱れてお眠りなさい。母樣を見つけてあげますから……絹子さん、小父さんに母樣のお名を仰しやい。』

『え、母樣のお名？……母樣は母樣なのよ。』と半分眠りながらこれだけを云ふと、もう他愛もなく、喬の胸に頭を押しつけて寢入つて了つた。

喬は藤田の家内のものに遣へば、この子の母親は知れるであらうと、洋館を目指て引返して來たが、ふと人氣のない榻を見つけると、絹子をすぐ母親に手渡すのが本意ないやうな出來心に驅れて、そのまゝ榻の上に腰を卸して見た。そして飽ぐ幼兒の顏に眺め入るのである。始め

て見た武骨一遍のむくつけき我を信じて、かくまで無邪氣の天使の如く我腕に眠るこの可憐兒は、そも何人の愛兒であらう。自分が最愛の倭文子に生せた子も、最早この位の年頃にはなつて居るであらう。倭文子の子であれば、無論この子のやうに、倭文子にも似て居るであらう。

喬は抱ける子に對して樣々に思ひ亂れた。

『馬鹿な！　倭文子がこんなところに來て居るものか。』と呟やきながら、漸やく絹子を抱て榻を離れやうとする時、

『おや、まア絹子さんが――貴君のお膝で眠りましたのでございますか。ほんとに罪のない。』と呆れ顏に聲をかけたのは松本夫人である。

『や、これは貴女のお子さんですか。』と喬は何とも云へぬ失望を感じながら云つた。

『いゝえ、さうではございません。この子の母親が歸りますので、今私がこの子を見つけに參りましたところでございます。』

『あゝさうですか。』と喬は救はれたやうに云つたが、不思議にその母親の名を尋ねる勇氣は無かつたのである。

『それでは私が頂戴してまゐります。』と夫人は絹子を抱取つて、久松に會釋しながら立去り行く。

喬は茫然としてその後を見送つて居たが、絹子の母親も今まで來て居たといふならば、自分がその姿を認めぬ筈もなく、これから考へても、絹子は全く他人の空似に違ひあるまいと、われから道理づけて空想の火を消した。

（二十八）

今藤田夫人に手を取れて力なく玄關を下るのは倭文子で、松本夫人は絹子を抱てその後に從つた。玄關には一輛の俥が廻されて居る。倭文子が助けられてそれに乘る。後から松本夫人は絹子を抱取せる。倭文子はいとゞ氣の毒に堪へぬ風情で、

『ほんとに始めてあがりまして、御取込の中で、飛んだ御心配やらお手數をかけ、何とも申譯がございません。』

『いゝえ、却つて私共こそお氣の毒に存じます。混雜の中でちつとも行屆きませんで、どうぞこれにお懲なく、是非またお出直しをお願ひ申します。いづれ私から伺ひますが、どうぞお大事に遊ばしますやう……』

俥で歸れば只一息の場所である。俥の上で倭文子は、今眼を醒して居る絹子に向つて、

『絹さん、今夜は面白かつたかへ。』

『あゝ。』と首肯いて、『母樣、私ね、小父さんに仕掛花火見せて頂いてよ。そしてあの、小父さんに抱こして、眠して了つたのよ。』

『まア、さう、いやなお子ですね。藤田の小父さんにかへ。』

『いゝえ、軍人の小父さんなのよ。』

『え？　軍人――？』見る〳〵倭文子の顏色は變つて、胸には高い動悸を覺えながら、『そしてあの肩から綺麗な房の下つた――お鬚の生た、大きな恐い小父さんではなかつたかへ。』

『あゝ、さうなの。』と無邪氣に、『だけども母樣、ちつとも恐い事無くつてよ。』

『……さう。』と母親の聲は震へる。同時に胸が張裂く程に込上て來て、眼には一杯の涙がきらきらと輝いた。

*　*　*

喬は他人の空似であらうと道理つけながらも、何か心が殘つて、それからそれと空想の絲を引きながら、頻りに倭文子戀しさに、獨り群集と離れて、月下の松原を漫歩して居たが、三四十分を過ぎたと思ふ頃、横合から、

『おや、久松さん。こゝに居らつしやいましたか。』と聲をかけたのは藤田夫人である。

『はア……月がいゝものですから……』と紛らして、『あゝ奥さん、一寸伺ひたいのですが、先

刻私が可愛らしい女の子の相手をして居る中に、その子が私の腕に眠つて了つたのです――』

『さうでございますつて、あの子が歸りましてから、松本の奥さんに伺ひました。御容子にも似合ない、何といふ貴君はお優しいのでございませう。おほゝ。』

『なに、大變に可愛らしい子でしたから……。あの子の兩親はこの土地に居るのですか。』

『はい……實はあのお子の母親には、私も今日始めて遭つた位でございますから、まだ詳しい事は一向存じませんが……二週間許前、あのお子を連れて、東京から此方へ見えたのでございます。』

『さうですか。それで母親の名は何と申しますか。』

『お名はまだよく伺ひませんが、苗字は川上さんと仰しやいます。』

『え、川上ですか。』と喬は顏色を變て、『そしてどこに來て居るのですか。』

喬の餘りに熱心な容子を夫人は怪しみながら、

『東京にお住居の鍋島伯爵の別莊が、この六七町北にありますが、そこに來て居らつしやるのでございます。』

『鍋島の別莊――！』とかう叫んだ喬の聲は異樣に顫へて、その眼には爛々と火を點ぜられたが、『さうですか。』と夫人の前强て何氣なく云つたのが、深い溜息と共に出たように聞えた。

『久松さん、貴君はもしや御存知で居らつしやいますか。』

『いや、なに……友人の妻で離別された女ではないかと思つて見たのですが……併し鍋島の別莊に來て居る筈は有りません。』と僅かに紛らして云つた。

此夜喬は殆んど眠る事が出來なかつた。翌朝早く起出すと、散歩に出かけると告げて只一人藤田方を立出たのである。

海岸の松原傳ひ、喬は北へ〳〵と進みながら、土地のものらしいのに鍋島の別莊を尋ねるとつい彼處に見えるのが夫と敎へて呉れた。云はれるまゝに來て見ると、そこは別莊の裏手で、柵を結繞らしてあるが、これも松林を取込んだ奥の方に建物があるので、絹子の聲でも聞えるかと、耳を濟して見たが、ひつそりと靜まり返つて居る。裏門は明て居るが誰もその邊に居さうに思はれぬ。喬は門の邊を立去りかねて居る中、意外にもひよつくり松林の中から裏門へ現れた女がある。女は門に立つ人影に心づいて、ふと見ると忽ち釘づけにされたやうにそこに立縮んだ。

同時に喬の口から、

『おゝ、倭文――さん！』